

山形県埋蔵文化財調査報告書 第26集

平形遺跡・周辺遺跡

発掘調査報告書

1980

山形県教育委員会

ひら かた
平 形 遺 跡

わた まえ
渡 前 遺 跡

なか きょう でん
中 京 田 遺 跡

発掘調査報告書

昭和 55 年 3 月

序

藤島町平形遺跡群は、庄内平野のほぼ中央部を占める位置にあり、平安時代より中世に至る遺跡が数多く分布しています。古くから出羽国成立時の国府所在地に擬定されている場所でもあります。昭和の初年ごろ、この周辺から柱根や土器などが大量に出土したと聞きます。

昭和47年度より、この地区に赤川右岸地区県営大規模圃場整備が実施されることにより、これに先立って昭和45年より6次にわたって藤島町教育委員会により小発掘をともなう遺跡確認調査が行われました。この結果にもとづいて、種々協議を重ね、昭和51年より53年まで遺跡群の一部について、記録保存のための緊急発掘調査を県教委文化課が担当して実施いたしました。

その結果、国府であったことを示す遺跡は確認できませんでしたが、平安時代前期からの建物跡等が數々発掘され、さらに平形館を中心とする中世に及ぶぼう大な資料が出土しました。そして土壘を残す平形館の一部は、圃場整備事業より除外され、昭和52年10月12日、県指定の史跡として現状保存されることになりました。

本報告書は、51年度より実施され53年度まで継続された発掘結果をまとめたものであり、執筆・編集を、今年度新たに設置された庄内教育事務所埋蔵文化財調査室に委嘱して、この度完成をみることができました。

発掘調査にあたって御協力いただいた赤川土地改良事務所、地元土地改良区、平形とその周辺の部落の方々、藤島町教育委員会などの各位に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和55年3月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

例　言

1. 本報告書は昭和51年度から実施した圃場整備事業に係る平形遺跡のV・VI・VII次調査と、昭和52年・53年度に実施した渡前遺跡のI・II次調査および、昭和53年度に実施した中京田遺跡の発掘調査報告書である。

2. 掘図縮尺は、遺構については40分の1を原則とし、井戸跡・土壌については20分の1とした。遺物は土器を3分の1、木製品を2分の1とし、それぞれにスケールを示した。掘図の記号は、SB—掘立柱建物跡・SK—土壌・SP—ピット・SD—溝跡・EB—掘立柱建物跡を構成する柱穴・SX—性格不明の土壌となり、遺構は全体にそれぞれ一連番号を付けた。

3. 調査体制はつぎの通りである。

平形遺跡

第V次調査 佐藤庄一 野尻 侃 名和達朗（山形県教育庁文化課）

第VI次調査 佐藤庄一 野尻 侃 尾形與典 渋谷孝雄 名和達朗 阿部明彦
茨木光裕 佐藤正俊（山形県教育庁文化課）

第VII次調査 佐藤庄一 野尻 侃 渋谷孝雄 茨木光裕（山形県教育庁文化課）

渡前遺跡

第I次調査 佐藤鎮雄 佐藤正俊（山形県教育庁文化課）

第II次調査 佐藤庄一 茨木光裕（山形県教育庁文化課）

中京田遺跡

佐々木洋治 渋谷孝雄 野尻 侃（山形県教育庁文化課）

4. 本報告書の作成にあたっては、山形県教育庁庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が担当し、川崎利夫・佐藤庄一・野尻 侃・長橋 至が執筆した。編集は野尻 侃・長橋 至が行った。

5. 調査に際しては赤川土地改良事務所・藤島町教育委員会・平形部落などの関係諸機関の協力を得て実施された。ここに記して感謝を申し上げる。

目 次

序 例 言

I 遺跡の位置と環境

1 節 立地と環境	1
2 節 周辺の遺跡	3
3 節 調査に至る経過	3

II 平形遺跡

1 節 調査の概要	
1. 調査の経過	5
2. 遺跡の層序	8
2 節 発見された遺構	
1. 白山地区（F地点）	10
2. 平形館地区（G地点）	13
3. 跨り地区（D地点）	17
3 節 発見された遺物	
1. 土器	
土師器	39
須恵器	40
赤焼土器	43
中世陶器	48
2. 墨書き土器	56
3. 木製品	58
4. その他の遺物	60

III 渡前遺跡

1 節 調査の概要	
1. 調査の経過	62
2. 遺跡の層序	64
2 節 発見された遺構	65
3 節 発見された遺物	71

IV 中京田遺跡	
1 節 調査の概要	
1. 調査の経過	74
2. 遺跡の層序	74
2 節 発見された遺構	77
3 節 出土遺物	81
V 総 論	87

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置・分布図	2
第2図 平形遺跡・渡前遺跡全体図	6
第3図 平形遺跡基本層序図	9
第4図 F地点SE39	10
第5図 F地点全体図 (1)	11
第6図 F地点全体図 (2)	12
第7図 平形館跡字切図	13
第8図 G地点調査区	14
第9図 G地点南部調査区	15
第10図 G地点北部調査区	16
第11図 D地点調査区全体図	18
第12図 D地点 SB55	19
第13図 D地点 SB376	22
第14図 D地点掘立柱建物跡柱穴掘り方土層図	23
第15図 D地点 SB400	24
第16図 D地点 SB150	25
第17図 D地点 SA501・502	26
第18図 D地点 SA503	27
第19図 D地点 SE2	28
第20図 SK群	30
第21図 D地点(笠地区)遺構図	32
第22図 D地点 SB102	34
第23図 D地点 SB8	35
第24図 D地点 SB117	36

第25図	D地点 SB 103	37
第26図	D地点 SB 110	38
第27図	土師器	39
第28図	須恵器（1）	41
第29図	須恵器（2）	42
第30図	赤焼土器（1）	44
第31図	赤焼土器（2）	45
第32図	赤焼土器（3）	46
第33図	赤焼土器・かわらけ類	47
第34図	G地点珠洲焼系中世陶器拓影	49
第35図	G地点珠洲焼系中世陶器（1）	50
第36図	G地点珠洲焼系中世陶器（2）	51
第37図	G地点珠洲焼系中世陶器（3）	52
第38図	G地点越前焼系中世陶器	53
第39図	赤焼土器・かわらけ・土鍤・鍋把手・古瀬戸系陶器	54
第40図	その他の陶磁器・紡錘車	55
第41図	墨書銘	57
第42図	蕨手文様の墨書土器	58
第43図	出土木製品	59
第44図	金属製品	61
第45図	D地点（跨り地区）遺構図	20
第46図	渡前遺跡全体図	63
第47図	渡前遺跡層序図	64
第48図	渡前遺跡遺構図	65
第49図	渡前遺跡SB51	66
第50図	渡前遺跡SB52	67
第51図	渡前遺跡SB53	68
第52図	渡前遺跡SD 7・17・S×18	69
第53図	渡前遺跡SD 1・SK 6	70
第54図	出土土器	72
第55図	中京田遺跡全体図	75
第56図	中京田遺跡遺構図	76
第57図	中京田遺跡SB100	77
第58図	中京田遺跡SB170	78
第59図	SE 80	79

第60図 中京田遺跡土壤図 (SP 20・SK 36・SK 49・S×187)	80
第61図 須恵器・赤焼土器・珠洲焼系陶器	82
第62図 中世陶器拓影	83
第63図 木器類 (1)	84
第64図 木器類 (2)	85

図版目次

図版 1 平形遺跡F地点近景	F地点近景
図版 2 F地点曲物出土状況	F地点土器出土状況
図版 3 F地点紡錘車出土状況	G地点平形館跡土壙断面
図版 4 G地点土器出土状況	G地点土器出土状況
図版 5 G地点銅鏡出土状況	D地点線刻土器出土状況
図版 6 G地点南部精査区全景	G地点SD1・SD2断面
図版 7 G地点SD3・SD4断面	G地点SD5断面
図版 8 G地点SD6・SD7断面	G地点SD12断面
図版 9 G地点SD13断面	G地点SQ15
図版10 G地点北部精査区全景	G地点北部精査区西側全景
図版11 G地点北部精査区東側全景	D地点(笠地区)発掘区
図版12 D地点(跨り地区)発掘風景	D地点(跨り地区)近景(北→)
図版13 D地点SB55・SB376近景	D地点SD123他
図版14 D地点SA501・503	D地点SB55
図版15 D地点SB376	D地点SB150
図版16 D地点EB260	D地点EB349
図版17 D地点S×3土器出土状態	D地点SE2掘り方
図版18 D地点SE2上部井戸桿	D地点SE2井戸桿
図版19 D地点SE2井戸桿組部分拡大	D地点SK138断面
図版20 D地点(笠地区)作業風景	D地点SD104・SD105
図版21 D地点SB8・SE2	D地点SB103・SB117
図版22 D地点SB102	D地点EB13
図版23 D地点SB8・SB102・SB110	D地点EB98
図版24 D地点EB48	D地点SE2土器出土状況
図版25 D地点SE2	D地点SK128土器出土状況
図版26 D地点RW2出土状況	D地点RP3出土状況

図版27	珠洲焼系陶器（外）	珠洲焼系陶器（内）
図版28	珠洲焼系陶器（外）	珠洲焼系陶器（内）
図版29	珠洲焼系陶器	珠洲焼系陶器
図版30	珠洲焼系陶器（外）	珠洲焼系陶器（内）
図版31	珠洲焼系陶器（外）	珠洲焼系陶器（内）
図版32	越前焼系陶器（外）	越前焼系陶器（内）
図版33	かわらけ類（外）	かわらけ類（内）
図版34	古瀬戸焼系陶器（外）	古瀬戸焼系陶器（内）
図版35	青磁（外）	青磁（内）
図版36	近世陶器類（外）	近世陶器類（内）
図版37	古瀬戸系陶器	金属製品
図版38	出土木製品	
図版39	D地点出土墨書き土器（1）	
図版40	D地点出土墨書き土器（2）	
図版41	D地点出土墨書き土器（3）	
図版42	中京田遺跡出土木製品	

I章 遺跡の位置と環境

第1節 立地と環境（第1図）

山形県南部・朝日連峰を中心とする峰々に源を発した最上川は、県内を北流し、置賜・村山・新庄の各盆地をうるおし出羽山地の最上峠を抜け庄内平野に入る。庄内平野はこの本県の母なる川最上川により南北に分けられ、南半部は出羽丘陵羽黒山系に源を有し西流する京田川、朝日山地に発し北上する赤川、及び大山川・藤島川等、北半部は出羽山地に源を発する日向川・月向川・荒瀬川等の大小河川により形成された沖積平野である。

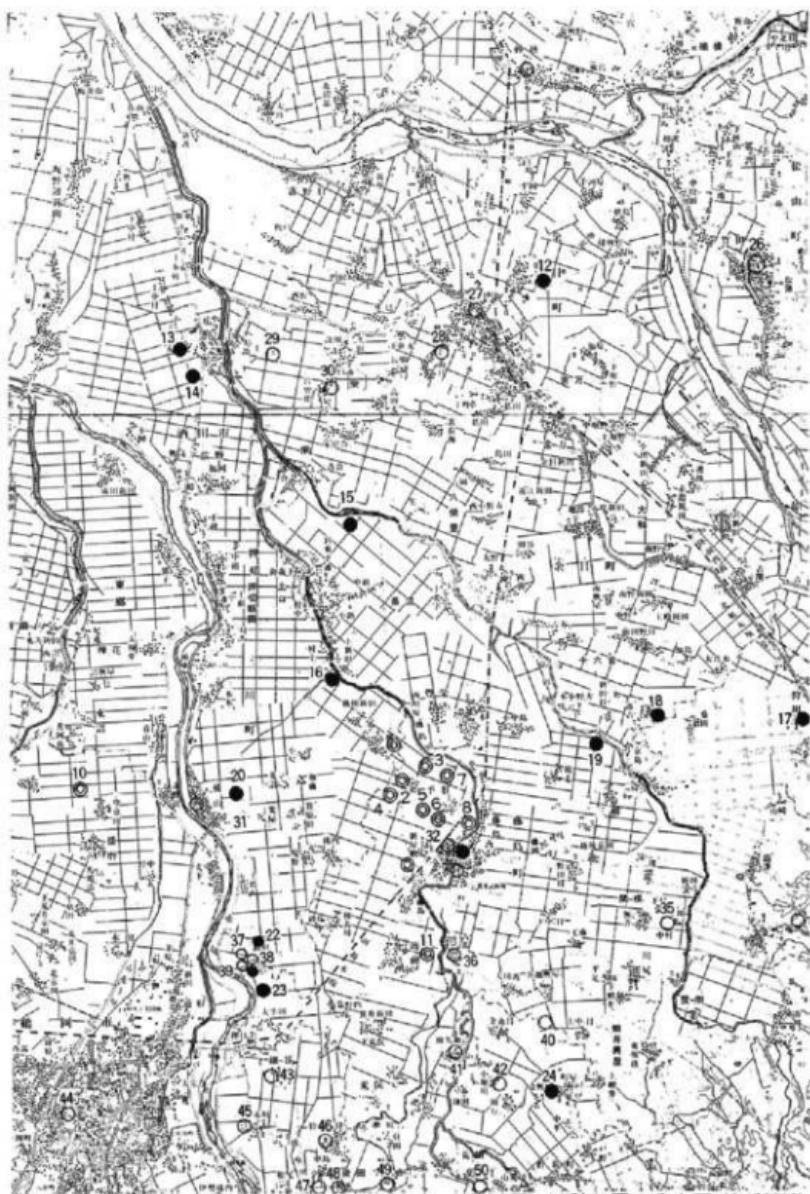
平形・渡前・中京田の各遺跡は、この南半部、北側を最上川本流に区切られ、東側・南側を出羽丘陵羽黒山系の緩やかな丘陵により区画される地域に位置する。この地域は、赤川及び京田川（藤島川）・大山川の旧氾濫源にあたり、古代より現代に至るまでこの肥沃な土地を求めて開発が重ねられ、有数の穀倉地帯となっている。現在は、見渡す限りの水田の中に特有の散村集落がみられるという景観を呈す。

平形遺跡は、行政的には東田川郡藤島町に属し、藤島川左岸、標高9～11メートルの自然堤防上ないし微高地に営まれた遺跡で、藤島川に東側を接し、赤川に西側を画され、藤島町上平形・下平形部落を中心に径約2キロメートルの範囲に分布している。

渡前遺跡は、平形遺跡中心部より約2キロメートル南、やはり藤島川の自然堤防上、標高13メートル前後の地に立地している。行政的には藤島町に入る。

中京田遺跡は、赤川左岸、鶴岡市中京田部落の北西部、赤川と大山川の河間低地のほぼ中央に位置し、標高は約8～9メートルを計る。庄内地方の平野部に存在する古代～中世の遺跡の中では、標高9メートル以下に立地する例として貴重である。

一般に、この地域の土壤は有機質分を多量に含む良質な砂質微砂を主体としている。



第1図 遺跡位置・分布図 (1/10000)

第2節 周辺の遺跡（第1図）

庄内平野の南半をほぼ南北に北流する京田川と赤川、およびその支流である藤島川と大山川が形成する自然堤防や河間低地には、平安時代から安土・桃山時代にかけての集落跡や城館跡が数多く分布する。

この地域一帯に昭和46年頃から大規模な県営圃場整備事業が計画され、平野部の水田地帯および自然堤防上の畠地が、3反歩1枚の大圃場に機械整備されることになった。山形県教育委員会では、県農林部や地元市町村など協議を重ね、事前に遺跡の分布調査を行うと共に、設計その他で止むを得ない遺跡については、昭和48年度から緊急発掘調査を実施してきた。最上川南岸地域での圃場整備事業に関連する遺跡の緊急調査件数は、昭和54年末現在で18遺跡にのぼる。18遺跡の中で古墳時代以前に遡るものは、縄文時代晚期の遺物を出土した立川町古橋遺跡（註1）のみで、他はすべて平安時代以降のものである。つぎにこれらの調査成果を参考にしながら、平形遺跡周辺の遺跡についてみてみる（表1）。

平安時代以降の遺跡の中で、遺物や文献資料から見てもっとも古く位置付けられるのは、藤島町平形遺跡D地点や渡前遺跡で、9世紀代の年代が想定される。余目町上台遺跡は、広域農道新設工事に伴う緊急調査であるが、10世紀末から11世紀前半頃の遺物を伴う竪穴住居跡が1棟検出されている（註2）。また余目町返吉遺跡からは12世紀に属する掘立柱建物跡が2棟検出されている（註3）。

鎌倉時代以降の遺跡では、藤島町勝樂寺遺跡（註4）が13世紀、平形遺跡G地点（註5）や鶴岡市中京田遺跡（註6）が13世紀末から14世紀前半、三川町横川B遺跡（註7）や藤島町須走遺跡（註8）が14世紀後半頃に位置付けられる。

第3節 調査に至る経過（表1）

平形遺跡が知見に触れたのは、昭和初期頃かららしく、それに関する論考が下田弥一郎（註9）、阿部正己（註10）、喜田貞吉（註11）氏等によって発表されている。これ以後平形遺跡は、古代出羽国の国府・国分寺跡の疑定地として注目されてきた。

平形遺跡に対する調査は、昭和初期から小規模な形で行われているが、正式な発掘調査は昭和45年に始まり、昭和53年までつぎの7回にわたる調査が実施されている。このうちI次からIV次調査までが遺跡の確認調査、V次からVII次調査までが赤川右岸地区県営大規模圃場整備事業にかかる緊急発掘調査である。

表 1

調査次数	調査主体	調査期日	調査地区	文献
第Ⅰ次調査	藤島町教育委員会	昭和45年10月5日～10日 10月25日～27日	入三瀬・サドバタ 小新田・小町田・ 国分堂の上・柳田	註 12
第Ⅱ次調査	藤島町教育委員会	昭和46年10月25日 ～11月5日	柳田	註 13
第Ⅲ次調査	藤島町教育委員会	昭和47年11月13日 ～11月22日	高畠	註 14
第Ⅳ次調査	山形県教育委員会	昭和48年10月29日 ～11月9日	高畠	註 15
第Ⅴ次調査	山形県教育委員会	昭和51年5月17日 ～6月30日	白山前・桜屋敷・ 平形館	註 16
第Ⅵ次調査	山形県教育委員会	昭和52年4月18日 ～10月20日	横川・跨り・柳田 小町田・白山前・ 高畠・新屋敷	註 17
第Ⅶ次調査	山形県教育委員会	昭和53年4月13日 ～6月9日	跨り	註 18

I次からV次調査では、鎌倉時代以降の館跡や掘立柱建物跡・溝跡などが検出され、平形館跡を中心とする土地区割りも一部推定された。VI・VII次調査では、跨り地区を中心に平安時代前半の掘立柱建物跡・倉庫跡・井戸跡などが良好に検出された。

このほか県営大規模圃場整備事業赤川右岸地区に隣接して、山形県教育委員会が調査主体となって昭和51・52年に藤島町渡前遺跡、昭和53年に鶴岡市中京田遺跡の緊急発掘調査を実施した。時期的に平形遺跡との関りが考えられ、両遺跡の報告も同時に収録する。

註 1 山形県教育委員会「山形県埋蔵文化財調査報告書第6集、昭和48・49年度山形県常磐林事務所
付遺跡」、昭和51年。

註 2 山形県教育委員会「山形県埋蔵文化財調査報告書第14集」、昭和53年。

註 3 註1と同じ。

註 4 藤島町教育委員会「勝利寺遺跡発掘調査報告書」、昭和55年。

註 5 「平形遺跡第五次発掘調査現地説明会資料」、昭和51年。

註 6 「中京田遺跡発掘調査現地説明会資料」、昭和53年。

註 7 註1と同じ。

註 8 註1と同じ。

註 9 下田芳一郎「平形の歴史」、「渡前村郷土資料叢書第3」所収。昭和7年。

註 10 同上正己・郷土研究叢書第2集「城輪の出土標
址及び国分寺跡調査」、昭和7年。

註 11 寺田亮吉「山形県本楯発見の織跡について—
—出土標か国分寺跡か」歴史地理58ノ1、
昭和6年。

註 12 柏倉亮吉・小野忍「平形遺跡第1次・第2次発
掘調査概要」、昭和47年。

註 13 註12と同じ。

註 14 柏倉亮吉・小野忍「平形遺跡第3次発掘調査概
要」、昭和48年。

註 15 註1同じ。

註 16 註5と同じ。

註 17 「平形遺跡第6次発掘調査現地説明会資料」、
昭和52年。

註 18 「平形遺跡第7次発掘調査現地説明会資料」、
昭和53年。

Ⅱ章 平形遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査の経過

昭和47年度から年次計画による赤川右岸地区県営大規模圃場整備事業が実施され、事業区域内に点在する遺跡の調査が事業施行年次ごとに行われた。本遺跡は昭和初期頃から下田弥一郎・阿部正己氏等に注目されていた遺跡で、正式な発掘調査が昭和45年から48年まで、4回にわたって実施され、その結果遺跡は平形部落を中心には数つかの小地域に広がる広範囲な遺跡としてとらえられていた。昭和51年には圃場整備事業が、平形部落の東側一帯（約22万平方m）にかけて実施されることになり、第V次調査として昭和51年5月17日から6月26日まで延35日間の調査が行われた。調査当初は本遺跡が広範囲と推定されることから調査区の設定基本杭を、遺跡東部を北流する藤島川の東岸北東部八色木部落に所在する古峯神社の境内に置き、磁北に合せた $2 \times 2\text{ m}$ グリッドを最小単位とする調査区を南北2,300m、東西1,900mに方眼グリッドを設置し、坪掘りで遺構・遺物の検出状況に応じて随時拡張していく方法をとった。グリッドの呼称はX軸（東西）を東から1・2・3…950、Y軸を北から1・2・3…1,150とし、各グリッドはX軸から先に「45—76」グリッドと呼称する（第2図）。各調査の全般的な経過は概略して記述する。

第V次調査では6カ所の遺構・遺物の密集地を確認し、平形館を中心とした鎌倉時代から室町時代の中世区割を考えさせる遺構が発見された。第VI次調査は圃場整備事業が年次計画のため、平形部落西側一帯（約52万平方m）で、広範囲なため調査は昭和52年4月18日から10月14日までという約半年間にわたる長期の調査であった。調査当初は第V次調査の際設定したグリッドラインを引き続き今年度施行区域内まで広げ、遺跡の範囲の再確認を行い、遺構・遺物の集中区域を8カ所発見し、それぞれにアルファベットを付し（第2図）順次調査を行う予定でしたが、D地区と付した下平形部落南西部と、G地区と付した平形館跡東部の2カ所は十分な調査が必要であると判断し、後半の調査はD・G地区的調査を主眼とした。D地区（通称跨り）では調査中旬頃に南北に走る溝跡や土壌及び柱痕等、水路敷予定地では井戸跡が発見され、付近を4,500m²の範囲に掘り広げた。最初は井戸跡の付近を精査したところ、土師器や赤焼き土器・須恵器の土器が集中して検出、S×3と名付け出土地点の記入を始めた。又、井戸跡より北方10mのところでは、幅30~50cmの溝跡に囲まれた堀立柱建物跡が発見され、調査は北方へ向って精査が進んだ。北方では土壌や、柱穴と考えられるピット（EP群）が発見されたが、建物跡として結びつく構成にならず、



第2図 平形遺跡・渡前遺跡全体図

ピット群として把握した。G地区は現存する館跡の土壘と結びつく屋敷跡が判明したが、時間等の関係から表面だけの調査に終ったため、その内容は十分に判明出来なかった。

第Ⅶ次調査は前年度に実施した予備調査に基づいてD地区の北西200mの地点を中心に調査を実施し、V次調査から引き続くグリッドラインを用い、遺構の広がりに合せ、随時拡張した。

調査は昭和53年4月13日から6月9日まで延36日間である。調査当初は重機による遺構・遺物の集中していた地区を大きく広げ、遺構の検出作業を行った。その結果、土壤や溝跡が発見され、遺物も須恵器・土師器・赤焼き土器等、多数検出。中でも底部に「笠」と墨書きされた赤焼き土器が発見されたことから、昨年度調査によるD地区と地域を区別するため、笠地区と呼称した。調査中頃になると遺構の整理がすすみ、3×2間の雨落ち溝を伴う掘立柱建物跡3棟、6×2間の掘立柱建物跡、2×2間の倉庫跡1棟などの建物跡や、土壤が発見され、精查が進むとSK2と呼称した土壤が、井戸枠がない掘り抜き井戸と考え、呼称をSE2と変更した。又、内部からは「弓」と書かれた墨書き土器が出土、他にも墨書き土器は溝跡内や土壤内からも検出された。一方、作業は平面図測図作業準備や建物跡の柱痕の断面図の測図作業を行い、調査後半の主作業となった。又、6月7日には現地において遺跡説明会を行い、昭和51年から続いた調査を今次で一応終了し、関係諸機関、及び藤島町教育委員会、地元平形部落の方々に御礼を申し上げた。

2. 遺跡の層序

平形遺跡は庄内平野のほぼ中心、赤川・京田川等、中小河川の沖積地に存在し、土壤は有機質分を多く含む良質な砂質微砂土を主体とする。

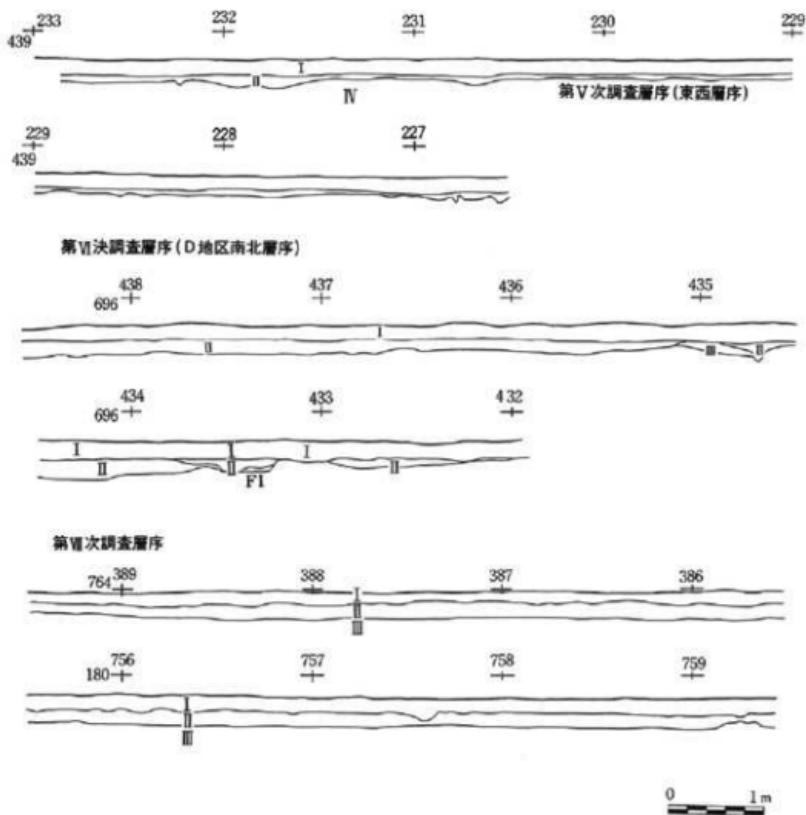
遺構内の覆土は、褐色のシルト質粘土を主体とし、粘性を帯びる土層が多い。

第V次調査の際、本遺跡の基本層序を決定するため439-227~233グリッドを基本とし、以後の調査の基本層序とした。層は大別して3層に区分され、遺跡を覆う土層はアラビア数字で表わした。また遺構の覆土はF₁・F₂……F₃とした。

I層 耕作土

II層 暗褐色砂質土層 (炭化物・酸化鉄を含み、やや粘性を帯びる所もあり、層下部では遺物を包含し、本遺跡全域を覆っている。)

III層 青灰色砂層 本遺跡の地山層であり、発見された遺構はこの層を掘り込んでいる。



第3図 平形遺跡基本層序図

第2節 発見された遺構

1. 白山地区（F地点）（第5・6図）

白山地区は上平形部落の北方にあり、白山神社の跡が土壇状に残っており、杉の苗木があり、地目は荒地となっている。昭和51年の第V次調査で発見された地域である。

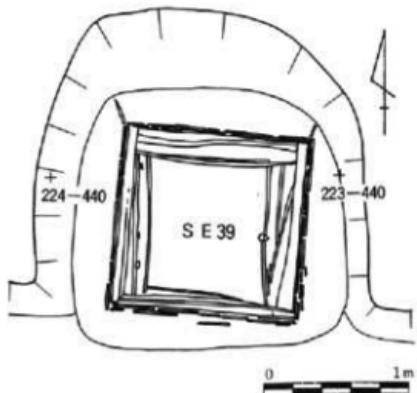
調査は遺跡の広がりを確認するためグリッド軸線に合わせたトレンチ掘りを行い、白山神社付近の東西450グリッドラインで発見された遺構である。遺構は幅約3mの溝跡が磁北に合せて発見され、一部の部分では直角に曲がるところもある（第5・6図）。2ヶ所で発見された溝との距離は104mを測り、推定ではあるが、溝に囲まれた屋敷跡の区割と考えられる。溝に囲まれた内側には柱痕・井戸跡（第4図）も検出されている。溝は広いところで3m、狭いところで2mの幅をもち、掘り込み部からの深さは50cmを測る。覆土中より、漆塗りの木椀・箸・ヘラ・ザル・曲物・紡錘車などが検出された（第5図）。

井戸跡（第4図 SE39）

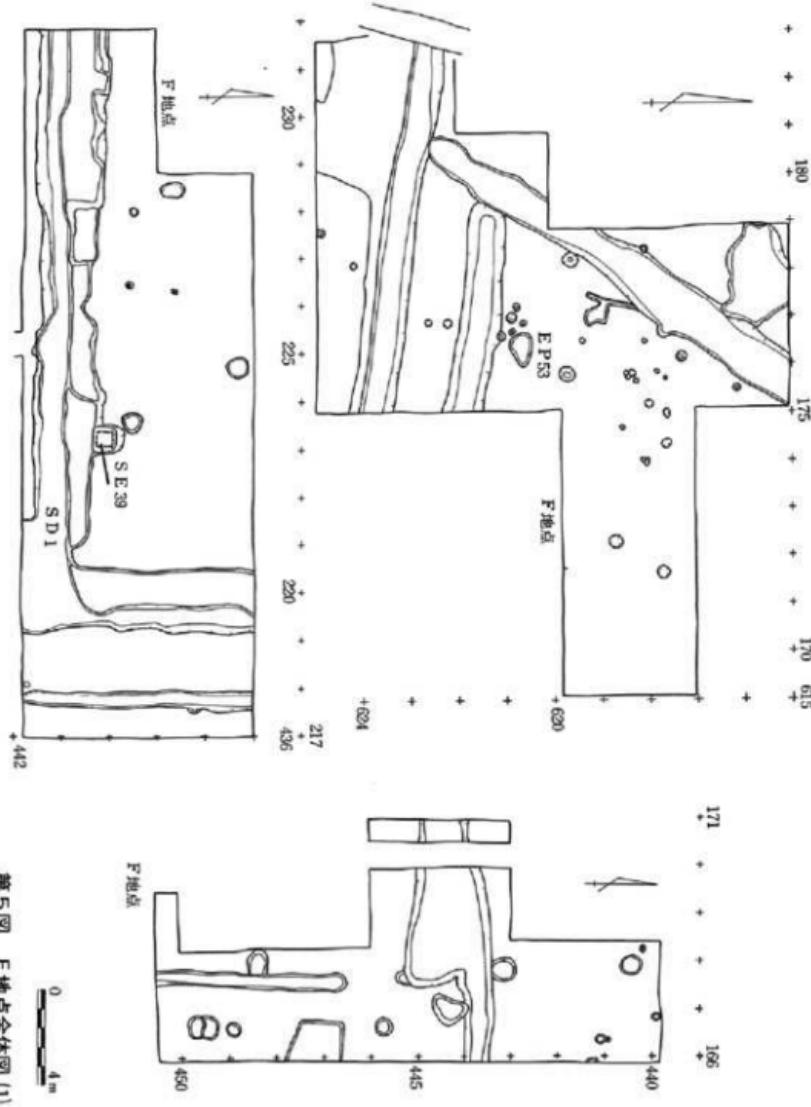
井戸は径約2m26cm、深さ約1m40cmの掘り込み部内に井戸枠を組んでいる。検出されたグリッドは223・224-439・440グリッドで、SD 1に付随し発見された井戸で、井戸の掘り込み部の近くには溝跡へ流れ込ませる浅い溝と河原石が散在している。井戸枠は縦に埋め、一方向に6～7枚の板を並べ、上段で一辺が1m30cmの四角に組んでいる。組んでいる井戸枠に使われた木材は手斧で仕上げられた正目の板で、長さ50～60cm、幅18～20cm、厚さ1.5cmの板を6～7枚で並べ、内側には4～5cmの角材を「ほぞ」組みし、内側へ倒れないように組んでおり、2段目は一辺が90cmの同様な組み方を行っている。1枚1枚の板

は幅・厚さとも不定であるが、井戸内に泥砂を入れないよう組み合せており、内部からは箸と思われる細い棒状の木製品や、須恵器の坏片が出土地した。

井戸枠は、溝跡に囲まれた屋敷跡に付属するものと思われるが、調査区域が狭かったのと、調査が溝跡の規模に重点をおいたため、屋敷跡の全容を解明するには至らなかった。

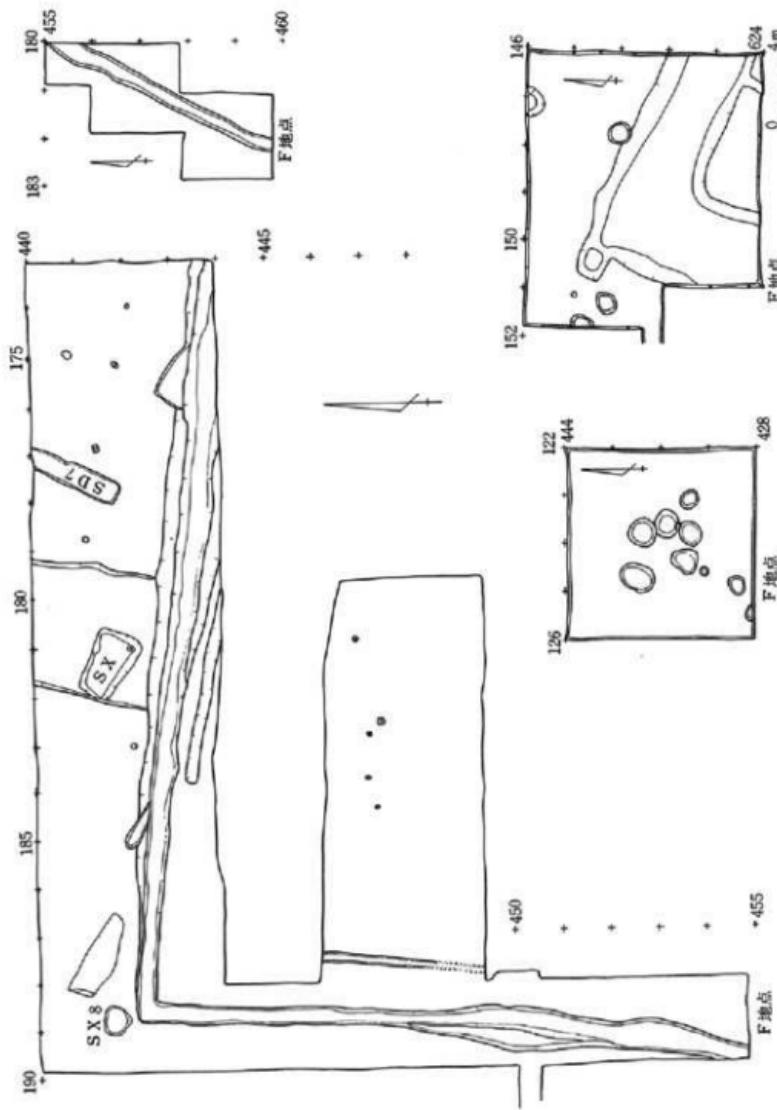


第4図 F地点 SE39



第5図 F地点全体図(1)

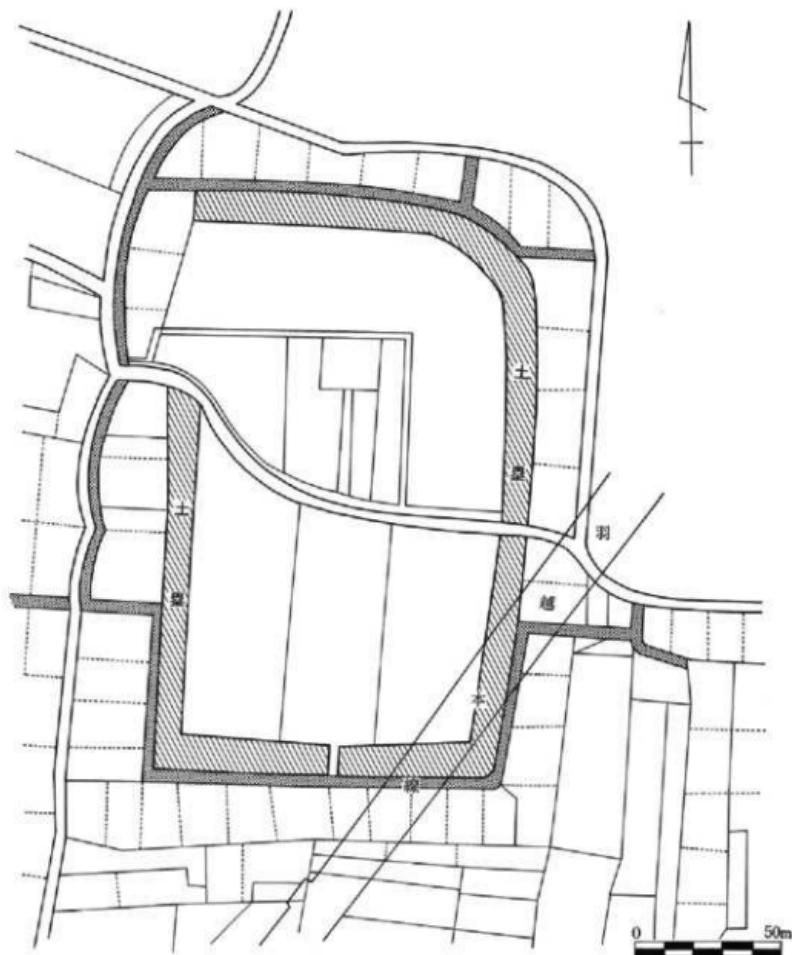
第6図 F地点全体図 (2)



2. 平形館地区 (G 地点) (第7~10図)

G地点は昭和51年度調査で現存している平形館跡の土塁とその周辺、羽越本線の西側一帯と、昭和52年度調査の羽越本線東側一帯の地域である。

現存している土塁は南北にあり、東へ約16度ふれ、現存長68m、幅は底面で広い部分で8m、狭い部分で6mを測り、高さは2.5mである(第8図)。明治5年の字切図(第7図)

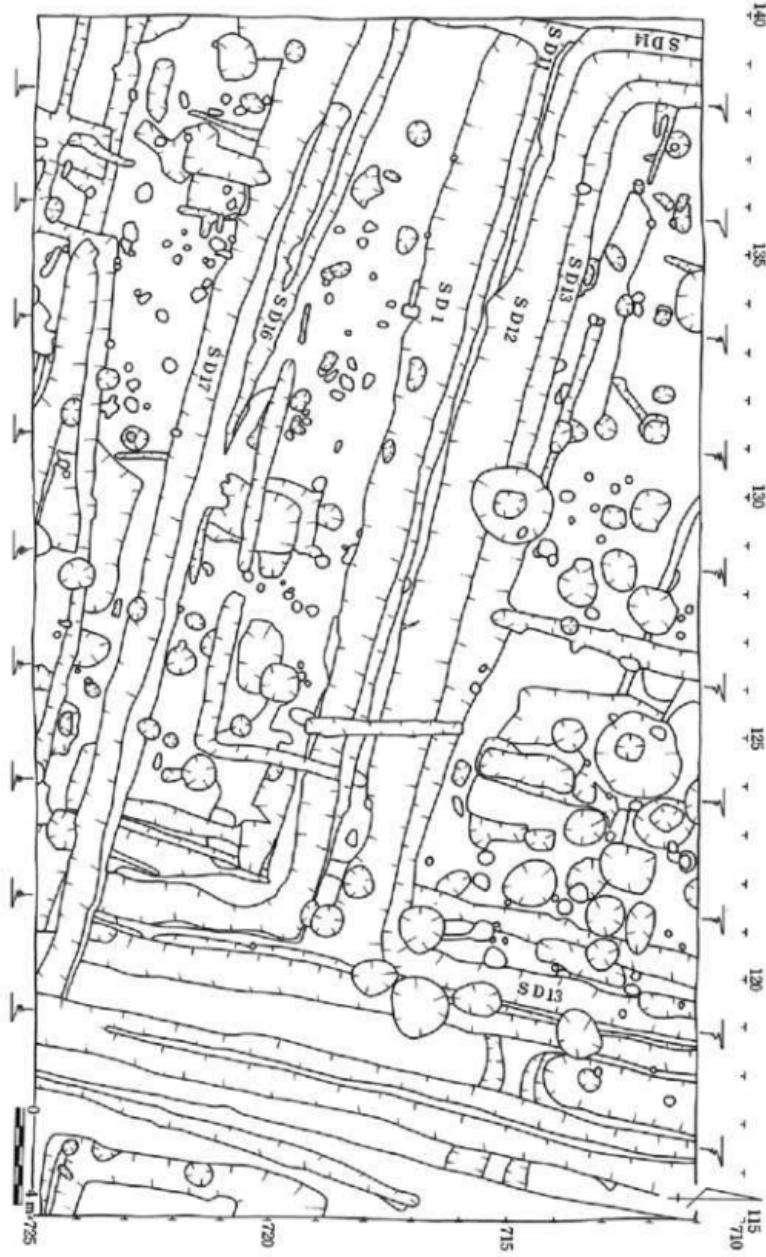


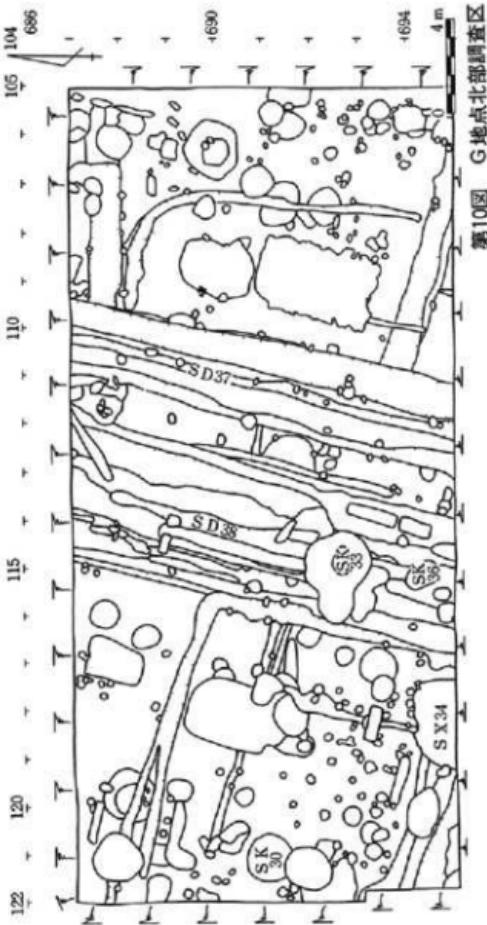
第7図 平形館跡字切図



第8図 G地点調査区

第9図 G地点南部調査区





第10図 G地点北部調査区

には四方に囲まれた土壙の存在が示されており、濠がめぐっていたことが判明した。調査ではこの土壙を切り、断面の観察を行ったところ、粘性のある土と、粘性のない土を交互に重ね、くずれる事のない構築を施している。規模は濠まで含めると、東西100m、南北146mの広さとなり、一町歩程の規模をもつ館跡と考えられる。

館跡内の調査ではこの地域が圃場整備事業からのぞかれたため、調査はトレンチによる遺構・遺物の確認を行った。遺構は建物を構成する溝や柱穴が密集して発見されたが、その構成は明確に表われなかった。何處かの建てかえがなされていた跡をうかがわせた。

昭和52年度の調査は、現存する土壙の東南方、羽越本線の東側で、調査区を北部・南部とに分け、調査を進めた。また調査は調査日数や工事期間のかね合い、調査員不足等、基本的な調査計画の失敗から遺構の平面プラン検出にとどめ、それらの組み合せはいくつかは考えられるが、詳細は不明である。

南部調査区（第15図）に示してあるEB 10～15、SD 20は建物を構成する柱穴と雨落ち溝と考えられる。他には鉄滓を多く含む円形の土壤（SK 21）、径約3mで、カジ場と考えられる。SK 22は珠洲系壺の一括土器（第35図1）が出土し、土器溜めと考える。又SK 22から東へ6mの部分に径約1.5mの掘り込みがあり、中心部は水分を含み軟かく、水がにじみ出ることから井戸跡と想定し、平面の確認に終った。他にはいくつかの柱穴や土壤・溝跡を検出したが、遺構として構成する決め手がなく、平面図への記載にとどめた。表面での土層の観察では白色粘土を含むものがあり、時期の相違がわかる。

3. 跨り・笠地区 (D地点) (第11図)

D地点は第IV次（跨り地区）調査、第VII次（笠地区）調査で確認された地点で、跨り地区では700以上の遺構が発見され、出土遺物などにより、平安時代の遺構と考えられる。発見された遺構は、掘立柱建物跡3棟、倉庫跡1棟、井戸跡1基、掘立柱列3基、土壙多數等が確認されている。

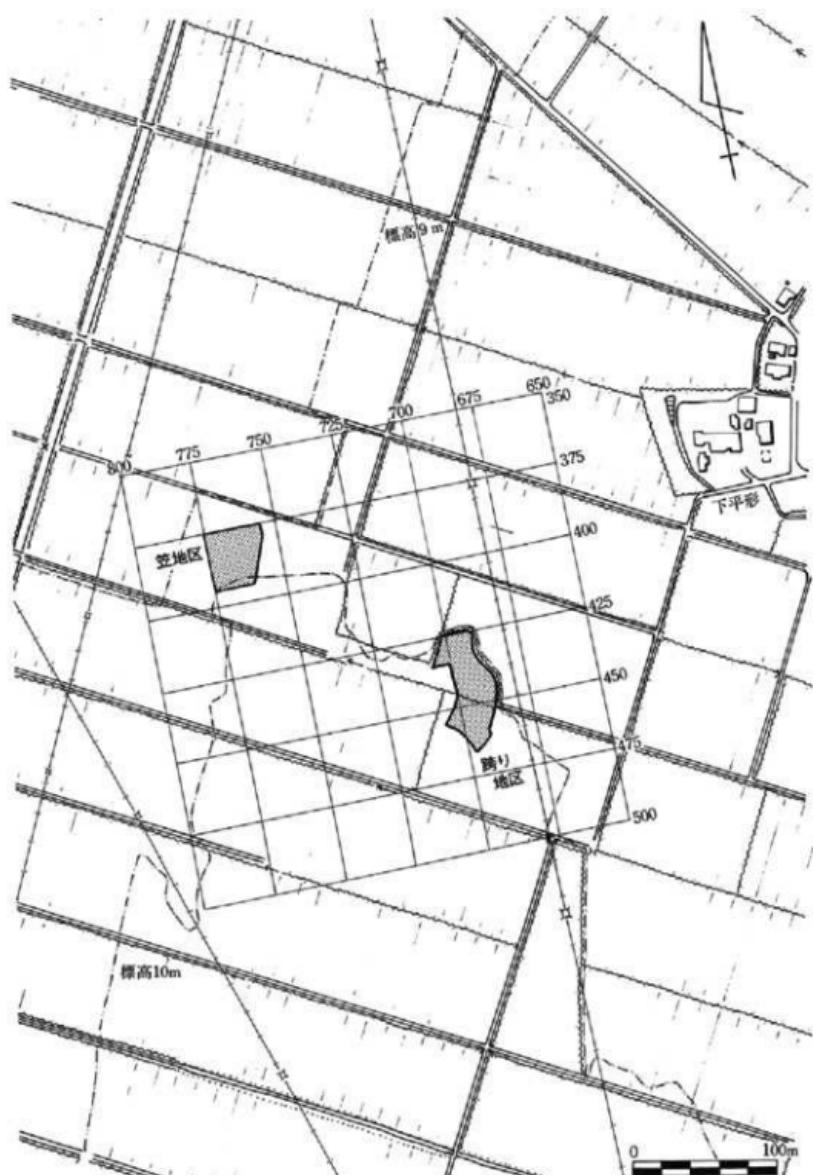
SB 55 (第12図)

跨り地区南半部685～690—448～658グリッド内で発見された掘立柱建物跡である。桁行七間、梁行三間である。周囲には、SD 57・50・26・25の溝で囲まれている。溝は北と西側が一本につながり、東側と南側の溝は一本となっている。溝の幅は平均50～60cmを測り、深さ約15～20cmで、船底を呈している。創建時は、SD 57・50・25に囲まれた建物であったが、後に南側に一間の廊部を建て付け拡張し、溝（SD 26）が付けられたものと思われる。柱の掘り方は、径80cm位の隅丸方形ないし円形を呈し、柱間は桁行で1.8m(六尺)、梁行で2.1m(七尺)を測る。柱の構成は桁行西面で、EB 343～350、東面桁行で、EB 351～358である。梁行北面はEB 350・358～360、梁行南面はEB 343・361・362・351で構成されている。拡張された廊部の柱は、EB 367～379で梁行での柱間は3.3m(11尺)を測り、廊部の南面梁行は二間となっている。構成する柱の中間に、西面桁行EB 346から東面桁行EB 354にかけて、間仕切りの柱痕が検出され、北部は4間×3間、南部は3間×3間となっている。間仕切りの柱は周囲の掘り方より小さく、径約40cmを測り、やや細い柱を使用しているものと考えられる。

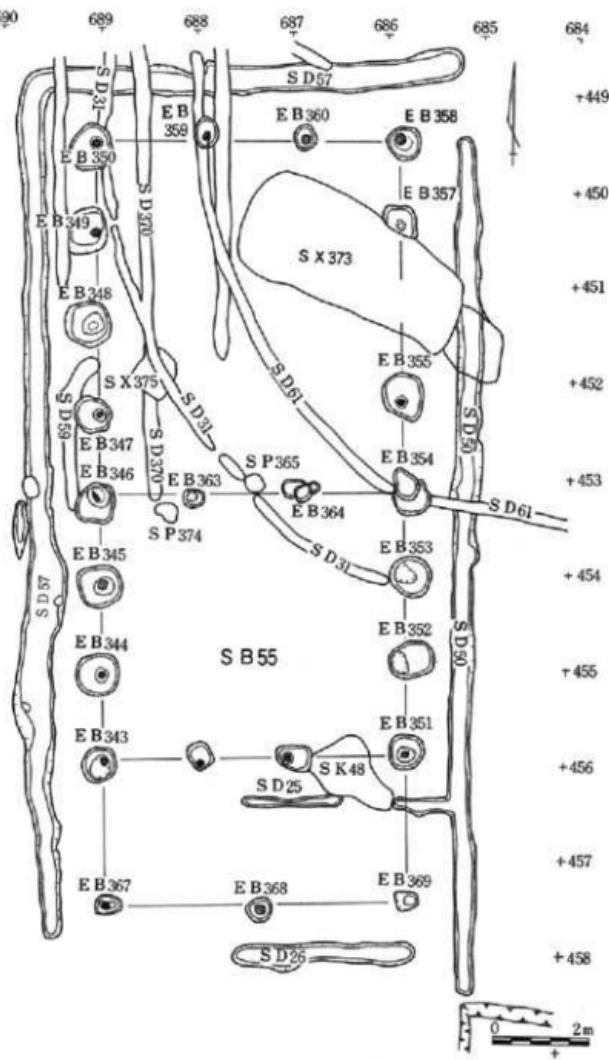
柱は抜きとられたり（EB 357）、朽ちてしまったものが多いが、6本の柱が、地中に埋められた状態で検出され（第14図）、その状態を観察すると、柱そのものは、直徑約20cm前後で、掘り方の中心や、隅に寄ったりしているが、桁行・梁行とも、直線的に規則的に並んでおり、朽ちた痕跡も明確に判断出来る掘り方も、存在していた。又、掘り方内の柱を埋め込んでいる土層は、柱の周囲を強くふみ固め、柱が倒れないようにしておらず、土壙も粘性を有するものや、サラサラした砂質の土を交互に重ねている。第14図の土層の説明は以下の通りである。

1層	淡褐色シルト	6層	淡褐色シルト質粘土
2層	淡褐色シルト質粘土	7層	灰白色粘土
3層	灰褐色シルト質粘土	8層	淡褐色シルト
4層	青褐色シルト質粘土	9層	淡褐色シルト質粘土
5層	青灰色シルト質粘土	10層	青灰色シルト質粘土

出土遺物は、溝内や柱穴の掘り方内より須恵器の杯や斐片が出土しており、時期的には



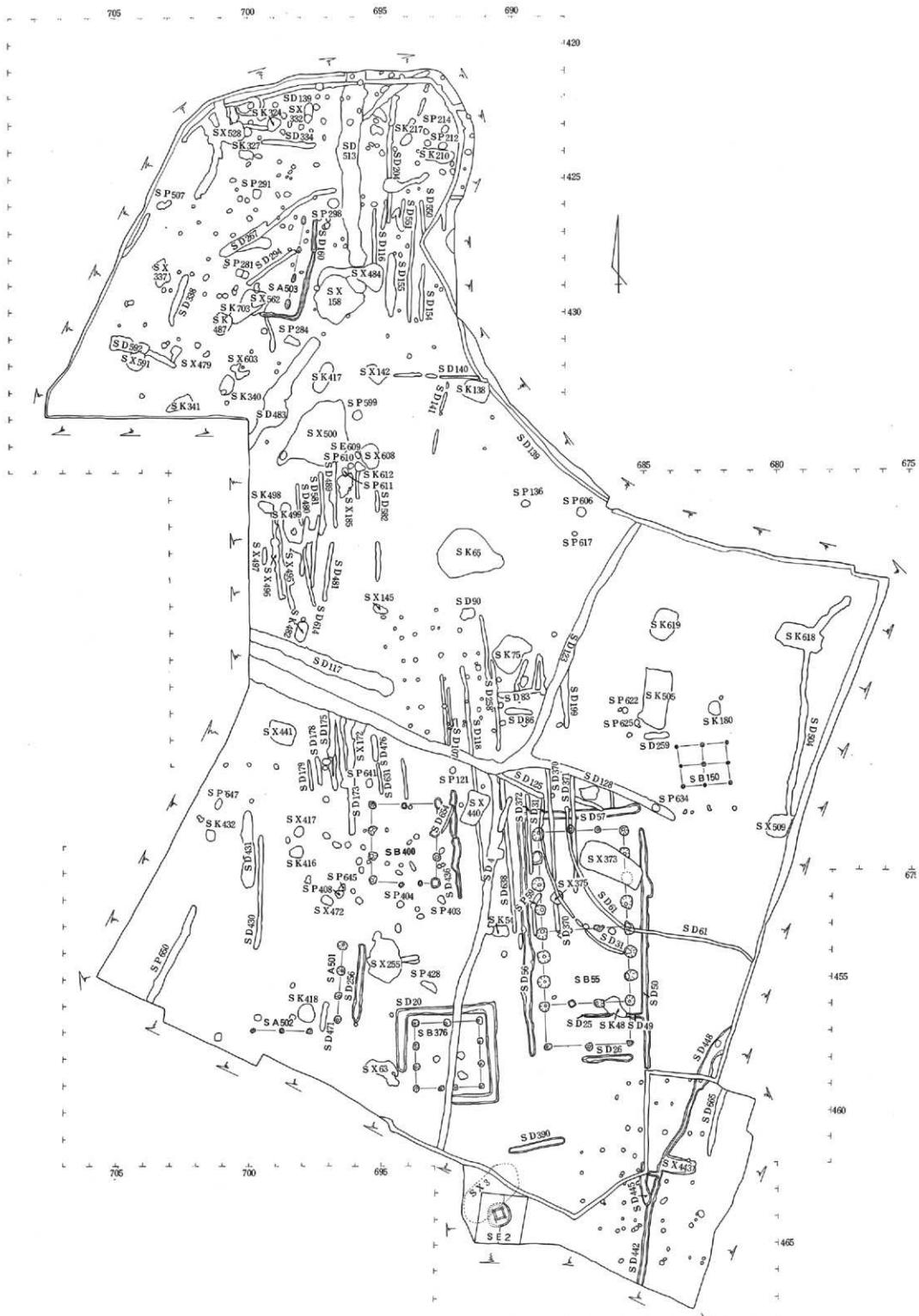
第11図 D地点調査区全体図

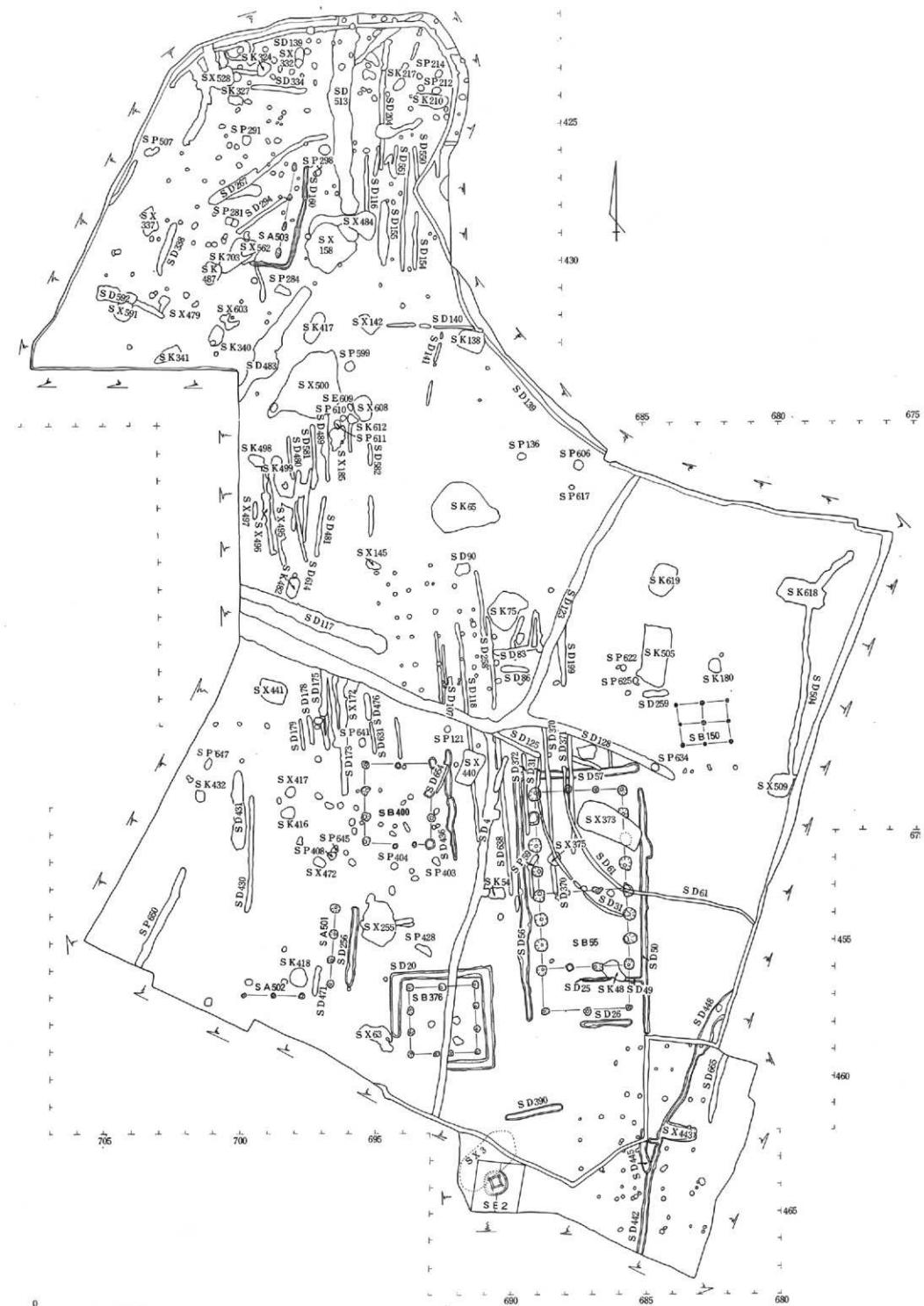


第12図 D地点 SB55

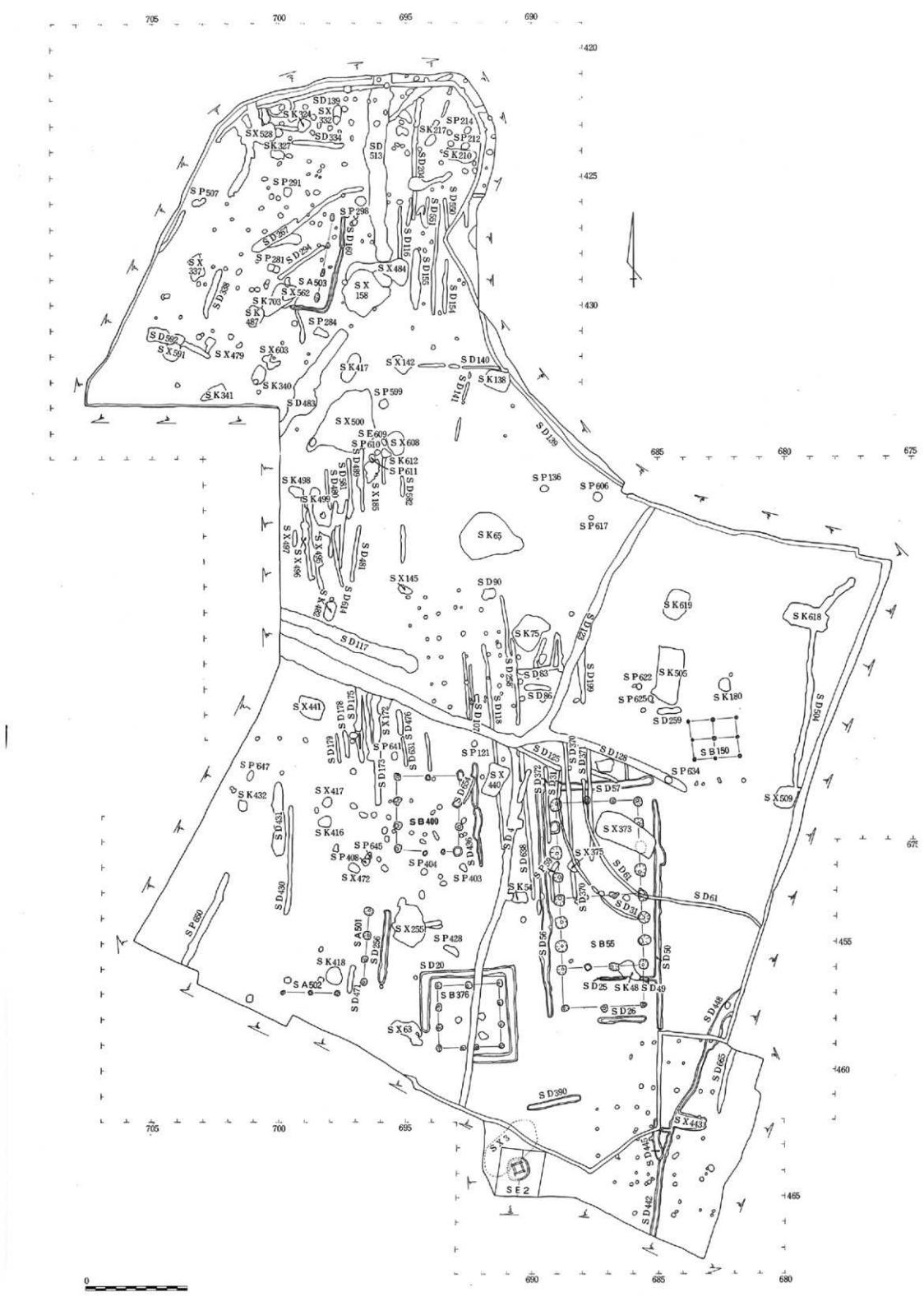
平安時代の中頃と考えられる。

建物の主軸方向は、ほぼ磁北に合わせており、間仕切りと、ひさし部・周囲に雨落ち溝を有する大型の掘立柱建物跡で、跨り地区の中心となる建物である。





第45図 跨り地区遺構図



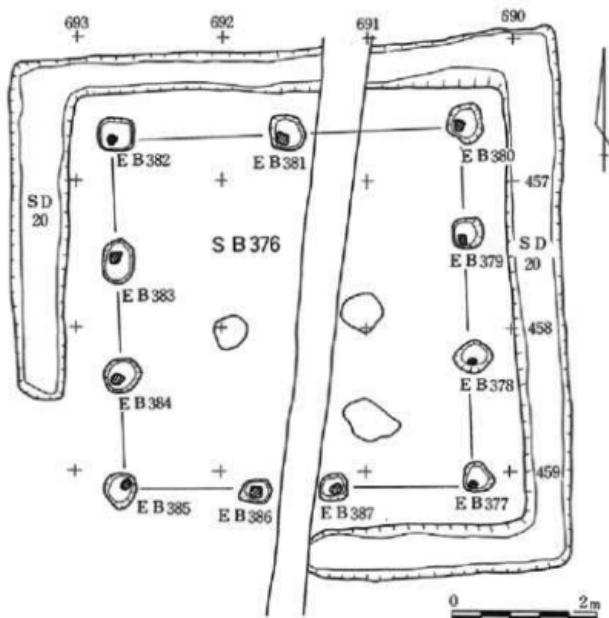
SB376 (第13図)

SB55付近の精査中に隣接して発見された、掘立柱建物跡である。桁行三間、梁行二間である。周囲をSD20の溝で囲まれ、溝は南西方がとぎれている。

構成する柱は西面桁行がEB382～385、東西桁行がEB377～380で柱間を1.8mに測る。北面梁行はEB380～382で、柱間が2.4mを測る。南面梁行は東西の柱列から、それぞれ1.8mのところに二本の柱を置き、間を1.2m離している。四方を囲んだ溝は、幅約70～80cm、深さ15～18cmを測り、カマボコ形を呈している。柱の掘り方は、径約50cmの隅丸方形、又は方形を呈し、柱根は残存していないかったが、直径15～20cmのアタリが確認され、掘り方部の断面も平面のアタリから続く柱痕の朽ちた痕跡が明確に判断出来た(第14図)。

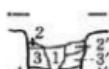
出土遺物は、SD20内や柱の掘り方内より、須恵器杯片等が出土しており、SB55と同時期を示しており、この二棟の建物は付随するものと考えられる。

建物の主軸方向も磁北に合せており、二間×三間の周囲に雨落ち溝を有する掘立柱建物跡で、南面に入口をもうけた建物と考えられる。

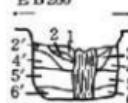


第13図 D地点 SB376

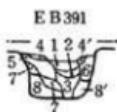
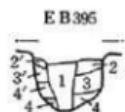
SB 376 (E B 377~E B 386)



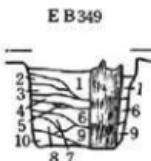
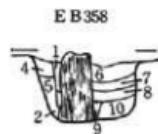
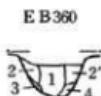
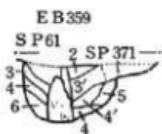
SA 501
(E B 260~E B 263)
E B 260



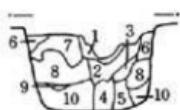
SB 400 (E B 200~E B 391~E B 399)



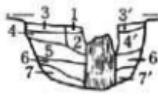
SB 55 (E B 343~E B 355 · E B 357~E B 364 · E B 367~E B 369)



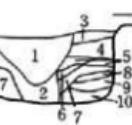
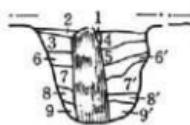
E B 348



E B 344



E B 355



E B 363



E B 364



E B 361



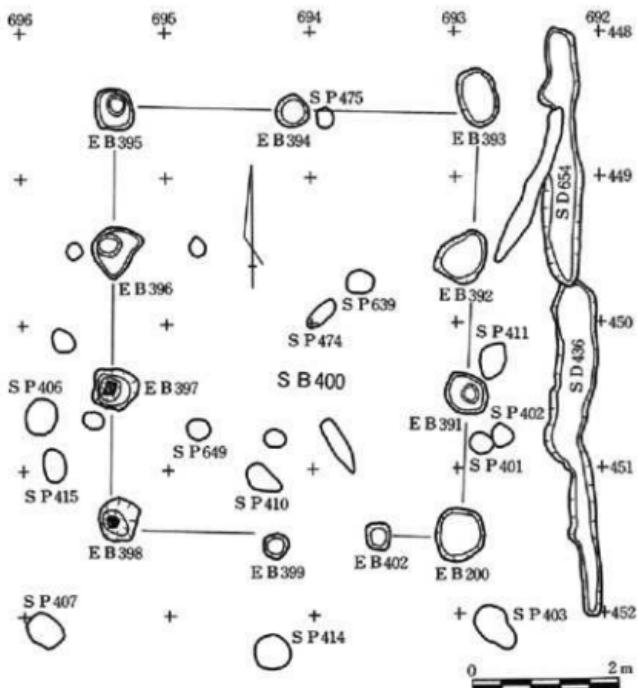
E B 362



E B 368



第14図 D地点掘立柱建物跡柱穴掘り方土層図



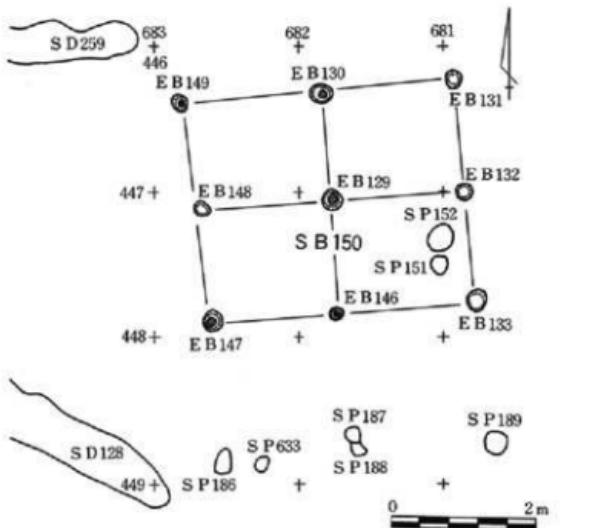
第15図 D地点 SB 400

SB 400 (第15図)

SB 376の北側、SB 55の西側に隣接して発見された、掘立建物跡である。桁行三間、梁行二間のSB 376と同様な造りをした建物である。SD 436・654の溝を東面にもち、他の三方には溝跡と思われるものが、検出されなかった。

構成する柱は西面桁行がEB 395～398、東面桁行がEB 200・EB 391～393で、柱間距離は一定せず、東・西辺のうち西辺桁行のEB 397とEB 398間が1.8mを測り、他の柱間距離は2mである。溝は全長4.3m (SD 436)、3.5m (SD 654)で、先にSD 436が造られ、のちにSD 654が造られたことが、平面の精査中に確認され、多少時期が離れたときに拡張されたものと考えられる。

柱穴の掘り方は、径約50～80cmの隅丸方形を呈しており、柱根は検出されなかったが、



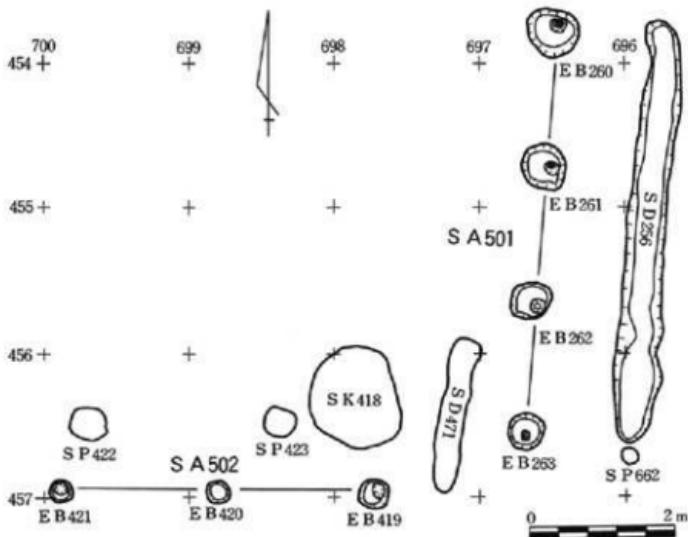
第16図 D地点 SB 150

直径約20cmのアタリが認められた。掘り方で深いものは70cmで、他は40~50cmの深さである。また底面をさらに4~6cm程、径15cmに掘りくぼめており、柱の位置を固定する凹みをもつ掘り方も確認された。SB 400の主軸方向は、ほぼ磁北方向にあり、SB 55を中心とした、SB 376・SB 400という建物が一組となり、以下に記述するSB 150・SE 2と共に組み合せの出来る建物群と想定される。

SB 150 (第16図)

SB 55の北東約3m、680~682-446・447グリッド内で、確認された二間×二間の縦柱建物跡で、EB 129~133・EB 146~149の9本の柱穴で構成される、倉庫跡と考えられる。柱間距離は東・西辺で1.5m、南・北辺で1.8mを測る。柱の掘り方は、他の建物跡と比べ小さく、径約30cmの隅丸方形や円形を呈し、直径10~15cmの柱根を残している掘り方が、5本確認されたが腐植が激しく、取り上げる際朽ちるもののが多かった。

建物の主軸方向は西へ約8度程かたむき、他の三棟とはその軸方向を異にするが、一組に組み込まれる倉庫跡と考えられる。他に付属する遺構は検出されなかった。



第17図 D 地点 S A 501・502

S A 501・502・503 (第17・18図)

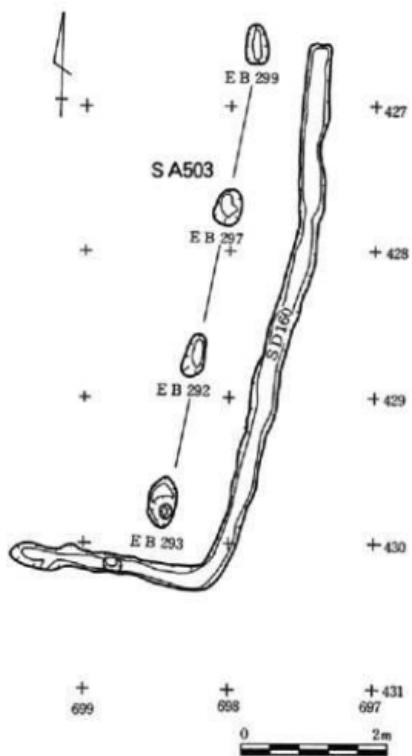
建物や柵などを構成するものと考えられるが、その性格を断定出来る他の遺構が検出されなかったことから、掘立柱列として取り上げた。

S A 501は696-453~456グリッド内で確認された南北に三間の掘立柱列である。S A 501はSD 256の雨落ち溝と共に伴し、溝は幅50cm、深さ15~20cmを測り、底面は船底を呈している。柱間距離は1.8mを測り、柱穴の掘り方は、径70~80cmの隅丸方形、円形を呈し、4本の柱穴には3本の柱根が残在していた。柱根は径10~15cmを測り、腐植が激しく、取り上げた際、朽ちるものがあった。柱列の主軸はやや東にふれた形で検出されている。

S A 502は697~699-456グリッド内で確認された東西に二間の掘立柱列で、雨落ち溝を伴わない柱列である。柱穴の掘り方は径40~50cmの隅丸方形を呈し、底面には柱を固定した浅い凹みを有している。

S A 501とS A 502は、精査中に一棟の建物跡として進めていたが、建物として構成する他の柱穴が周辺の精査でも発見されず、柱穴列とした。

S A 503は、調査区北部697~699-426~431グリッド内で確認された、南北に三間の掘立柱列である。柱穴の掘り方は、直径60~80cmの不整の階円形を呈し、深さは30~50cmであ



第18図 D地点 SA 503

る。SA 501・SA 502の柱穴底部と同様な凹みをもった柱穴もあり、柱を固定した痕を残している。柱痕は残在していないかった。柱間距離は2.1mで、南北列で検出された。

SE 2 (第19図)

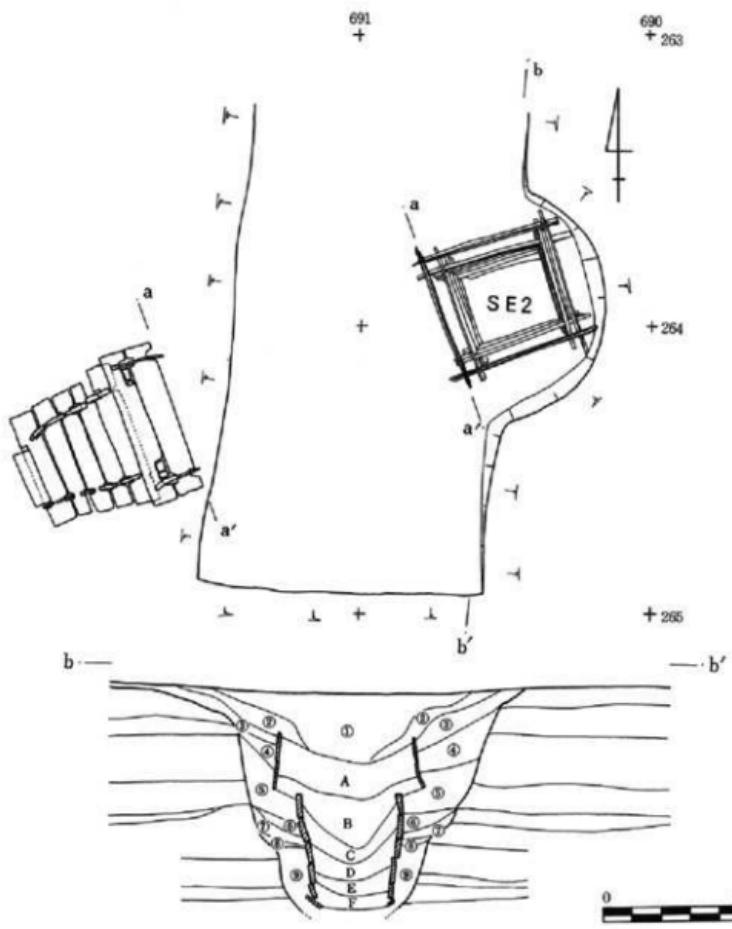
井戸は、計画排水路上(690—263・264グリッド)で検出された遺構である。井戸は径約1.6m、深さ約2mの掘り込みをもち、内部に、井形に井戸枠を組んでいる。井戸枠は8段積みに重ねており、上二枚の枠組は、一辺80cm四方の組合せを行い、三段目からは一辺が70cm×60cmの枠を最高に、以下を除々に小さくして組重ねており、最下段の枠組は60cm×40cmとなっていた。枠材は手斧で仕上げられており、幅20~25cm、長さ80~100cm、厚さ3~4.5cmの正目の檜材を利用している。組合せられた井戸枠は、内部に泥砂を入れないようにホゾ穴を組合せていることや、最下段から上段6枚目までを除々に広

げ、上段の二枚の組板枠が、それらを囲むように重ねている。

井戸内の土層は以下の通りである。

(井戸掘り方の土層)

- ① 黒褐色粘質土層 炭化物・白色粒子・赤色粒子を多く含み、粘性がある。
- ② 炭灰褐色粘砂土層 赤色粒子を多く含み、若干の粘性をもつ。
- ③ 茶褐色粘砂土層 赤色粒子・炭化物を含み砂質である。
- ④ 青灰色砂質粘土層 弱粘性・酸化鉄ブロックを含む。
- ⑤ 青灰色シルト層 しまり、粘性共に中。有機質・土器片・炭化物を含む。
- ⑥ 青灰色砂層 IVに比べ粒子は大きい。石英粒・雲母粒を含む。



第19図 D地点 SE2

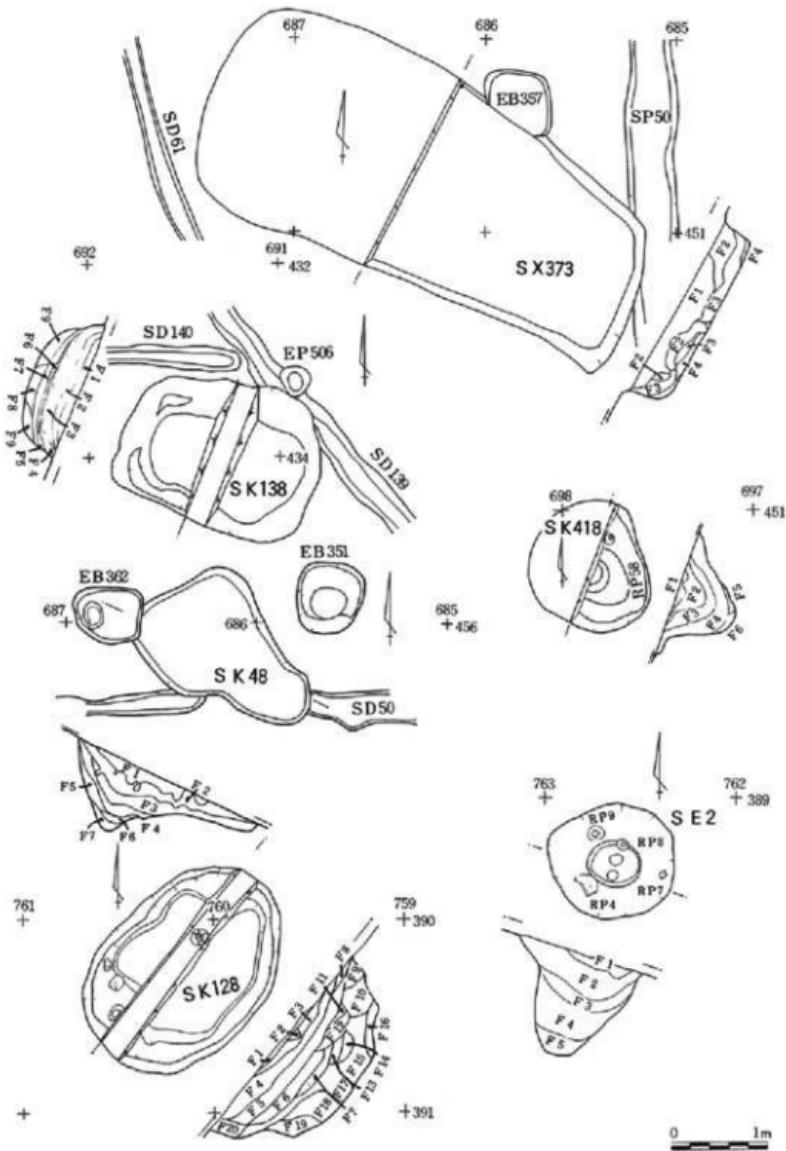
- ⑦ 青灰色粘土層 しまり、粘性強。含有物なし。
- ⑧ 青灰色粗砂層 しまり強く粘性ない。VIに類似するが若干粘子は細かい。
- ⑨ 青灰色混砂粘土層 VIより粘性は強い。所々にブロックあり。
- (井戸枠内土層)
- A 褐色粘土層 粘性強く酸化鉄粒・炭化物、土器片、植物質有機物等含む。

- B 青灰色粘土層 粘性強く木、土器片、炭化物、褐色粘土のブロック含む。
- C 黒褐色有機質粘土層 粘性強く炭化物・植物性有機質を多量に含む。
- D 青灰色粘土層 粘性強く炭化物微量、加工木片、土器、有機物を含む。
- E 褐色粘土層 粘性強く微量の砂、加工木片、有機物を含む。
- F 茶褐色粘土層 粘性強く植物性有機物を多量に含む。

出土遺物は井戸枠内D層より「阿」と墨書きされた、須恵器の底部片（第41図2）と、木簡の一部分と思われる木片が出土している。木片は幅5mm、長さ10.1cmで、角を面取りしており、表面には墨書きされた文字の返し部分がわずかに読みとれた。

SK群（第20図）

D地点の第VI次・第VII次調査では、約150基程の土壙が確認された。それらは古代のものから、それ以後の時代を決定出来る資料を版出しない土壙も含まれる。S×373はSB55の北部を壊して検出され、EB357の一部と重複している。またEB357とEB355の間に柱根が存在していたものと考えられるが、S×373により破壊されたものと思われる。S×373の覆土には何らの出土遺物が検出されず、性格不明の遺構である。SK138・418・48は平面形を隋円形や円形にもち、堆積層を6～7層にもつ。F1は黒褐色粘質土層、F2は褐色粘質土で、やや砂質の部分をもつ。F3は暗褐色粘性土層で、土器片を含む。F4は黒褐色砂質土層で、土壙の壁面部に完形の土器を出土した土壙（SK418）もある。F5は明褐色砂質土層で、有機物の破片を含む。F6は茶褐色粘質土層である。F7は青灰色砂層である。これらの土壙はSK418・48は鍾形の形状をもち、SK138は底面を平坦にした断面台形の土壙で、F7に草等の有機質土が一面に敷きつめられていた。性格不明である。SK128とSE2は第VII次の際発見された土壙で、SE2は調査途中に掘り抜き井戸と判断したものである。SK128は長径3mの平面隋円形を呈し、底部を船底にし、深さ1.2mを測る。覆土は第VI次の土壙と同様な性質をもち、層は同じであるが、所々に青灰色粘土ブロックを含み、堅い。底面には第43図6の黒漆塗りの木製椀を検出した。



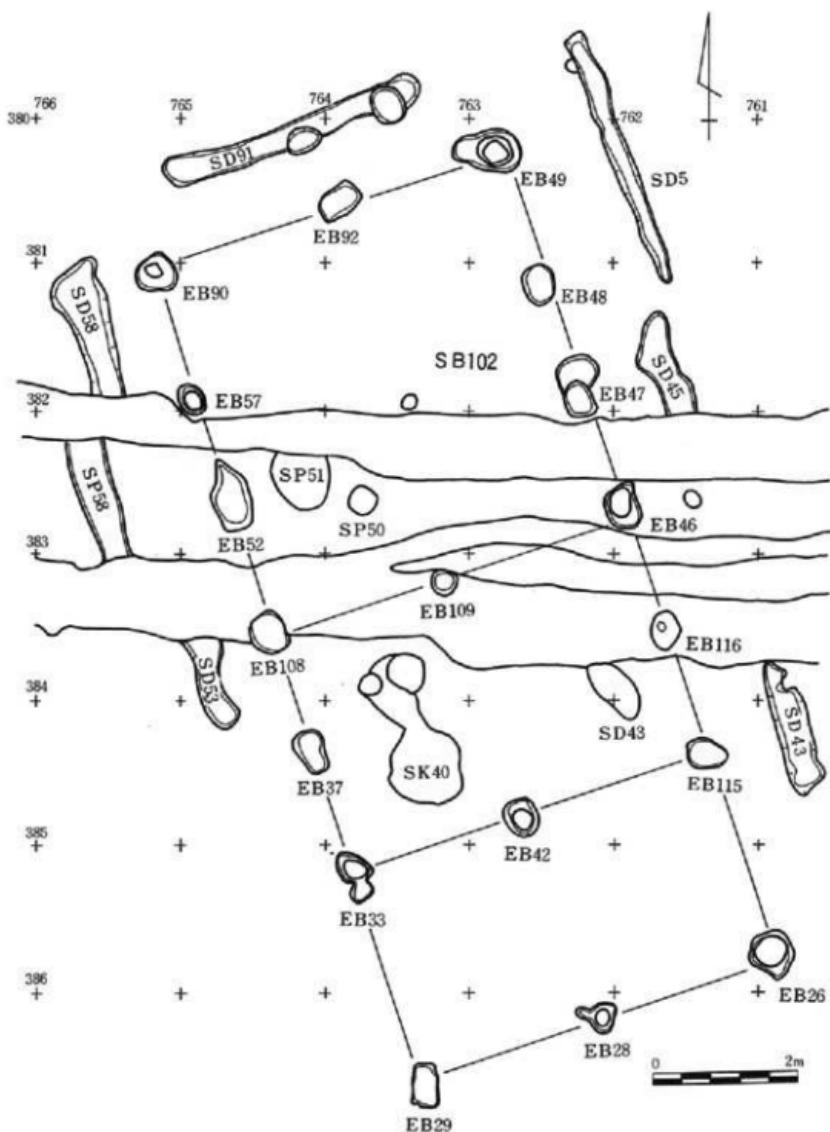
第20図 SK群

D地点笠地区は昭和53年度に実施された地区で、調査当初に笠の墨書き土器が発見されたことから笠地区と呼んだ。発見された遺構は200以上におよび、内容は掘立柱建物跡4棟、倉庫跡1棟、掘り抜き井戸跡1基、土壌や溝跡が多数検出された（第21図）。

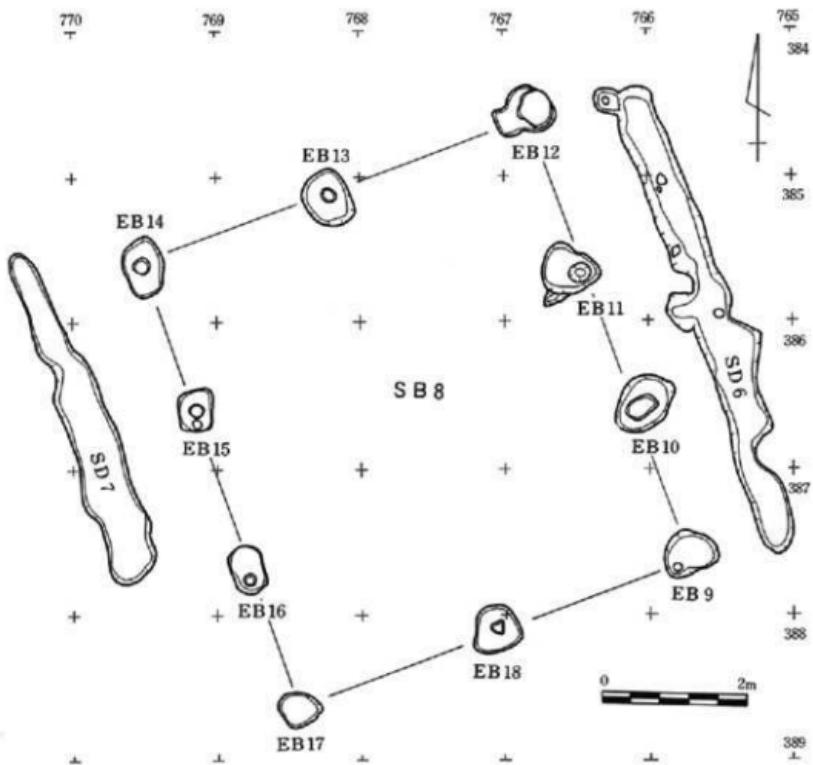
SB102（第22図）

笠地区で発見された掘立柱建物跡の中では一番大きな建物跡である。桁行五間、梁行二間の南北棟で、やや主軸を西に振れている。西桁行にはSD 58、北梁行にはSD 91、東桁行にはSD 5・45・43の雨落ち溝をもち、幅20~30cm、深さ10~15cmを測る。柱の構成は西桁行がEB 33・37・108・52・57・90、東桁行 EB 115・116・46・47・48・49、北梁行 EB 49・92・90、南梁行 EB 33・42・115で構成する。柱間距離は桁行1.8m、梁行2.5mを測り、柱穴の掘り方は径約30~45cmの隅丸方形、あるいは円形を呈し、柱根を残しているものもあり、柱は直径15~20cmほどであった。柱根が残っていない掘り方でも、径約20cm位のアタリが確認され、柱間距離が規則的に並んでいた事を示している。またSB 102の中間には間仕切りと考えられる桁行の北から4本目の柱穴を結ぶ柱穴が検出され、EB 109とし、三間×二間、二間×二間の構成となった。SB 102の南梁行の南側には、柱間3mの一間の外屋（廊）をもっている。

出土遺物は溝跡内や柱穴内から、須恵器片や赤焼き土器片を検出した。時期は出土遺物により平安時代の中頃と考える。



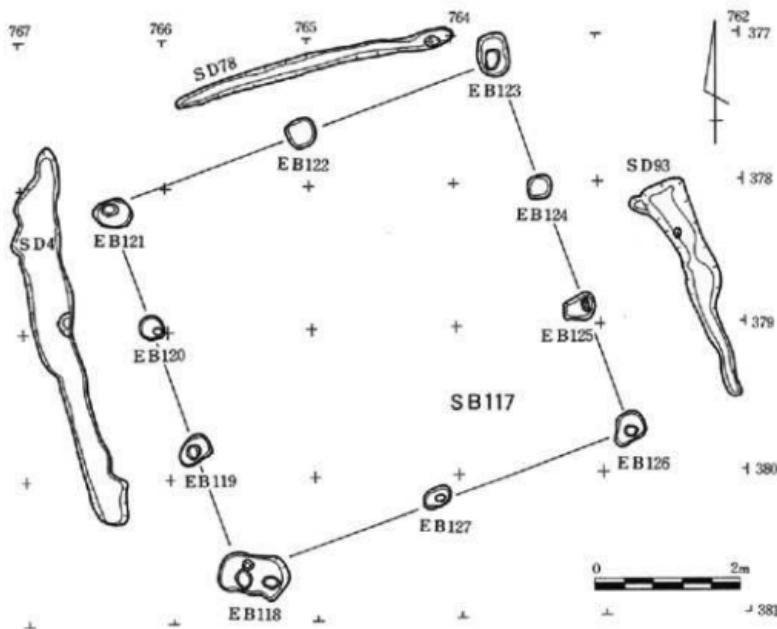
第22図 D地点 SB102



第23図 D地点 SB 8

SB 8 (第23図)

SB 102の西側、主軸方向を同一にした三間×二間の掘立柱建物跡である。溝成する柱は、西側桁行がEB 14~17、東側桁行がEB 9~12、北側梁行がEB 12~14、南側梁行がEB 9・17・18である。柱間距離は桁行2.1m、梁行2.9mを測る。柱穴の掘り方は径50cm位の不整円形を呈し、柱の抜きとられているものや朽ちた柱根があり、柱根の径は不明である。SB 8に伴う溝跡は東西の桁行部に存在するSD 6とSD 7である。東側に存在するSD 6は、長さ6.3m、幅30~40cm、深さ15~25cmを測り、西側のSD 7は長さ4.4m、幅30~60cm、深さ10~20cmである。二本の溝共にSB 8に伴う雨落ち溝と思われ、溝内や柱穴内から須恵器片、赤焼き土器片が出土しており、SB 102と同様な時期を示している。

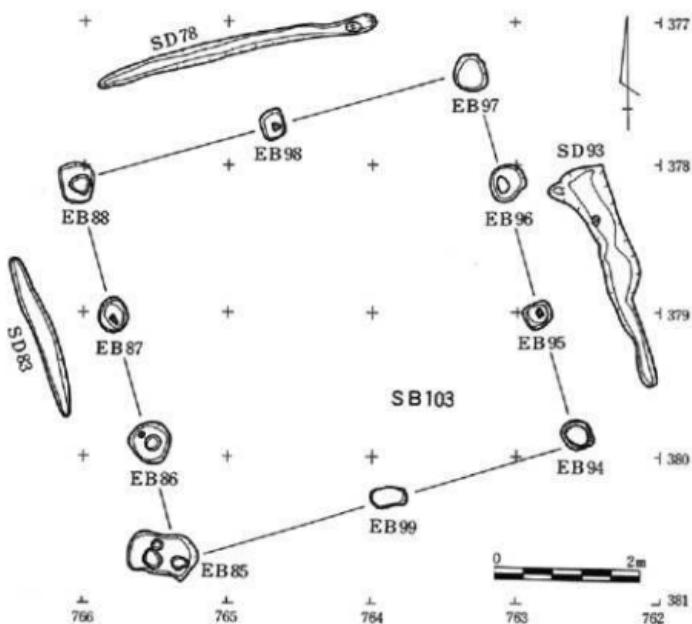


第24図 D地点 SB117

SB117（第24図）

本建物跡は、SB102の北側に隣接して発見されたもので、SB103とわずかに西方へずれた形で確認された掘立柱建物跡である。構成する柱穴は、西側桁行でEB118~121、東側桁行でEB123~126、北側梁行がEB121~123、南側梁行EB118・126・127の桁行三間、梁間二間の掘立柱建物跡である。柱間距離は桁行1.8m、梁行2.8mで柱穴の掘り方は、径約40cm位の隅丸方形や円形を呈している。一部に径15cm、長さ27cmの柱根を残しているものもあり、柱根の無い掘り方には径10cm前後のアタリと確認出来た。本建物跡に付属する溝跡は西側桁行にSD4があり、長さ4.4m、幅30~50cm、深さ10~20cm、東側桁行にSD93があり、長さ2.7m、幅20~60cm、深さ15~25cm、北側梁行にSD78で、長さ4m、幅15~20cm、深さ5~15cmである。南辺には溝跡を有していない。

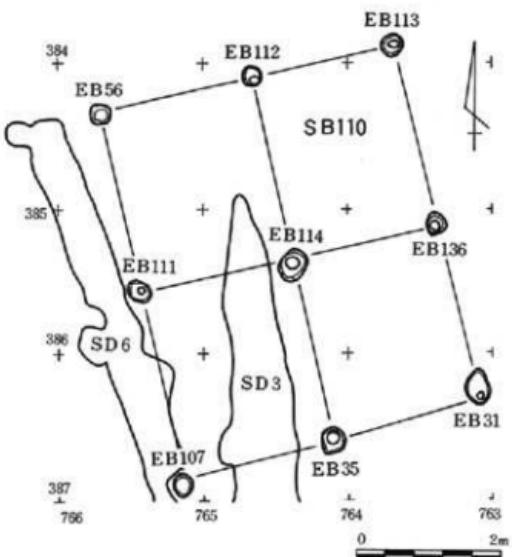
溝跡や、柱穴からの出土遺物により平安時代中頃と考えられるが、各建物跡共に多少の時期的な構成があるものと考えられる。



第25図 D地点 SB103

SB103 (第25図)

SB117と重複されて確認された掘立柱建物跡である。構成する柱穴は西側桁行EB85～88、東側桁行でEB94～97、北側梁行でEB97・98・88、南側梁行でEB85・99・94である。柱間距離は桁行が1.8m、梁行が2.8mを測る。柱穴の掘り方は径40cm程の不整円形や方形を呈している。柱根を残している柱穴もあり、掘り方底部に凹みをもつ柱穴もあり、規則性の柱穴列をしている。溝はSB117と同様にSD78とSD93を利用しておらず、SD83を西側桁行の雨落ち溝としている。長さ2.3m、幅20～25cm、深さ10～15cmである。EB85の柱穴はSB117と同一掘り方内にあり、先後関係を精査した結果、SB117の柱穴の掘り方を掘り広げ、EB85の柱穴を設けたものである。二つの建物跡の先後関係は、EB118とEB85の重複の精査によりSB117の建物跡がわずかの時期で新しいものと思われるが、SB117の柱を抜き取った柱穴があることから、建て変えられた建物とも考えられる。溝跡や柱穴内からの出土土器により、平安時代中期の時期に考えられる。



第26図 D地点 SB110

SB110 (第26図)

SB102の西側、SB2と一部を重複する。構成する柱は西辺がEB56・111・107で、東辺がEB31・113・136となり、西辺と東辺の中間にはEB112・114・35の柱で構成する。又、建物の主軸方向は西へ10度傾く、二間×二間の総柱になる掘立柱建物跡である。柱間距離は、東・西辺で2.2m、北・南辺で2.6mを測る。柱穴の掘り方は径30cmほどの円形で、柱根は残っていなかったが、アタリが径約10cm程で認められた。またSB110は、それぞれSB8に伴うSD6の雨落ち溝と、SB102に伴うSD58の雨落ち溝を切って構成しており、三棟の建物跡の中では最も新しいことが確認された。しかし時期的には同一と考えられるが、わずかに違う時期である。

SB110の建物跡は二間、二間の小さな建物でありながら中心に柱をもつ建物で、倉庫跡としての機能を有する建物跡と想定される。

第3節 発見された遺物

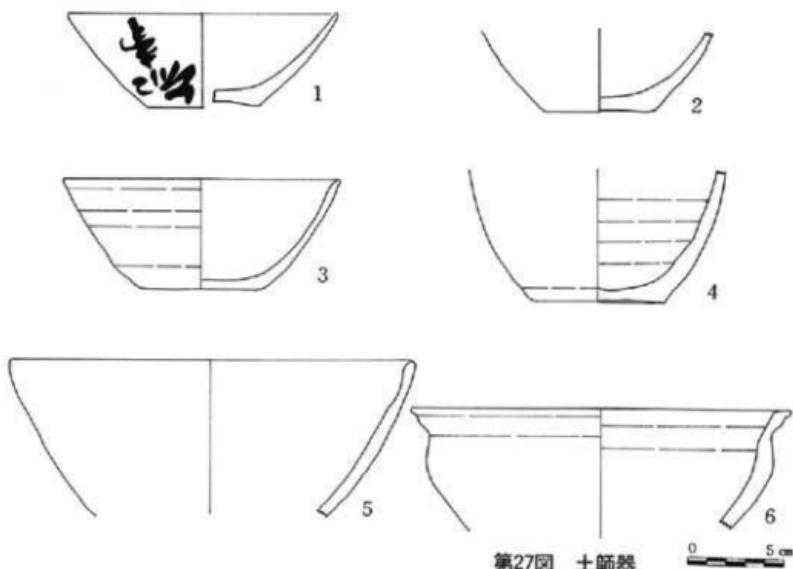
1. 土 器

土師器

本遺跡群出土の土師器は比較的少ない。すべてろくろ土師器と呼ばれているもので、环の場合は回転糸切りの痕跡を明瞭に残している。そしてそれらは内外面とも黒色処理されたいわゆる黒色土器か、内面のみ黒色処理した内黒土器が多い。土師器に一般にみられるへらけずりやへらみがきなどを施したものは、黒色処理の部分を除いてみられない。

器形は环がもっとも多く、壺や甕をわずかに含む。环にあっては、比較的法量の大なるものが多く、第27図3にみられるように深くて大きいのが普通である。第27図1の土器は口径14.0cm、高さ4.8cm、底径5.7cmで、体部側面に「知事」の墨書きがあり、内面は黒色処理されている。3は、口径14.3cm、高さ5.8cm、底径6.0cmで、口径に対する高さの比は0.4程度である。5は大形の壺であるが、底部が欠失して不明である。

これらの内黒土器や黒色土器は、酸化炎焼成で黒色処理という整形にあたって二次的加工を行っているという意味で土師器として取り扱ったが、また土師器とは別に分類しなければならないのかも知れない。そのような観点からするならば、本遺跡群のような平安期の遺構からは土師器といわれるものは、ほとんど出土しないと考えられよう。



第27図 土師器

須恵器

本遺跡群では赤焼土器について須恵器の出土が多い。器種では环が大多数を占め、高台を付したものもある。その他、皿・高台付皿・蓋など小形のもの、広口壺・短頸壺などの壺類、大形の壺類なども出土している。大形の須恵器には、外面に叩目、内面に青海波文や同心円文による押圧痕が認められる。

环は、底部のろくろからの切り離しがへら切りによるものと、回転糸切りによるものの二様がある。へら切りと糸切りのものとでは若干器形に差異が認められる。へら切りの环は、底径が大きく浅いものが多い。口径に対する高さの比率は0.25前後である。

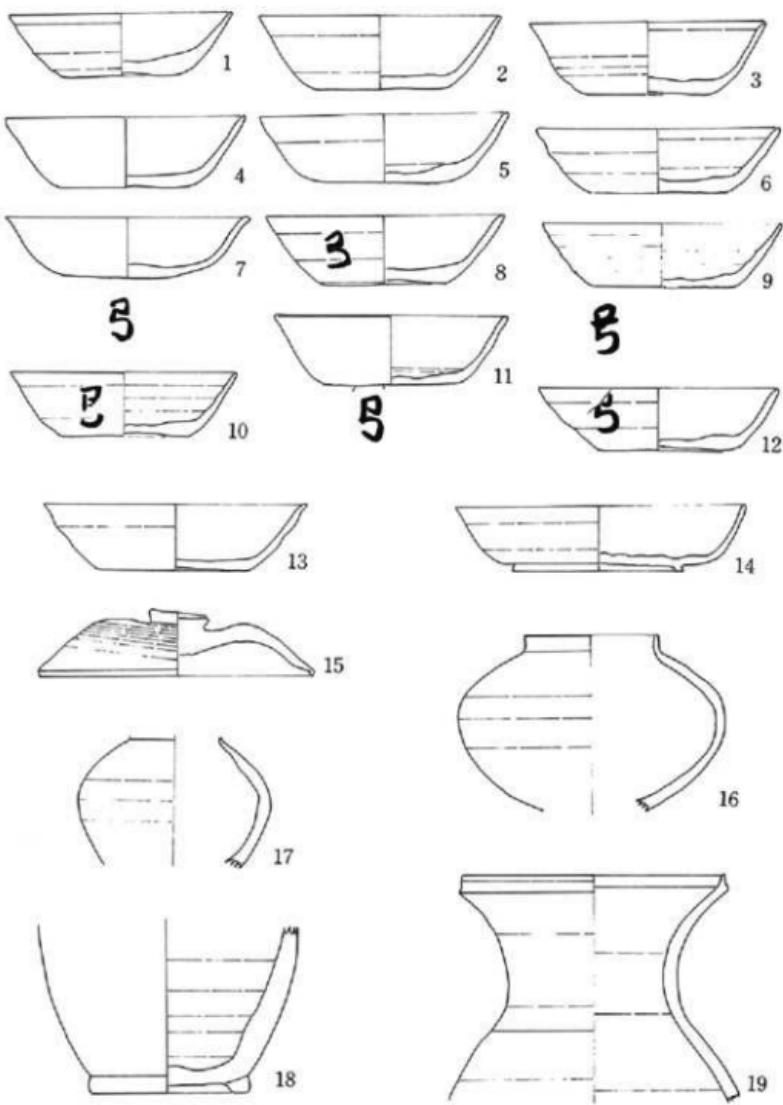
それに対して糸切りのものは0.3前後のものが多い。へら切りのものは、底部と体部のくぎりが明瞭なものと、底部より明確な稜をもつこともなく体部に弯曲を描いて移行するものとがある。

糸切りのものは、概して底部と体部のくぎりが明らかであるものが多い。これらは比較的小形の口径が12cm台のもの、14cmを越す大形のものなどがあるが、平均口径は13.5cm、高さ3.8cm、底径5cm程度である。ろくろ自は顯著なものが多い。体部はわずかに内弯しながら外傾して立ち上がる。体部側面や底部に「弓」「守」「河」「何」「淨」などの墨書が書かれるものがある。

高台はすべて付高台で、比較的高いものが多い。また底部切りはなし、へら切りによるものの高台は同じく付高台であるが、低いものがほとんどである。若干の高台付皿が出土しているが、底部糸切りの痕跡があり、高い高台が付される。

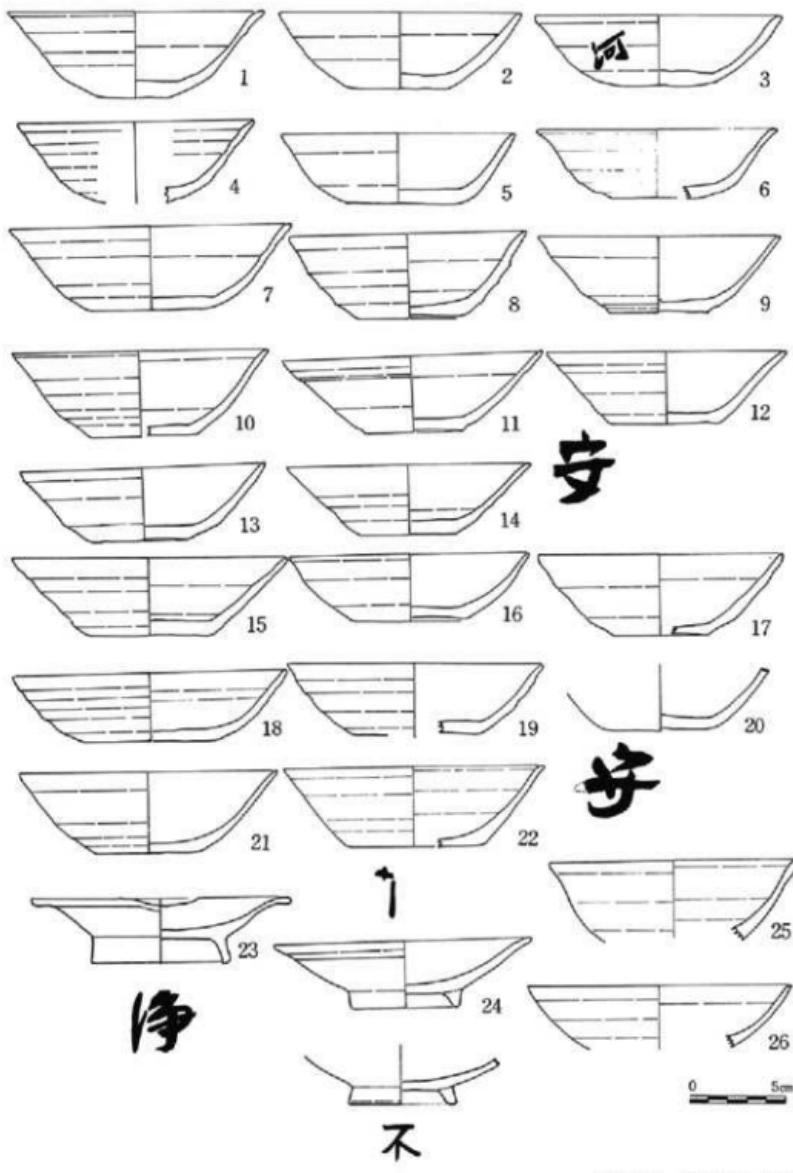
他の器種は破片が多く、器形のわかるものは少ない。外面に叩目があり、内面に同心円文による押圧痕が認められ、口縁部が外傾し、口頸部が「く」の字状に屈曲して、体部が球形に近いふくらみを見せる大形の壺、口縁が短く直立し、体部が球形を呈する薬壺状の短頸の小壺、また口頸部から口縁部にかけて外反し、体部が細長くふくらみをみせながら、底部にいたる水瓶か小瓶状の瓶などは特徴的な器種である。これらの須恵器は体部下半にへらけずりの痕を残すものが多いが、环などにあっては、全く調整の認められないものが大多數であり、稀に体部下半に回転へらけずりによる調整の認められるものがある。

これらの須恵器のなかで明瞭に時期を推知させるものはないが、概略的にいえば平安時代の中に包含される。へら切りの須恵器环は一般に古いといわれるが、これらを含めて、おおむね9世紀の中頃より10世紀代にいたるものであろうと推測される(第28・29図)。



第28図 須恵器 (1)

0 5 cm



第29図 須恵器 (2)

赤焼土器（第30～33図）

平形遺跡の各地点から出土する土器中に、いわゆる「赤焼土器」の占める割合はかなり高い。土師器や須恵器よりも量的に多いものと思われる。赤焼土器の大半は环である。

赤焼土器は、酸化炎焼成のために、赤褐色や黄褐色を呈し、土師器にみられるような黒斑は認められない。酸化炎焼成であることは土師器に共通するが、製作技法の点では須恵器と同じで、ろくろ整形を行い、けずりやみがきなどの二次加工はほとんどみられない。ろくろから切りはなしただけで焼成している。器形は环が圧倒的に多いが、他に皿・甕・鍋・釜の類があり、甕や鍋などには須恵器と同様に表面に叩き文、内面に青海波文を施したものがある。多賀城跡調査研究所では、ある一定の形態をもつ酸化炎焼成の环群に対して「須恵系土器」の名称を付しているが、いわゆる須恵系土器は赤焼土器のなかに含まれる。

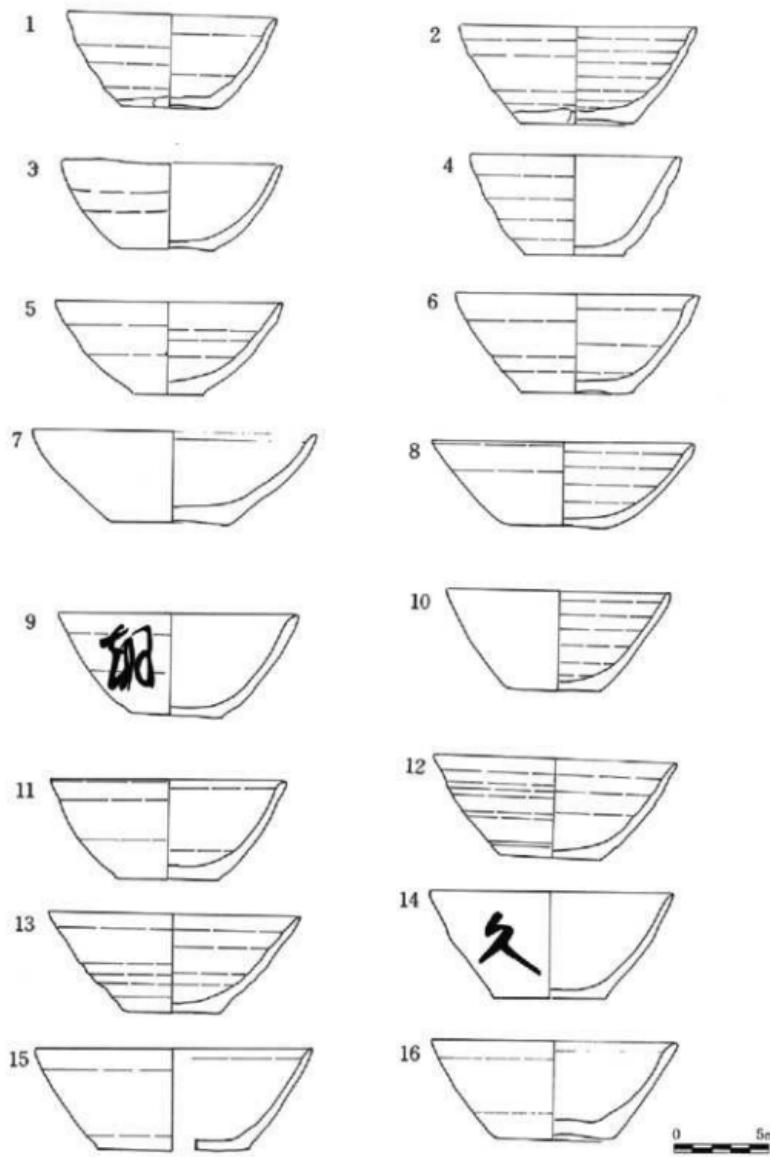
赤焼土器は、土師器や須恵器とともに平安時代の遺跡からかなり多く出土をみるが、とくに10世紀以降、土師器が少くなるのに反比例して生活什器の中で占める比重を増していく。そして中世までその影響が及び、赤焼土器の大半を占める环は姿を消すが、酸化炎焼成軟質の燈明皿・かわらけ・鉢・甕の類に引き継がれているようである。しかしここでは、それら中世の酸化炎焼成土器を含まず、平安時代の酸化炎焼成の环を主とした土器を赤焼土器と仮称しておこうと思う。

平形遺跡出土の赤焼土器には、环・高台环・甕・鍋（渡前遺跡）などの器種があり、环がもっとも多い。环はすべて底部切りはなしが斜切りで、口径13cm前後、高さ4.5～5cmの比較的大型のものと、口径11cm前後、高さ5cm前後の比較的小型で深いものとがあり、底部から単純に外反しながら起き上がる器形のものが多い。底面と側面体部の間が明瞭に区画されるものと、底部からゆるやかなカーブをえがいて体部に移行するものとがある。口径に対する底径の比率は0.4前後のものがもっとも多い。底径が口径に対して0.5を越えるものはないが、底径が小さくて0.3程度のものはある。概してろくろ目が顕著である。器形よりすれば、ほぼ類似した単純な环が多いといえるだろう。体部下半の底部に接するあたりに、横に手持ちへらけずりの痕跡が認められるものが二例ある。

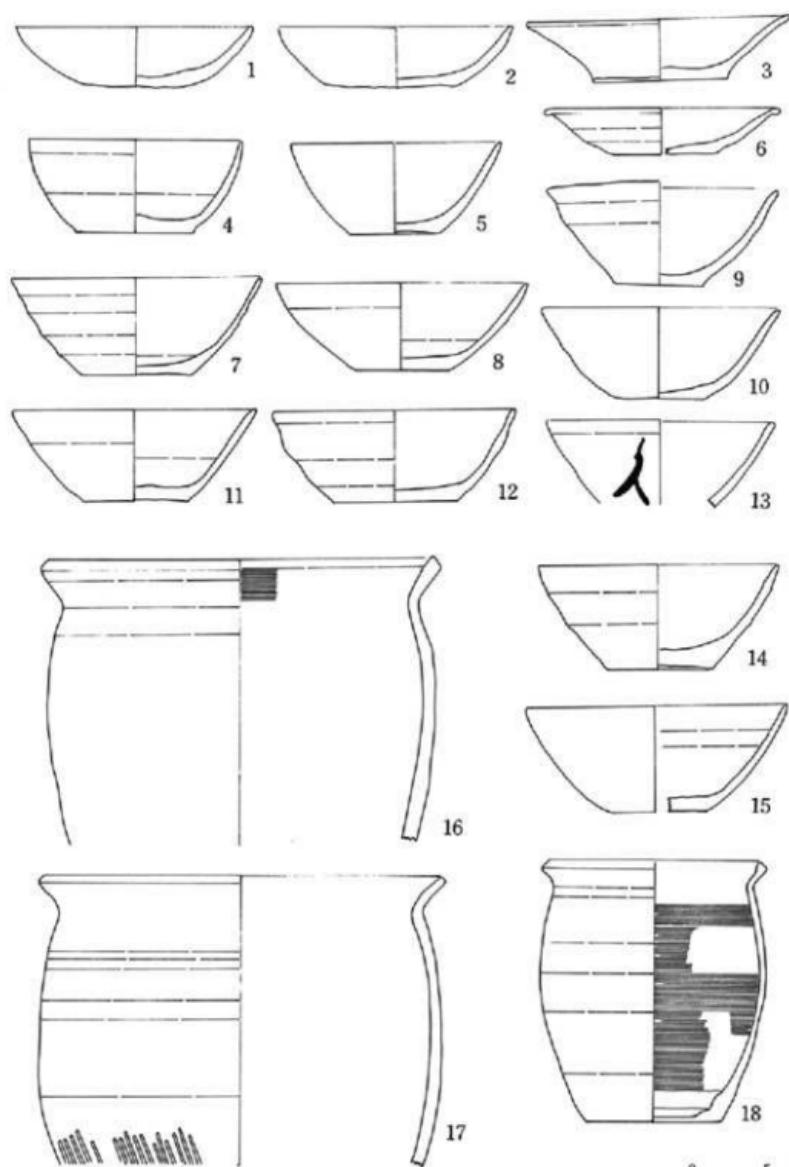
数は少いが、高台环や皿がある。环の場合は付高台であるが、皿はけずり高台の例が多い。皿は径12cm程度の小型のものである。

甕は、口縁部が「く」の字形に屈曲し、口唇部が直立する形のもので、体部が僅かにふくらみをみせて底部に至る。口縁部附近には、なでやろくろ目の痕跡がよく残る。割と小型のものもあり、背は低く、口径ぐらいたしかない。これらは赤焼土器独特の甕である。

渡前遺跡出土のものに、鍋が一例ある。口径43.5cm、高さ12.5cmで、ゆるやかに弧をえ



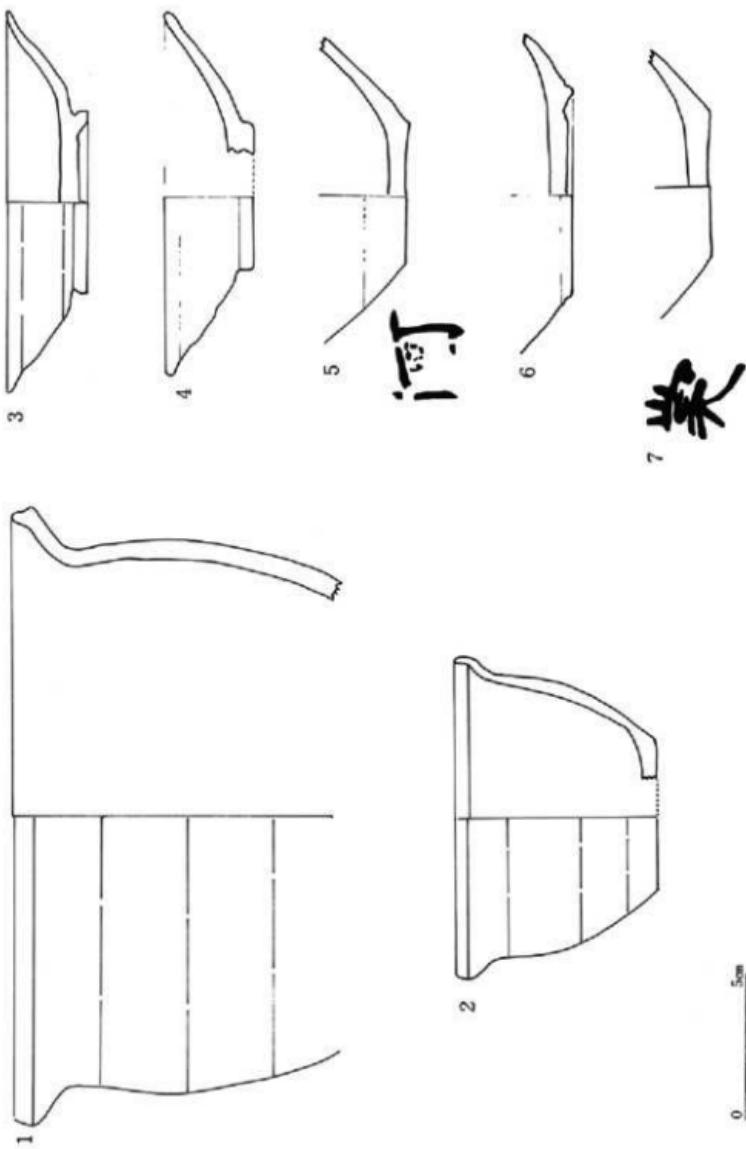
第30図 赤焼土器 (1)

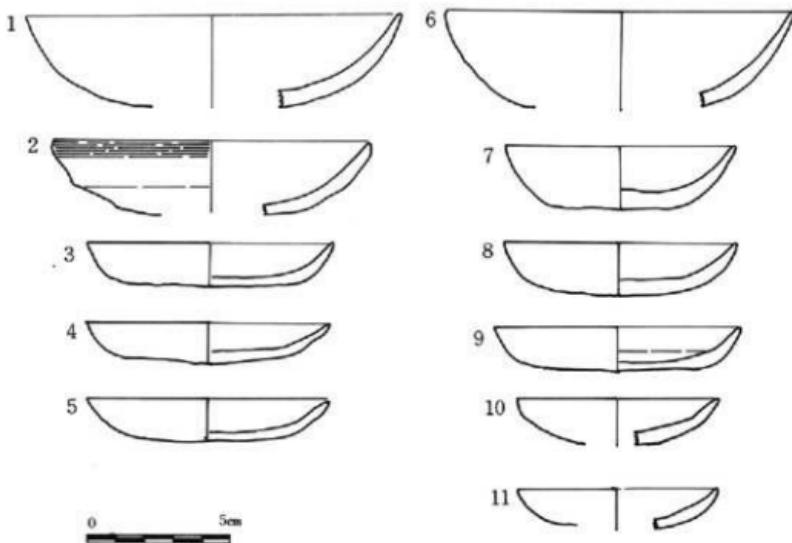


第31図 赤焼土器 (2)

0 5 cm

第32图 赤绘土器 (3)





第33図 赤焼土器 かわらけ類

がく丸底である。口縁部は壺とよく似ており、くの字型に屈曲して口唇部で起ち上がる。口唇端の断面は、三角形状を呈する。口縁付近は横なでの痕跡が顯著で、体部以下全面に須恵器と同様の叩き目があり、内面にも板に丸のみで10条ぐらい彫ったと思われる工具で叩いた痕が全面にあり、整形手法は須恵器に似ている。黄褐色を呈する酸化炎焼成で、外面は火にかけられたよう黒く煤が付着している。直接火熱を受けることが多かった鍋や釜や甕などは、須恵器よりも火熱につよい酸化炎焼成による赤焼土器が用いられたのであろう。

本遺跡出土の土器からみても、10世紀前後より、日常の生活什器として赤焼土器がかなり多く用いられ、普及していくものと思われるのである。

中世陶器

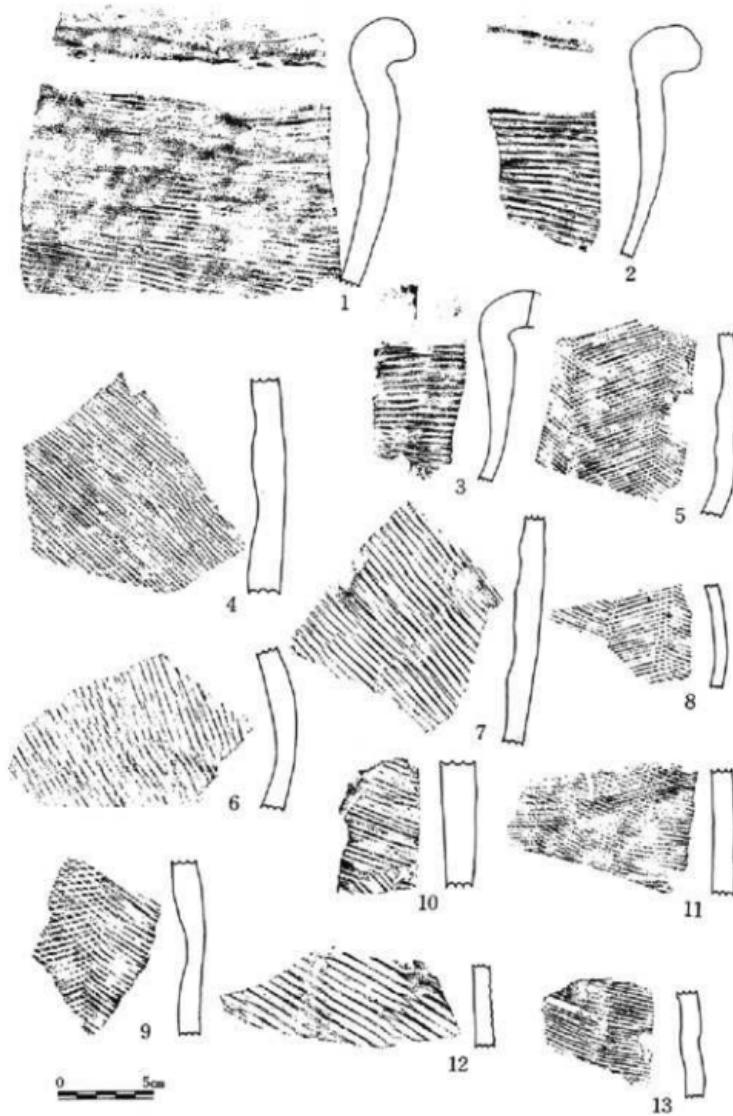
中世陶器は、平形遺跡の各地区より出土を見るが、特に平形館を含むG地点出土遺物のほとんどが中世陶器である。従ってG地点出土の遺物を主として述べることにしよう。G地点からは、古代の土師器や須恵器、赤焼土器は僅少である。ここから出土した中世陶器は、珠洲焼系陶器、越前焼系陶器、赤焼土器、瀬戸・美濃系施釉陶器、青磁類、その他があり、珠洲焼と越前焼、赤焼土器で全体の90%以上を占める。珠洲焼は破片総数の60%、越前焼10%、赤焼土器20%の割合におおよそなるようである。これらは多く溝や土壌などの遺構中より出土している。

《珠洲焼系陶器》 全体の土器・陶磁器の半数以上を占め、中世陶器の主体を占めるのがこの陶器である。能登半島の珠洲市の周辺で製作された須恵器系の還元炎焼成による硬質の陶質土器を珠洲焼といつてあり、本県内の古代末より中世にかけての集落跡はもとより、経塚の陶製経筒、火葬墳墓の骨蔵器などもこの陶器が主体をなしている。但し、これらが「珠洲焼」そのものであるのか、珠洲焼類似の陶器が本地域にあって現地でつくられたものか、まだ不明な点が多いので「珠洲焼系陶器」と呼ぶことにする。酒田市新浦・泉谷地窯跡について、珠洲焼系の窯との疑いがもたれたことがあるが、まだそれらの窯跡からは中世陶器が確認されていない。新浦においては窯跡の所在が不明確であり、泉谷地においても発見されている十数基の窯跡は須恵器のそれである。従って当分の間、この種の陶質土器を「珠洲焼系」なる語を冠して呼びたい。

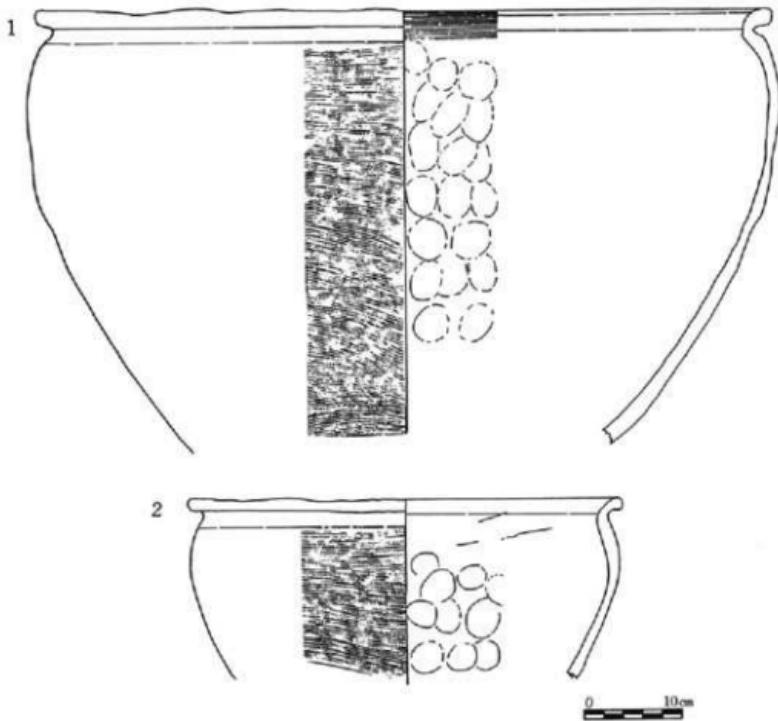
本遺跡出土の珠洲焼系陶器は、甕と壺、擂鉢の三種の器種がある。壺は破片のみで、器形は不明である。甕は口径70~80cm、高さ50~60cmの大甕から、口径30~40cm程度の中甕がある。口縁部は短く、わずかにくびれて弯曲しながら底部に至る。口唇部は肥厚した玉縁状で、棱角的なものはみられない。器表には横位、又は右下りの条線状叩目が施され、内面には丸石のようなものでつけた円い押圧痕が認められる。この種のものの内面にはすべて円い押圧痕がある。

条線状叩目は、甕と壺の器表に叩きしめと調整のため施文されるが、目の粗いものと細かいものがあり、大甕などには粗いものが多いが、壺などには目の細かいものが多く、綾衫状につけられたものなどもある（第34図5・8）。

擂鉢もかなり多く、10条前後の櫛目をもつ器具で、器内面底部に向って放射状に叩目が施される。なだらかなはりをもってひらく器体が、口縁部へ近づくにつれて器厚を減じつつ内弯ないし内屈ぎみに立ち上がる器形を基本とする。口径は30cm前後のものが多いが、22.3cmのものもあり、高さは13cmより14cm程度である。およそ口径1に対して高さ0.4~0.5、底径0.3ぐらいが一般的である。



第34図 G地点珠洲焼系中世陶器拓影

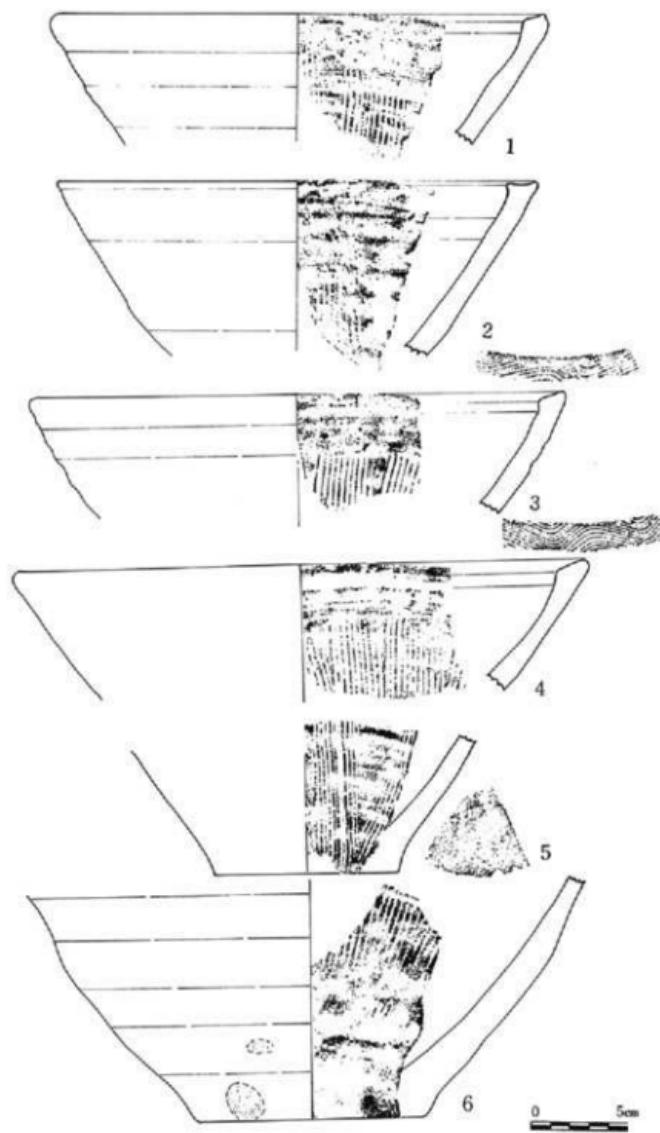


第35図 G地点 珠洲焼系中世陶器（1）

口唇端部は内側で面をとるものと、水平にならし中央部がややくぼむものとがあり、前者の内削ぎの面に、数条の波状柳目文がめぐるものもある。卸目は、器内面に向って8条及至9条施され、中心部では複雑に交錯する。（第36・37図、図版27～31）

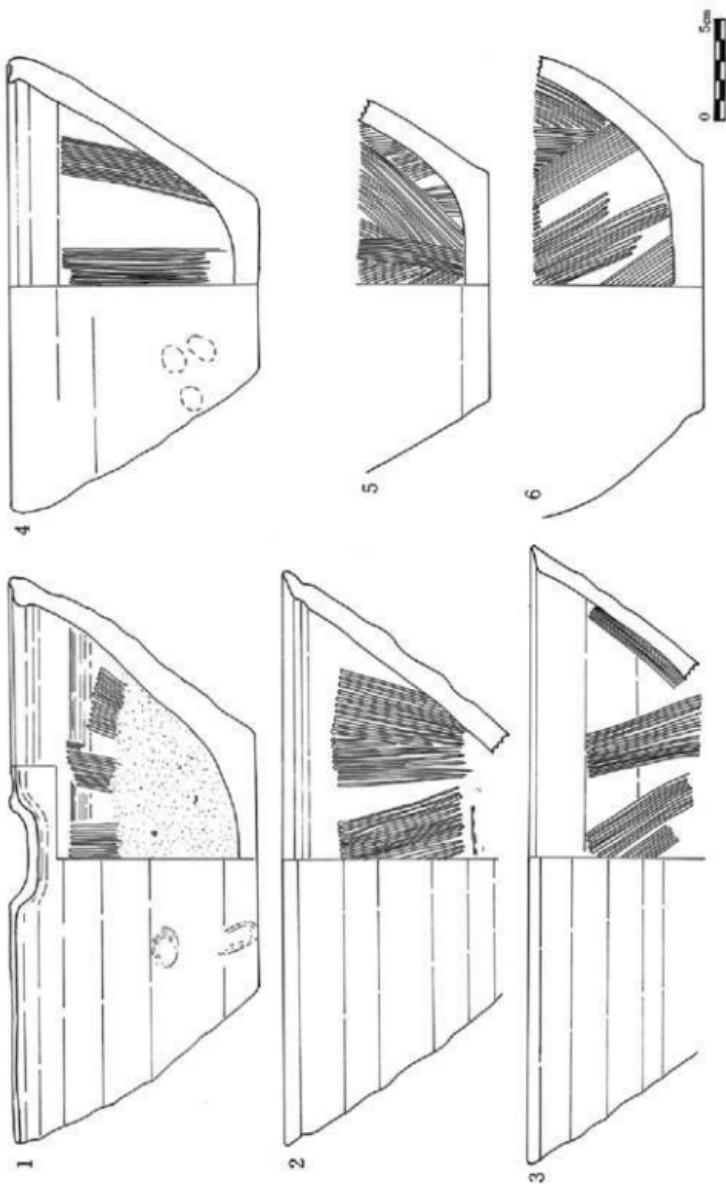
珠洲焼系陶器は、表において玉縁状の口縁を有するすんぐりしたもの、擂鉢は口唇端部内削りが多く、卸目が放射状に施される等の特徴があり、一時期のものでながい期間にわたるものではないようと思われる。この陶器の器色は鼠色・灰白色・青味がかった灰色等で、胎土中に小礫などを多少含む場合があるが概して堅緻である。（第36・37図、図版27～31）

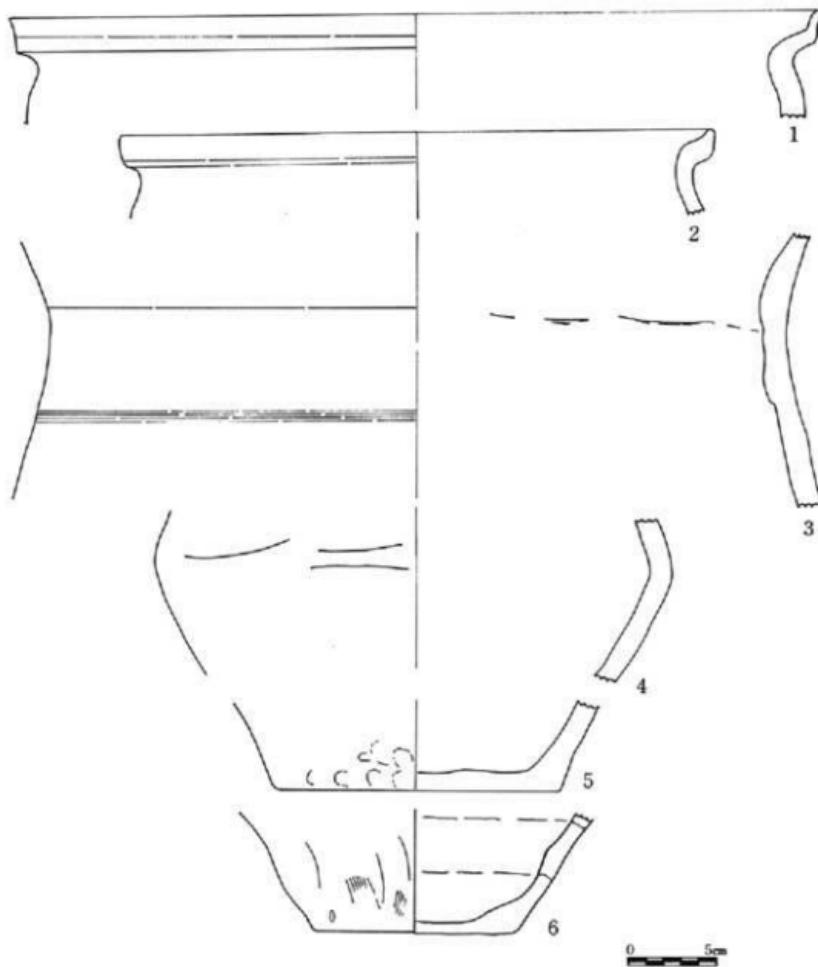
《越前焼系陶器》 越前焼などに特有の茶褐色の器肌を呈する。瓷器系の無釉の焼締め陶で、口径50cm前後の大甕が多い。口づくりが特徴的で、一度外反する口縁部が口唇部



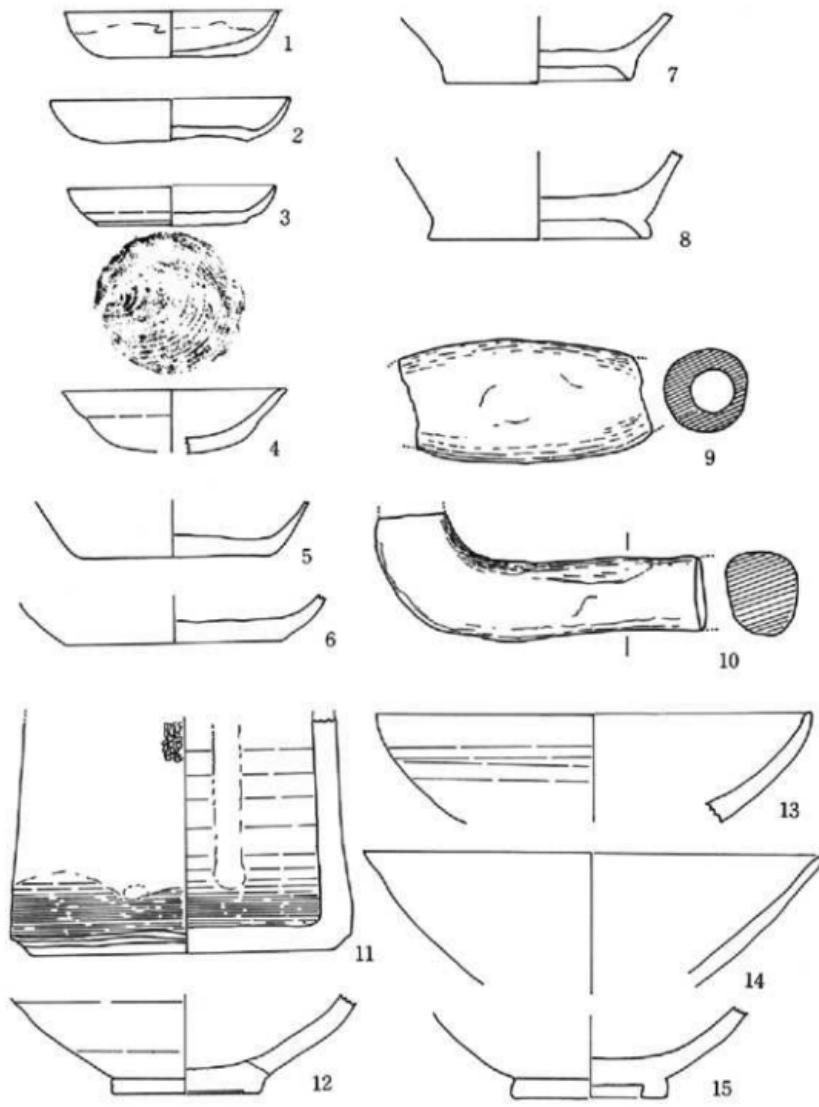
第36図 G地点珠洲系中世陶器 (2)

第37図 G地点珠州焼系中世陶器（3）



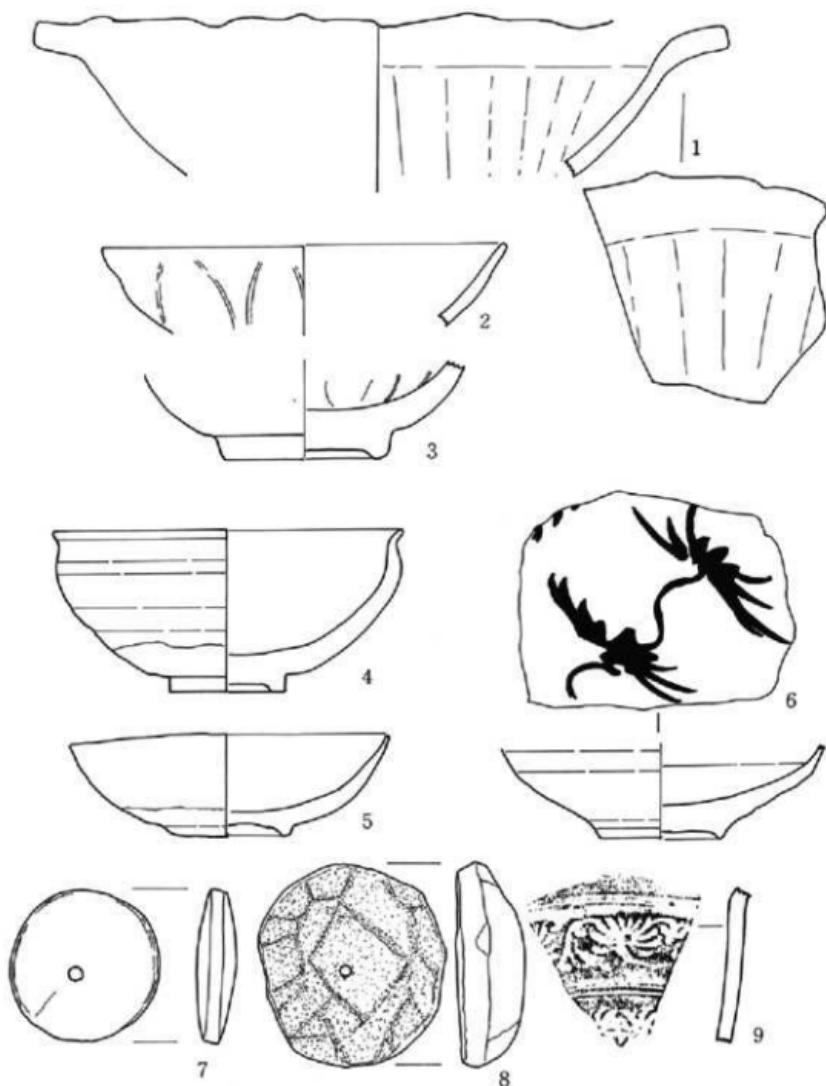


第38図 G地点 越前焼系中世陶器



第39図 赤焼き土器・かわらけ・土錘・鍋把手・古瀬戸系陶器
 1~8 赤焼き土器(かわらけ) 9 土錘
 10 鍋把手 11~15 古瀬戸系陶器

0 5cm



第40図 その他の陶磁器・紡錘車

1～3 青磁 4～5 美濃天目 6 古唐津
7～8 紡錘車 9 不明の磁器片

において直立し、あたかも複合口縁のような形状をなす。表裏ともへらなどでよく叩きしめられている。口縁部より肩部まで、黄緑色の灰釉をかぶるものもある。この種の瓷器系の中世陶器は、新潟県筆神窯や宮城県の品の浦・東北・三本木などの諸窯からも類似のものが出土しているが、本遺跡出土のものは古越前にもっとも近い。(第38図、図版32)

《赤焼土器》 これは珠洲焼系陶器について破片数が多い。甕や壺の大型品はほとんどなく、大部分が證明皿などに用いられた「かわらけ」である。それらは、大きいものは口径12.3cm、小さいものは6.7cmで、8~9cmのものが多い。浅い皿状をなし、底部の切りはなしは糸切りで行われたものが多い。口縁部に油煙のあとと思われる黒い煤が付着したものが多い。赤褐色か灰褐色の色調を呈する。中には鍋もあったらしく、把手がされている。他に鉢形の土器も少量あったものと思われる。(第33図・第39図1~10、図版33)

《その他の施釉陶器》 量は少ないが注目すべき施釉陶器が出土している。

○瀬戸・美濃系の陶器 素地は白色又は鼠色で、黄緑色の釉がかけられ、肩部より流条化する。壺と皿の破片があり、中には円筒形の底部が出ているが器形は不明である。約20片出土しているが小破片が多い。黒釉の美濃天目もある。(第39図11~15、第40図4~5、図版34)

○青磁類 約30片出土している。南宋より元にかけての青磁と思われるが、素地は灰白地で、淡緑色の美しい釉があつくかけられる。龍泉窯の砧青磁の皿破片もある。口縁花弁形を呈する皿や、蓮弁文の皿もある。概して高台はがっちりして厚く高い。13世紀後半より14世紀にかけてのものと思われる。(第40図1~3、図版35)

○古唐津・その他 赤褐色の素地に鼠色、又は黄緑色の灰釉をかけた古唐津焼の皿がある。中に黒色の絵文様が見込みの部分に認められるものもある。高台はちりめん高台である。平戸系の古唐津と思われる。他に朝鮮唐津1片、古志野1片があるが、これらは近世初頭と思われる。他に数は少ないが、古伊万里の破片や近世から近代にかけての陶磁片もある。(第40図6、図版36)

2. 墨書き土器 (第41・42図、図版39~41)

本遺跡群出土の土器の中に、文字を墨書きした、いわゆる墨書き土器が多くみられる。破片などのために、あるいは一部消えているため判読できないものも含めて29点ある。それは、須恵器・赤焼土器の环の体部外側の侧面や底部に書かれており、すべて外表に認められる。本遺跡群よりもっとも数多く出土している赤焼土器に書かれたものが、須恵器に書かれたものより若干多い。

大抵1字のみの場合が多いが、「知事」の例のように2字のものも一例ある。その中には、用具・器物の名称かと思われる「弓」「笠」「袈」「杖」などの墨書きがもっとも目立つ



第41図 墨書鉛

ている。なかでも「弓」例は5例を数え、「笠」は三例である。人名の一部かと思われる「阿」が4例あり、「守」が2例ある。その他「不」「巾」「淨」「久」「朝」「河」などがある。これらの墨書土器は、建物群が検出された跨り地区からの出土がもっと多く、12例を数えることができる。墨書土器の中には、ふつう職名、人名、地名、所属する集団名、吉祥句の一部などが多いといわれるが、ここから出土した資料について、器物名を示したかと思われるものが多いが、まだ文字の意味するものは明らかでない。

跨り地区出土の赤焼土器の杯体部に蕨手をえがいたような墨書土器があり、蕨の芽が地上に頭部を上にして崩れ出る様子がえがかれており、下部の破片は逆に底部の方に巻かれた頭部が上下二段に表現されている。この杯は、口径13.0cm、高さ4.5cm、底径5cmで、赤褐色を呈し、体部が直線的に外傾する赤焼土器である。(第42図)

蕨は古来、生命の再生を意味する植物とされ、吉祥を象徴するものと考えられているが、本土器も器面に吉祥句を書くと同じ意味をもって表わされたものと思われる。墨書によって、蕨そのものがえがかれている土器はまことにめずらしい。



第42図 蕨手模様の墨書土器

3. 木製品 (第43図、図版38)

V次調査のSD 22を中心として、VI次・VII次調査においても若干の出土がみられた。

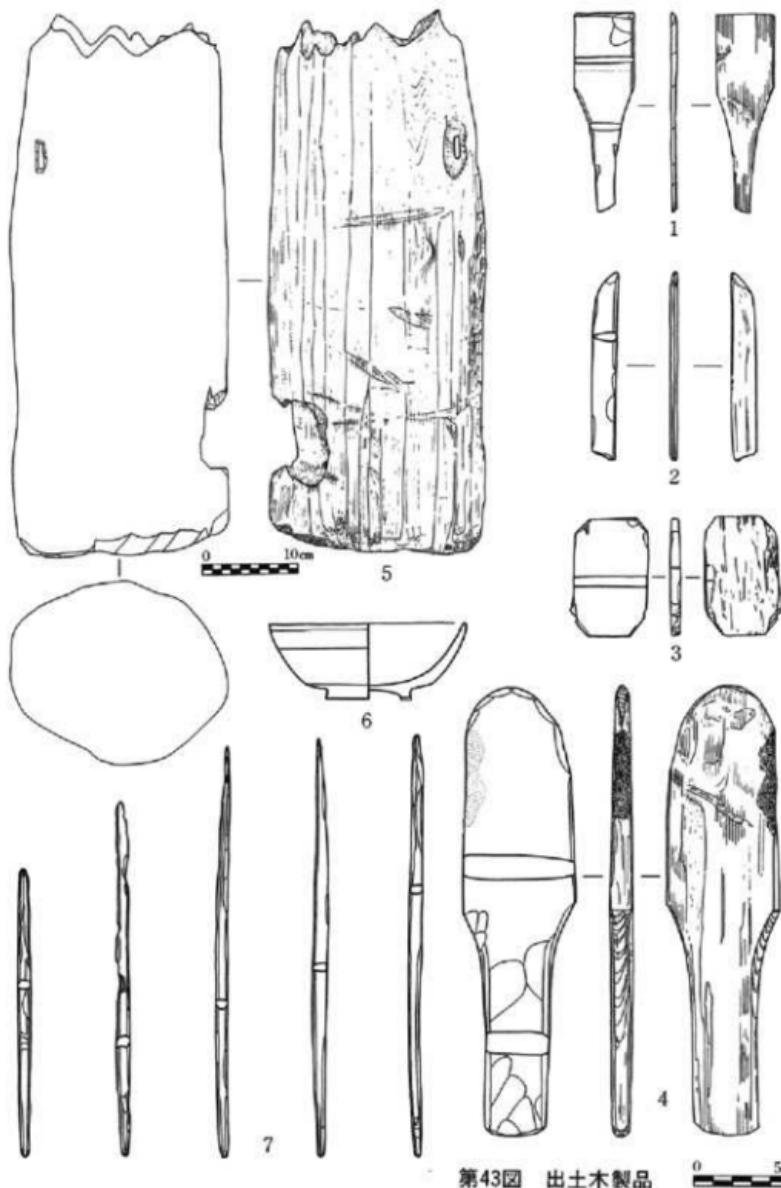
V次調査出土木製品

ヘラ状木製品 (第43図1) 小型のヘラで完形品。柄部にゆるやかな曲線をもつ。周囲部は直角的に、先端部は鋭角的に断たれている。両面とも平坦に加工されている。下漆塗用の鋪ベラとして使用されたものと考えられる。長さ10.3cm、最大幅3.1cm、厚さ0.3cm。

ナイフ型木製品 (第43図2) ナイフ型を呈する。刃に相当する部分は両面からていねいに削られている。先端部は鋭い。漆引き用具の一種、線引き用「刀刃」と思われる。基部欠損、長さ9.6cm、最大幅1.3cm厚さ0.4cm。

ヘラ状木製品 (第43図4) ヘラ部、柄部とも両面から均等に削られている。中央部は地肌面をあまり加工せず製品化している。長さ23.5cm、最大幅5.8cm、厚さ1.2cm。

フダ状木製品 (第43図3) 長方形の四隅を削り落とし八角形を呈する。墨痕は認め



第43図 出土木製品

られない。長さ6.1cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm。

箸（第43図7） 細い棒状で、周囲部を面取りし先端部を尖がらせているもの、または丸みを帯びるよう加工されているもので、断面が隋円、あるいは4～8角形を呈するものを箸とした。完形品27、破損品22。SD 22より出土。

漆器 内外両面黒漆塗の木椀片（三分の一欠損）、内面に朱漆、外面黒漆塗面上に朱で丸に三の紋の描かれた木椀片（五分の一欠損）が出土した。いずれもロクロ仕上げである。

他の木製品 SD 22より性格不明の端板、棒状木製品が計20点検出されている。

V次調査出土木製品

木筒（下図） 井戸（SE 2 覆土）より出土。墨痕がわずかに認められる。周囲を削って角を落し、下端部は両側から削られ尖らせている。本来は木筒の形態をとっていたものと思われるが、二次使用（用途は不明）のため元の形態はとどめていない。文字の判読は不可能である。長さ10.1cm、最大幅0.4cm、厚さ0.3cm。

VI次調査出土木製品

漆器（第43図） 内外面とも黒漆塗木椀（五分の一欠損）ロクロ仕上げである。器高3.9cm、口縁部径10.2cm、厚さ0.5cm。



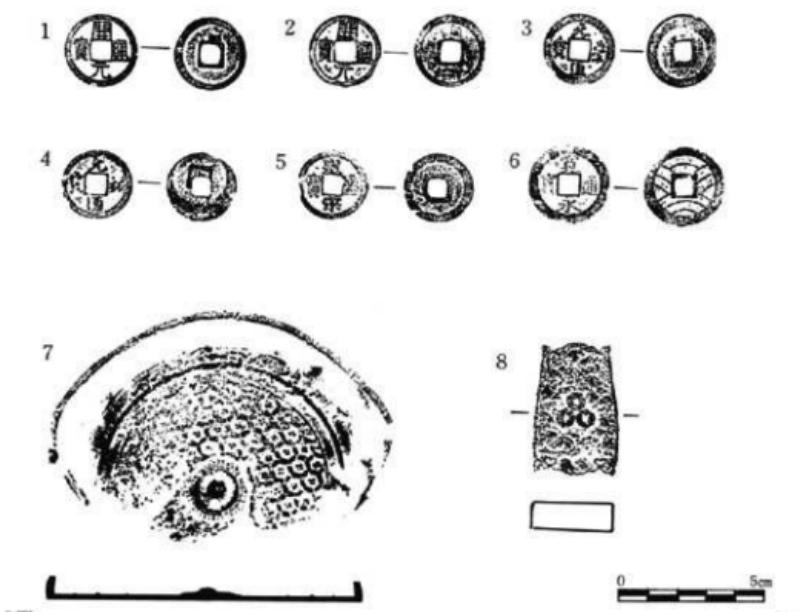
（原寸大）

4. その他の遺物（第44図、図版37）

平形遺跡各地点より古銭類8枚が出土している。もっとも古いのは「開元通宝」で、これは2枚発見された。次に楷書体の「皇宋通宝」（铸造年1039）、行書体の「元墨通宝」（1078）、行書体の「元祐通宝」（1093）各1枚ずつ、他に「寛永通宝」3枚である。これらは各所より、ばらばらの状態で発見されている。

平形館に近いG地点からは、銅鏡1面が出土している。半欠で発錫著しくゆがんでいる。鏡背には亀甲文があり、中央に花芯座の低い鈕がつく。縁は直角式中縁で、高さ8mm、厚さ2.5mm、界縁は三重の線からなり、外区は鋸歯文と細線文によって囲まれる。歪みが著しいが、面径は10.8cmである。鎌倉時代の銅鏡と推定される。

同じくG地点より刀装具と思われる銅板製品が出土している。小刀の鞘尻であろうか。断面長方形のものを銅板を折り曲げてつくり、表裏とも中央部に三つ丸文と地文に波形文が打ちつけてある。



第44図 金属製品

以上の金属製品の他に、石製品として砥石や石臼の破片がかなり多く出土している。石臼は凝灰岩製で、内部には鉄目がある。砥石には新しいものも含まれるが、石臼は中世のもので、遺跡に附隨した遺物である。

渡 前 遺 跡

Ⅲ章 渡前遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査の経過

渡前遺跡は、昭和44年に土地所有者によって開田工事がなされた際、新しく発見された遺跡である。この時、同地を訪れた野尻 侃によって井戸跡や板列などの遺構や、「辛」の墨書きをもつ多量の須恵器坏が発見されている。当時は遺跡名を「古郡C遺跡」としている。

昭和51年になって、遺跡を含む渡前地域一帯が赤川右岸地区県営大規模圃場整備事業にかかることになり、分布調査の結果、昭和44年の埋蔵文化財包蔵地の西側にも遺物が散布する地点が確認された。土地の大字名から両遺跡とも古郡ではなく、渡前分に入ることがわかったので、従来の「古郡C遺跡」を「渡前A遺跡」、新規に発見された地点を「渡前B遺跡」と呼ぶことにした。昭和53年に発行された山形県遺跡地図での登録は次の通りである。

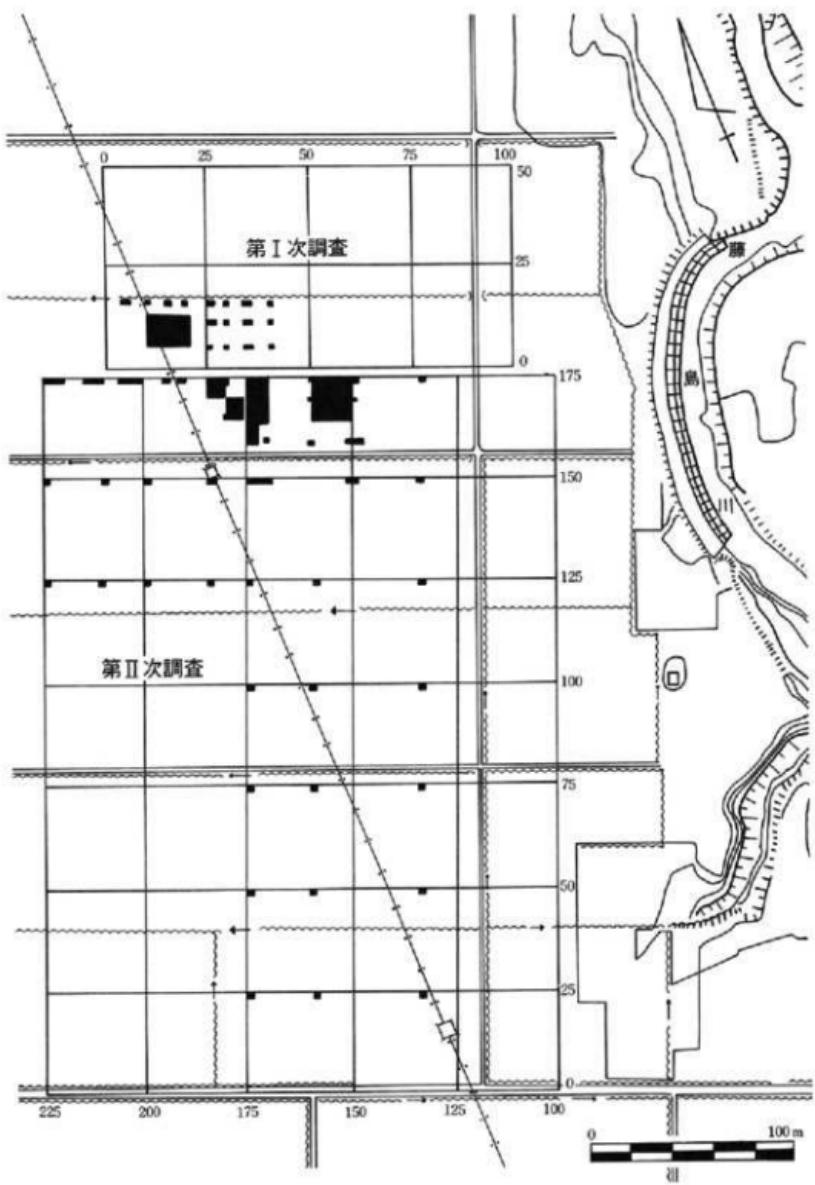
渡前（A）遺跡 遺跡番号1752 藤島町渡前字砂田所在 平安時代集落跡

渡前（B）遺跡 遺跡番号1753 藤島町渡前字東谷地所在 平安時代集落跡

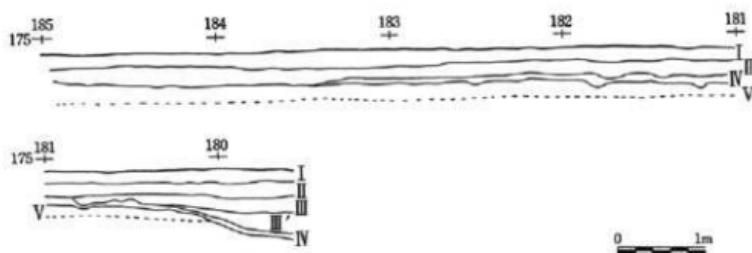
このうち渡前A遺跡については、大部分が畠地として遺跡の保存がはかられることになったため、水田地域として削平される遺跡の西端部の調査だけに止どめ、渡前B遺跡を主体に調査を実施することになった。

発掘調査は、圃場整備事業の年次計画に従って、昭和51年と昭和52年の二回にわたって実施した。第一次調査は、昭和51年7月19日から同22日までの4日間で、渡前B遺跡の北端を調査した。初め重機械を使って表土を削平し、つぎに東西90m×南北40mの地域に $2 \times 2\text{m}$ ないし $2 \times 4\text{m}$ のグリッドを20個設定し、遺跡の範囲確認を行った（第46図）。その結果、発掘区の西南部11～20—7～12区に多量の遺物散布と遺構の一部が検出されたので、この地区を主として精査した。坪掘り区も含めた発掘面積は、約380m²である。

第二次調査は、昭和52年7月18日から8月13日までの実質21日間で、渡前B遺跡の南半部と、渡前A遺跡の西端部を対象に実施した。調査は初め発掘区全体に、 $2 \times 2\text{m}$ ないし $2 \times 4\text{m}$ のグリッドを43個設定し、遺跡の範囲確認を行った。その結果、発掘区の北側、第一次調査精査地区の水路をはさんだ隣接区に遺構の検出が認められたので、この地区を主体に拡張精査を行った（第46図）。坪掘り区も含めた発掘面積は約900m²で、このうち拡張区の面積は約700m²である。



第46図 渡前遺跡全体図



第47図 波前遺跡層序図

2. 遺跡の層序（第47図）

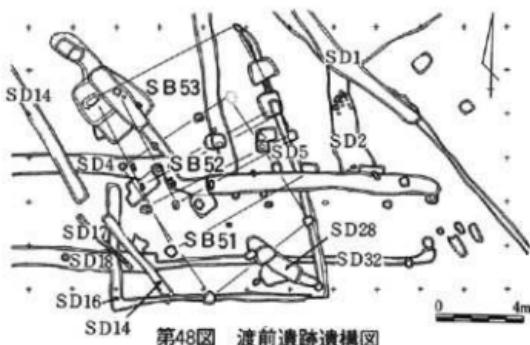
本遺跡は赤川の支流、藤島川の左岸に存在する。藤島川は出羽丘陵から源を発し、庄内平野を蛇行しながら北流する。遺跡は、庄内平野を形成した赤川等、中小河川の沖積地上に存在する。標高13mを測る。遺跡を覆う層序は以下の通りである。

- I 層 耕作土
- II 層 黒褐色砂質土層
- III 層 暗褐色粘質土層 パミスを含み、遺物を包含する。
- III' 層 暗青灰色粘質微砂層
- IV 層 青灰色粘質土層 V層の漸移層と思われる。
- V 層 青灰色粘砂土層

第III層が本遺跡の生活面と考えられ、発見された遺構・遺物はこの層より確認される。

第2節 発見された遺構

1. 第1次調査（第48図）



渡前遺跡の第1次調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構12状、柱穴群などである。このほかにも発掘区に隣接して幾つかの遺構の存在が推定されるが、日程の都合から割愛せざるを得なかった。

4・18・32号溝跡

精査地区の南半11～20—7～9区で検出された溝で、遺構の重複関係から、1次調査の中でもっとも新しい時期に属するものと考えられる。幅30～90cm、長さ約20m、深さ5～10cmを測り、東西方向に長く延びる。方位はグリッドとほぼ同じ方向で磁北を基準とした東西方向からは20度北に傾き、現畦畔とほぼ同じ向きを示す。覆土は青褐色粘質土の単一層で、赤焼き土器や須恵器の破片を少量含む。二つの溝が約3mの間隔をおいて平行に走ることから、近代の道路とも考えられる。

5・16・17号溝跡

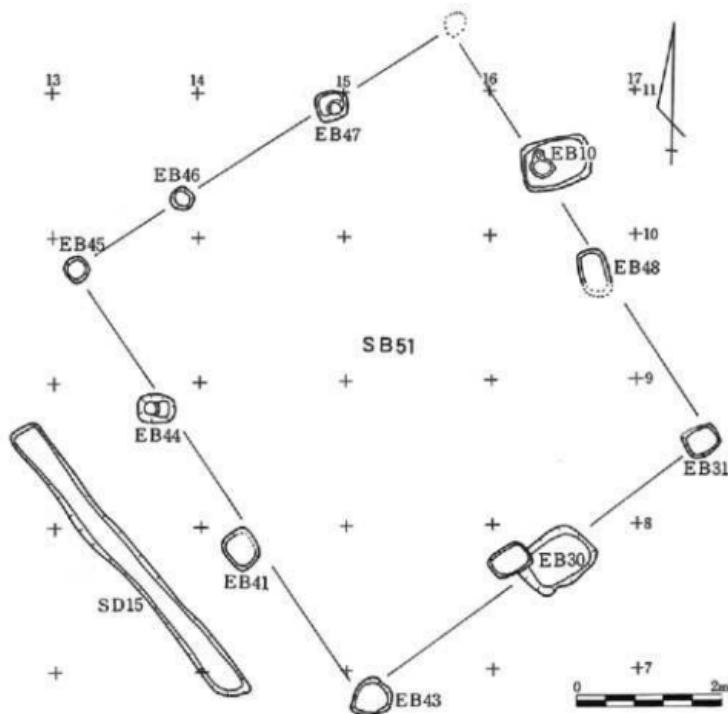
精査地区の中央12～18—6～12区で検出された溝で、4・18・32号溝について新しい時期のものと考えられる。5・16号溝は「コ」字状に連なり、方位はグリッドとほぼ同じ向きである。覆土は青褐色微砂の単一層で、赤焼き土器や須恵器・土師器の破片を少量含む。時期的には、これらの溝も近世以降のものと考えられる。

1・12・14号溝跡

精査地区の北半11～22—8～12区で検出された溝で、1号溝は2号溝を切って作られて

いる。幅60~100cm、深さ30cm前後を測り、方位は磁北に対し10度程西に傾く。覆土は黒褐色微砂の単一層で、炭化粒子や遺物をやや多く含む。

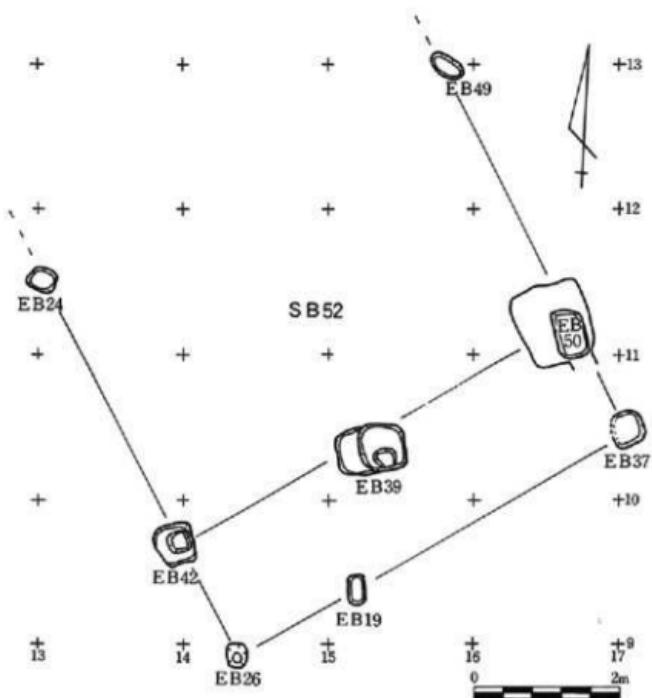
SB 51 (第49図)



第49図 渡前遺跡 SB 51

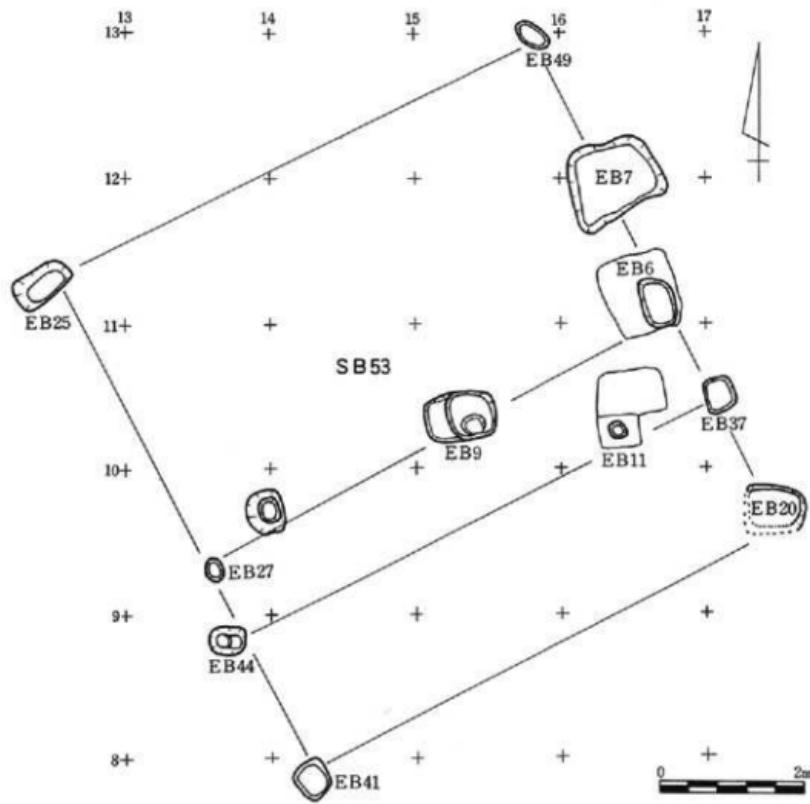
精査地域の中央13~18-6~10区で検出された掘立柱建物跡で、桁行3間、梁行2間の南北に長い建物跡である。柱間の距離は梁行3.0m、桁行が南から各々2.7m・2.1m・2.4mを測る。梁行の北側は中間に柱穴が2本入り、柱間距離は西から各々1.8m・2.4m・1.8mを測る。SD15は1号建物跡に伴なう雨落ち溝的なものと考えられる。

SB 52 (第50図)



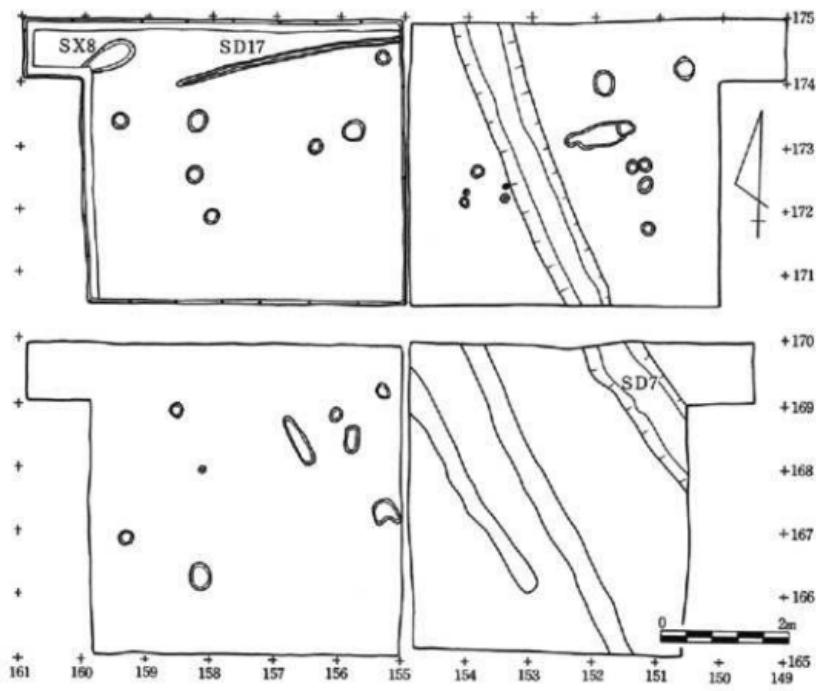
第50図 渡前遺跡 SB 52

精査地域の中央で1号建物跡と重複して検出された掘立柱建物跡で、桁行3間以上、梁行2間の南北に長い建物跡である。EB 6・39・42を結ぶ梁行の南側に3個の柱穴があり、扉ないし入口のような施設と考えられる。柱間距離は、梁行が3.0m、桁行が南から各々1.8m・1.8m・2.1mである。



第51図 渡前遺跡 SB 53

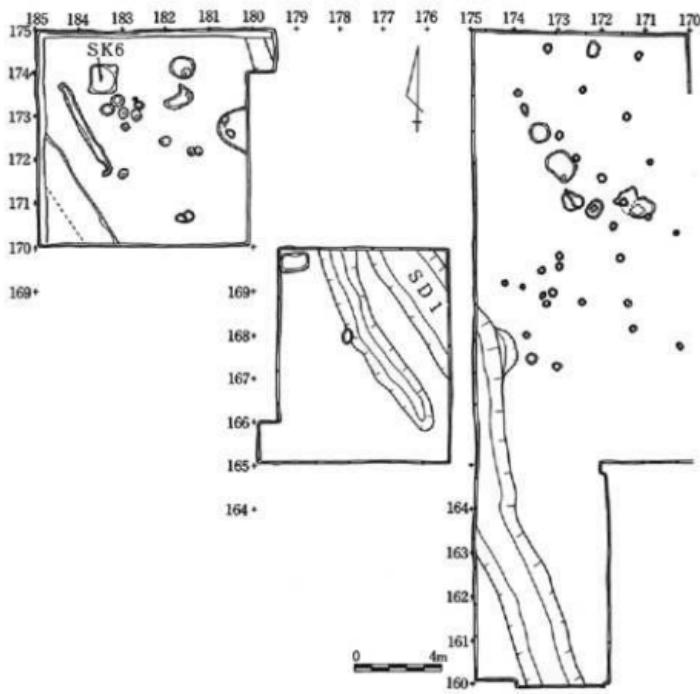
第2次調査（第52図）



第52図 渡前遺跡 SD7, 17, SX8

第2次調査は第1次調査の調査結果のもとに、水路をはさんで隣接した区域を調査区とし、グリッド設定の基準点は新設された南北農道のセンター杭を基準とし、グリッドは第1次調査の北側に設置した（第2図）。

調査当初は2m×2m、2m×10mの坪掘り作業から始まり、遺構・遺物の集中する区域の確認作業を行い、149～160～165～175グリッド付近を大きく広げ精査区とし、今回の圃場整備地区の北端部である。遺跡を覆う土層は以下の通りである（第46図）。



第53図 渡前遺跡 SD1 SK6

- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 黒褐色砂質土層
- 第Ⅲ層 暗褐色粘質土層 (バミスを含む)
- 第Ⅲ'層 暗青灰色粘質微砂層
- 第Ⅳ層 青灰色粘質土層 (第V層の漸移層と思われる)
- 第Ⅴ層 青灰色粘砂土層

発見された遺構はピット・遺跡などで、すべてⅢ'層を切っており、本遺跡の生活面は第Ⅲ層である。遺構の溝跡は幅2~2.5m、深さⅢ層上面より1.2~1.5mを測り、南北に延びた水路跡と思われる。遺物は第Ⅲ層中より土師器・赤焼き土器片などが検出され、溝跡内からも土師器・須恵器・赤焼き土器などの土器類や箸などの木製品が発見されている。

第3節 発見された遺物

渡前遺跡から出土した遺物は土器片のみである。それらは約750片を数えるが、細片が多く器形の判明できるものは少ない。図化できるものは第54図に実測図として示した。土器片中、いわゆる赤焼土器がもっとも多く約90%を占め、残りは須恵器と土師器であるが土師器は少量である。

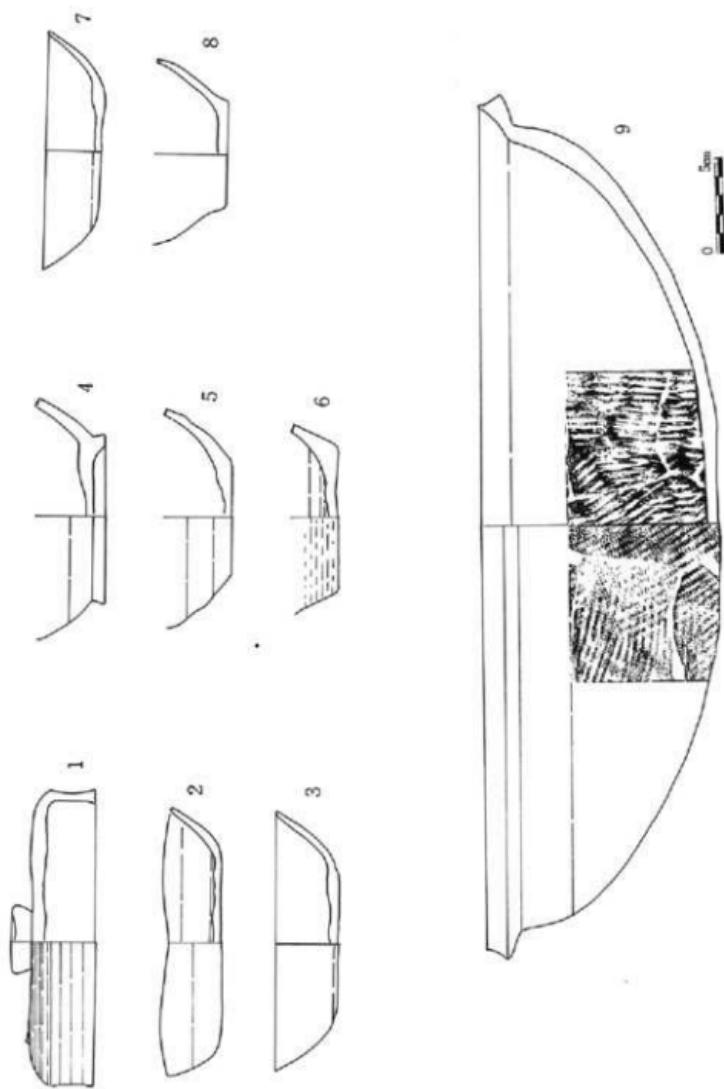
土師器は内部を黒色処理した环や高台环の類で僅少である。須恵器は环、高台环、壺、甕などの破片で、甕などの大形のものには表面に叩目、裏面にも横位の叩目や青海波文の押圧痕がある。环は底部の切り離しが、へら切りによるものと糸切りによるものとがあるが、前者が多い。底が広く背の低い环がもっとも多いものと思われる。第54図1は壺などの蓋であろうが、偏平な小円板状のつまみが付き、上面は回転へらけずりされ、身を受けける部分が上面に対して直角に折れ曲り比較的深い。内面に自然釉が認められ、胎土も精選されたらしく細かい。4は高台环の底部破片であるが、切り離しはへら切りであり、付高台がとりつけられている。高台环では底部切り離しが糸切りによるものもあり、また环より小形で深い椀形のものもある。

本遺跡の土器中もっとも多い赤焼土器は、环、高台环、壺などの器種がもっとも多く、他に甕、壺、鉢、鍋の類がある。大形の器種のものには須恵器にみられるると全く同様の押圧痕が表裏ともみられ、整形の段階まで同じ技法で作られ、焼成のみ酸化焰によるものが多い。やや長胴を呈する甕で口縁部が複合口縁に似た屈曲をみせ、内面に木製のとぢ蓋を置くのに適する赤焼土器に特徴的な器形をなすものが多く見受けられる。赤焼土器はこのような甕、鍋、鉢と环類がセット関係にあったと考えられるのである。

环は赤焼土器の中でもっとも多い器種で、口径12cmより13.5cm、高さ4cmより5cmまでのものが大部分で、底部切り離しはすべて糸切りによっている。高台が付けられたものも若干あり、稀に底部に近い体部下半を回転へらけずり調整を行っているものが見られる。第54図9は鍋で、黄褐色を呈し火熱による黒斑や煤が認められる。口径45cm、高さ11cmほどで、底部はなだらかな寄曲をえがく丸底である。赤焼土器に特徴的な器形である。

本遺跡では赤焼土器が日常什器の主流をなしていたのであり、須恵器の供給が充分でなかったことを示すようである。時期的には、須恵器の环がへら切りによるものが多いことを考慮して9世紀後半より10世紀前半、10世紀を前後とする年代の農民の集落であったことを思わせる。

第54図 出土土器



中京田遺跡

IV章 中京田遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査の経過（第55図）

本遺跡は鶴岡市の北西2km、鶴岡市中京田にあり、仏像が出土したことから注目されていた遺跡で、遺跡を含む広い地域で昭和53年度に圃場整備が施行されることになり、緊急発掘調査が実施された。調査は前年度の遺跡の確認調査結果にもとづき、中京田部落の北西200mの地域を対象として実施することとし、昭和53年7月31日から9月31日まで延20日間の発掘調査を行った。

調査当初はブルドーザーによる表土除去を行い、調査区の杭打ちを行った（第55図）。試掘調査では調査区北半部が遺構確認面まで深くなり、圃場整備を実施しても遺跡の破壊のおそれがないため調査区から除外した。破壊される区域は排水路より南部の部分で30m×80mの区域を面整理し、遺構・遺物の集中部分を2,400m²の中で求めた。この作業が8月11日まで行われ、その期間は面精査と共に遺構略図作成を行った。この期間中には三間×四間の縦柱建物跡及び四間×二間の東西棟に南北両廂となる掘立柱建物跡が発見され、調査の前半部では土壙、二棟の建物跡が発見された。

調査の後半は8月21日から開始した。この期間の初めには台風の通過により大雨が降り、排水作業と、雨で洗われた遺構の再確認に手間どり、調査は進まなかったが、SP80とした土壙が井戸跡として確認され精査を進め、一方では各土壙の精査も行った。また調査の後半に入ったため平面図測図作業も同時に進め、調査を完了した。調査面積2,400m²のうち精査面積は500m²である。

2. 遺跡の層序

調査当初の遺構・遺物の確認のための坪掘り作業で、遺跡の層序は以下の通り決定した。

第Ⅰ層 耕作土層

第Ⅱ層 黒褐色砂質土層

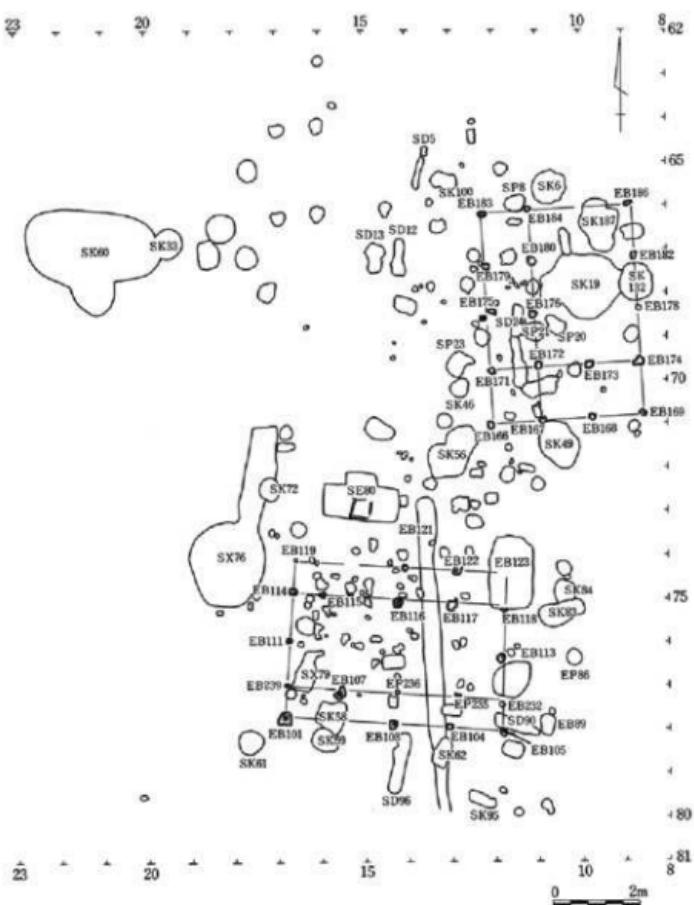
第Ⅲ層 暗褐色粘質土層（バミスを含み、遺物を包含する）

第Ⅳ層 青灰色砂質土層

発見された遺構は第Ⅲ層を切って作られており、Ⅲ層が生活面として把握される。



第55図 中京田遺跡全体図

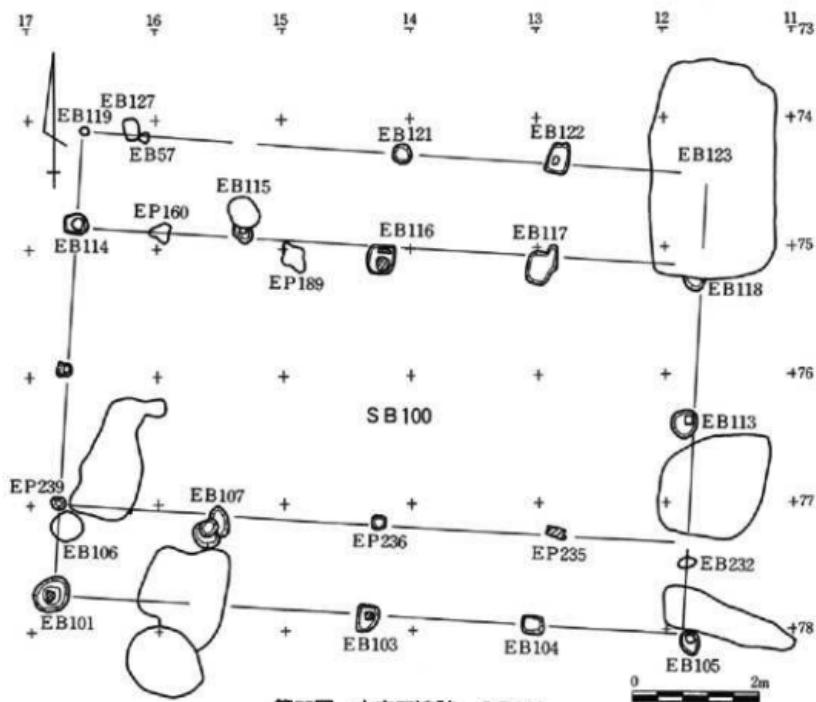


第56図 中京田遺跡遺構図

第2節 発見された遺構（第56図）

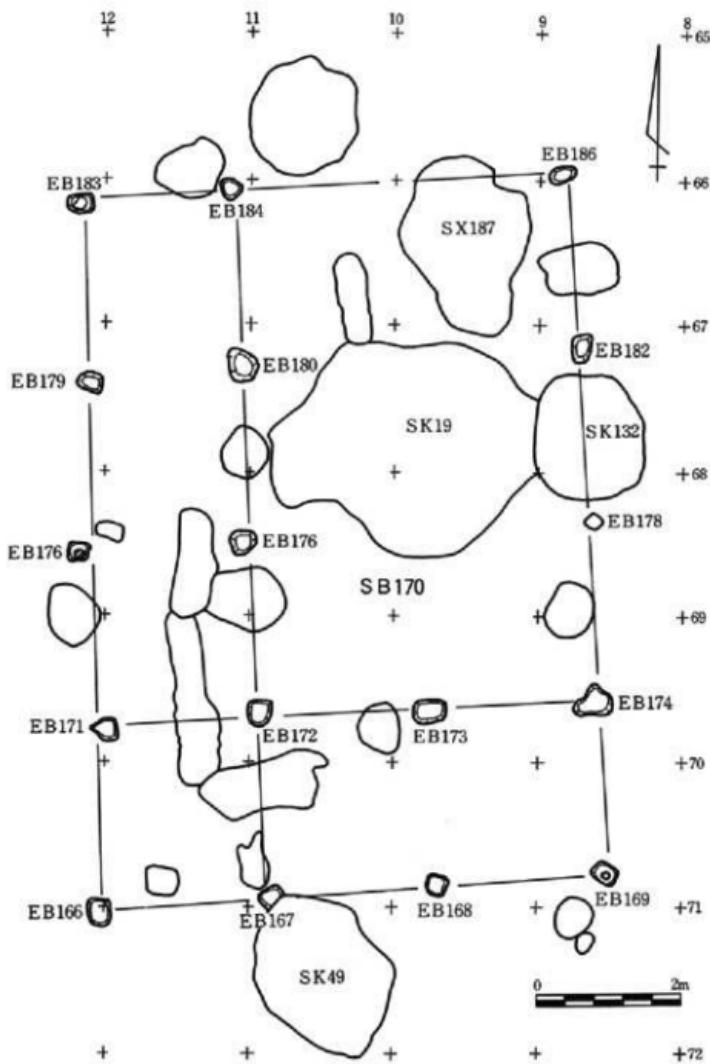
本遺跡で発見された遺構は500以上である。確認された遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基である。

SB 100 (第57図)



第57図 中京田遺跡 SB 100

精査区南部で確認された掘立柱建物跡である。桁行四間、梁行二間の東西棟で、南北両面に扉をもち、柱間距離は桁行で2.5m、梁行2.4mを測る。扉部は南面で1.2m、北面で1.5mである。柱の掘り方は径30cmの円形ないし隅丸方形を呈し、一辺10~15cmの角柱が残存しているものや朽ちてしまった柱も多いが、その状態を観察すると規則的な配置をしている。また柱が残っていない柱穴の掘り方内を観察しても、底面を一段低くし柱を固定した跡も確認できた。



第58図 中京田遺跡 SB 170

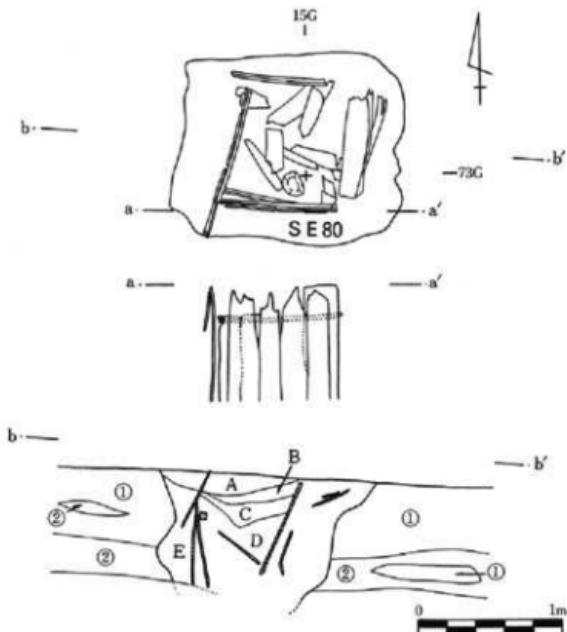
掘り方内からは赤焼き土器片を出土している。時期は出土遺物により平安時代末と思われる。

S B 170 (第58図)

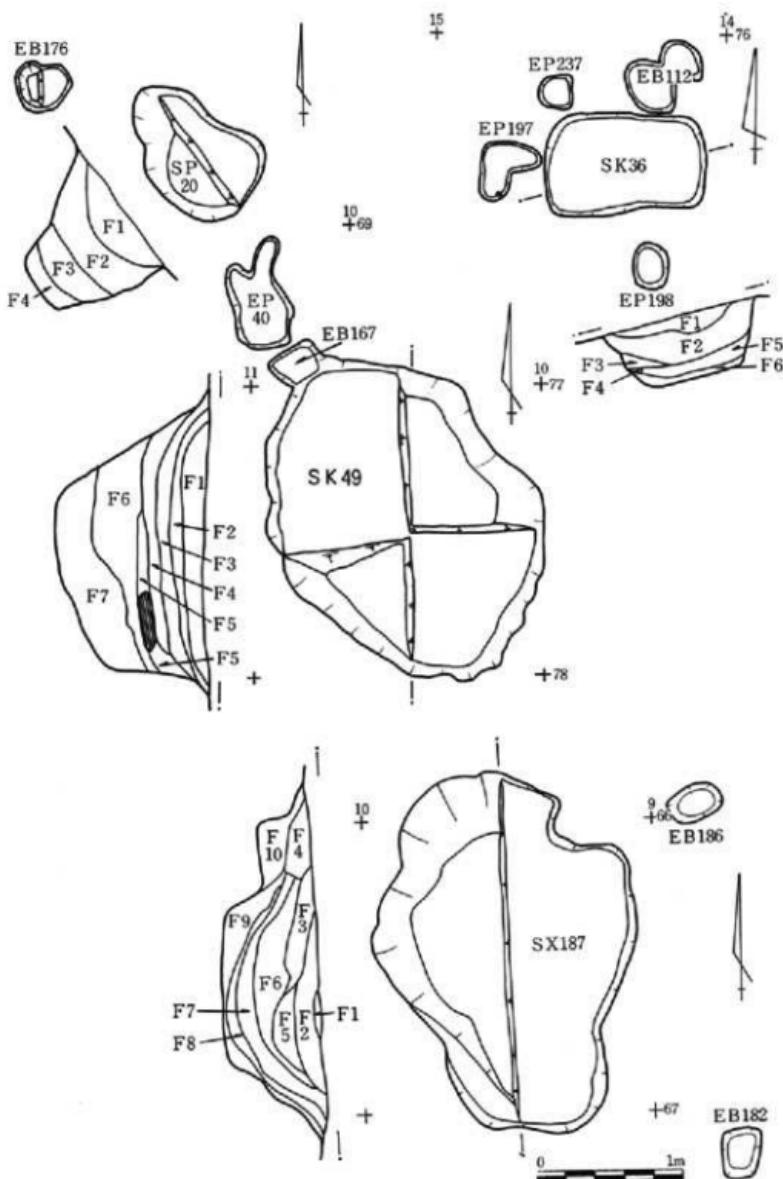
精査区北東部で確認された総柱の掘立柱倉庫跡である。四間、三間(以上)の建物跡で、南北方向の柱間距離は2.4m、東西方向は2.3mを測る。

柱の掘り方は径約30~40cmで、S B 100と同様に直線的な規則性のある柱の配置をしている。柱の掘り方内からは須恵器杯が出土しており、時期はこれにより平安時代末期の建物と考えられる。

S E 80 (第59図)



第59図 S E 80



第60図 中京田遺跡土壤図 (SP 20. SK 36. SK 49. SX 187)

一辺約90cmの井戸枠をもつもので、井戸の掘り方は1.5m×1.2mの楕円形を呈しており、井戸枠は幅約15cmの薄い板を縦方向にならべ、内側に幅6cm、長さ70cm～90cmの横木を組んでいる。南面と西面の板はよく残存していたが、他の面は土圧によりこわされていた。井戸内からは珠洲系の中世陶器・箸・木梳が出土している。

調査では確認された面より1m程掘り下げたが湧水が激しく、井戸底面の確認が出来ず、また、このままの状態で埋めもどすことは調査完了後の圃場整備で欠陥田となるおそれがあり、調査途中ではあったが水がなくなり次第砂を内部に入れ、埋めもどしを行った。

本井戸跡はその作り方や内部からの出土遺物により、鎌倉から室町時代の遺構と考えられる。

第3節 出土遺物

中京田遺跡より出土した遺物は、土器・陶磁器類、砥石類、古銭類、木器類、桃の種子などの自然遺物がある。砥石は稻刈りなどの際、鎌をといだ近代のものであり、自然遺物も僅少なので土器・陶磁器類と木器類を中心にして述べよう。

(1) 土器・陶磁器類 (第61図・第62図)

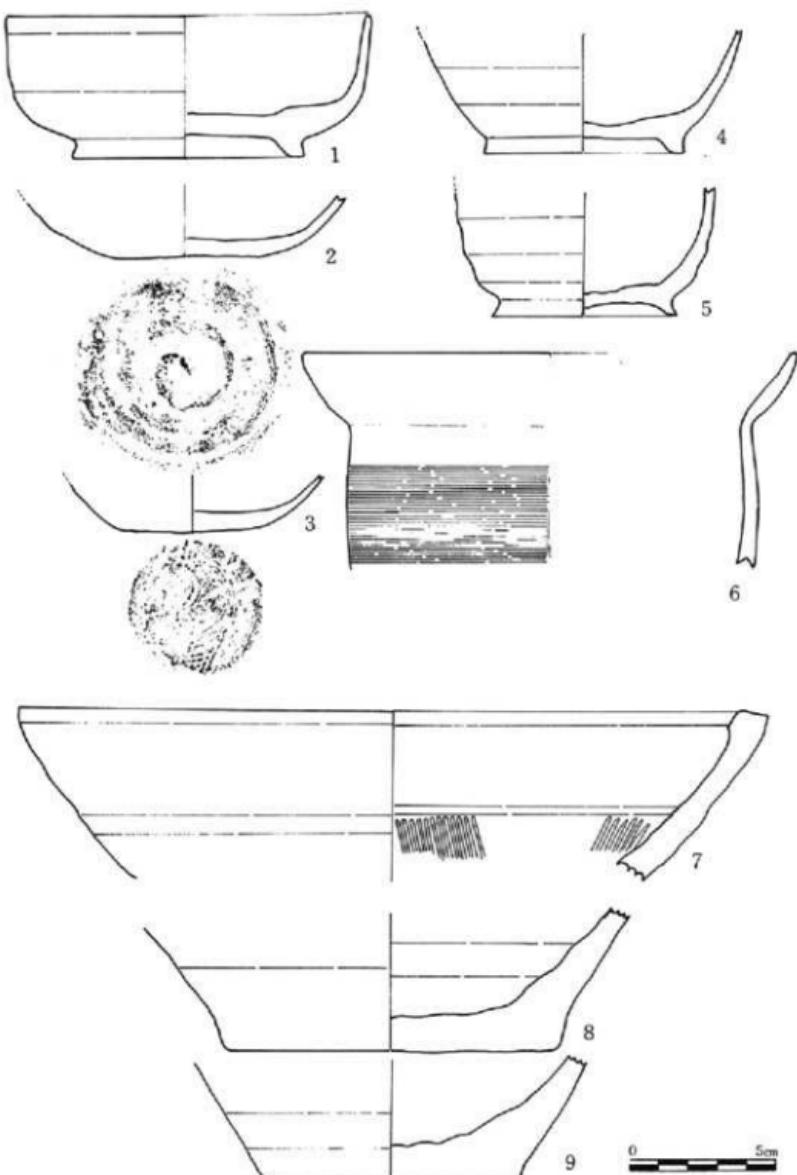
この中には須恵器、土師器を含む赤焼土器、珠洲焼系の中世陶器、越前焼系統の陶器、古瀬戸、古唐津焼、中国産青白磁、近代の磁器類がある。すべて小破片であり、器形を知ることができるものはほとんどない。遺構内出土のものに中世陶器が多く、古代の集落跡の上に中世の集落跡が営まれたと推定される。破片総数は合計695片で、内訳は須恵器185片、赤焼土器315片、珠洲焼系陶器135片である。赤焼土器がもっとも多いが、いずれも脆く壊れやすく、細片が多い関係からで、個体数の実数はそれほど多くなかったのではないかと思われる。

須恵器 全体の27%を占める。甕、壺、环、高环、塊などがあったものと思われる。中には提瓶の破片もある(第62図4)。环や高台环がもっとも多い。

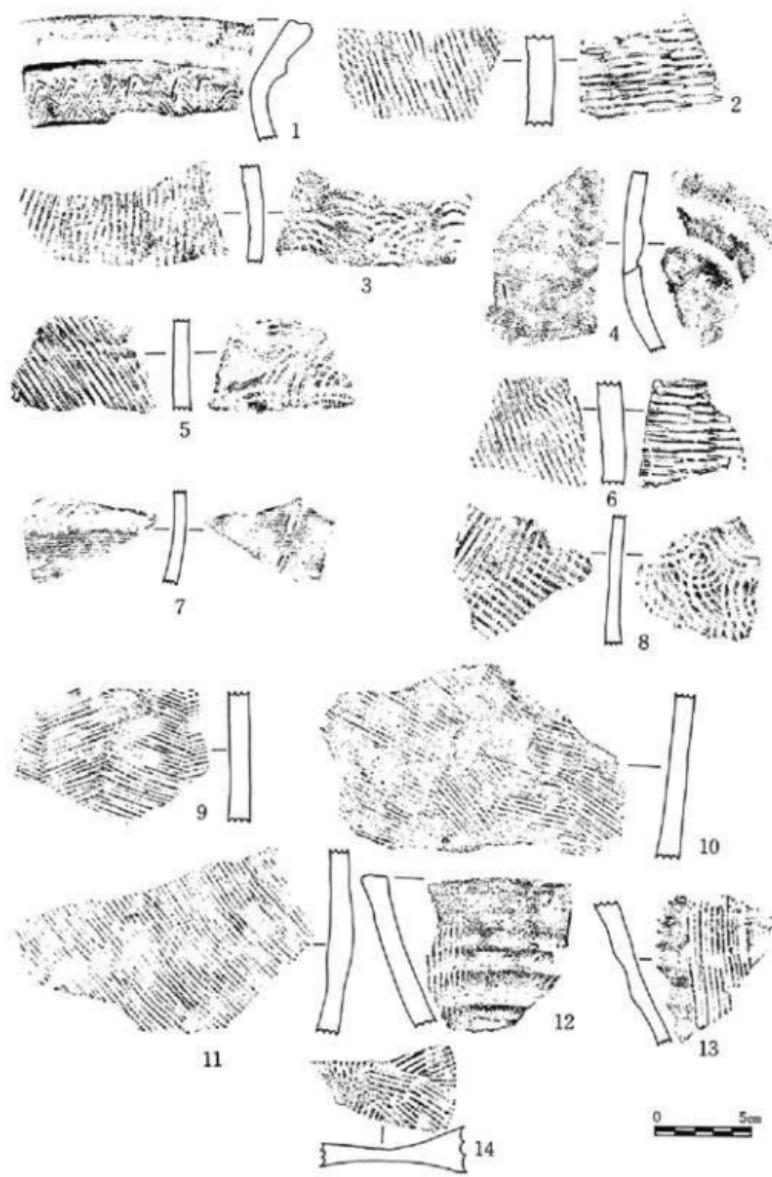
环の底部切りはなしは範切りが多く、糸切りのものは僅かである。平安時代も比較的古い9世紀代の須恵器であると思われる。(第61図1～5、第62図1～8)

赤焼土器 須恵器に伴う土師器系の杯や鉢、中世陶器に伴う證明皿などに使われた「かわらけ」なども含むと思われるが、小破片が多いので分類は不可能である。酸化炎焼成のものを一括したが、小形の容器が多かったようである。(第61図6)

珠洲焼系陶器 甕と懐鉢がある。概して大形の器形である。甕には表面に平行、又は右傾斜の細かい条線状印目が走り、内面は丸い当て痕で調整されている。懐鉢は内面に、10条前後を組みにした櫛目が放射状につけられる。遺構内出土のものに、この種のも



第61図 須恵器・赤焼土器・珠洲焼系陶器



第62図 中世陶器拓影

のが多く、13世紀頃の古いものが多いようである。

その他 越前焼系統の茶褐色を呈する陶器片20片、古瀬戸陶片2片、古唐津陶片4片、中国の青白磁類10片、明治以降の印判ものの磁器24片を数えるが、いずれも小破片のみである。古瀬戸片は黄緑色の釉をかけた肩部の破片で、三条の櫛目が口縁に平行に走る。青磁類は小破片であるが、蓮弁文皿の一部があり、13世紀から14世紀にかけてのものと思われる。古唐津焼は縮緬高台をもち、灰緑色の釉がかけられる。近世初頭のものと思われる。

(2) 古錢類

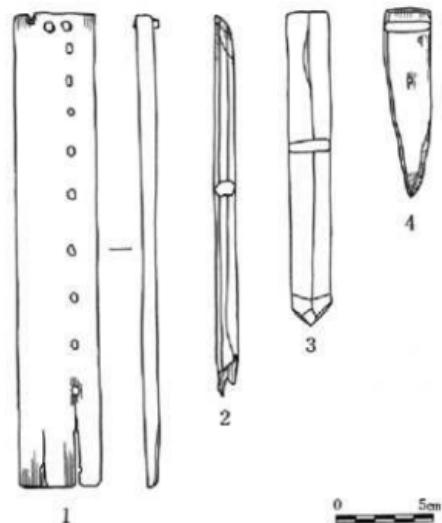
「元豊通宝」2枚、「元祐通宝」1枚の計3枚が出土している。「元豊通宝」は草書体で、宋神宗の元豊元年、元祐通宝は宋哲宗の元祐年間に鋳造され、わが国へは鎌倉時代にもたらされたものである。

(3) 木器類 (第64図、図版42)

主にSE80・SK76・S×6・S×60より出土している。

SE80出土木製品

木柾 (第64図6) 内外面とも黒漆塗、ロクロ仕上げである。内面底部にわずかに朱漆による棟様痕がみとめられる。



第63図 木器類 (1)

曲物底 (第64図2・4) 二分の一が欠損している。3箇所に人為的にあけられた孔がある。

ヘラ状木製品 (第64図5)

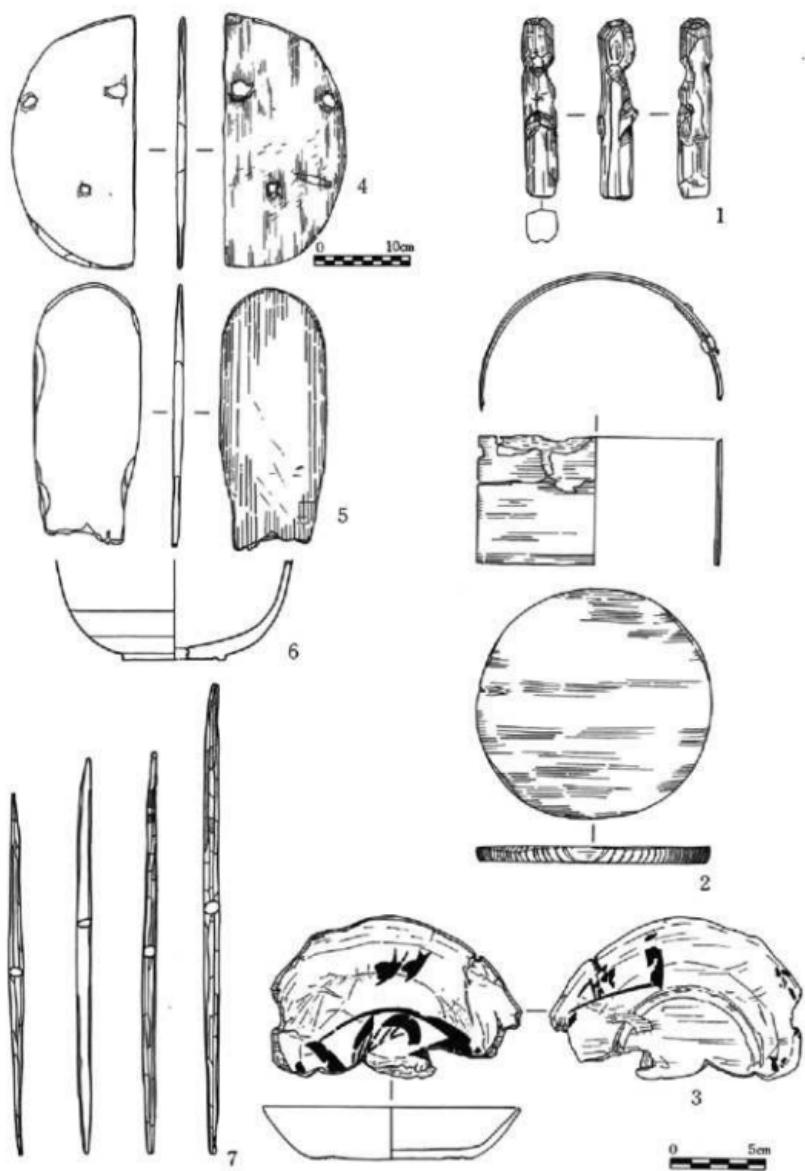
柄部は欠損している。ヘラ部の周囲は両面から均等に丸みを帯びるように削り出されている。両面とも地肌面を削り加工している。

箸 (第64図1) 細い棒状で、周囲部を面取りし、先端部を尖がらせるような削りのあるもので断面が橢円または4~8角形を呈するものを箸とした。完形品24、破損品22を数える。

SK76出土木製品

人型木製品 (第64図1)

長さ9.5cm、最大径1.5cm。棒状の



第64図 木器類 (2)

材料に刀子などで加工されており、目鼻がついている。中世陶器と併出した。完形品。

木挽（第64図3） 内外面とも黒漆を下地とし、両面に朱漆で模様が描かれている。口クロ仕上げである。約二分の一が欠損。

S×6出土木製品

曲物（第64図2） 周囲部二分の一が欠損、底部は完形。

S×60出土木製品

織機部品（第63図）

その他、黒漆木挽片（S×187）、曲物底二分の一欠損（S×19）、織機部品（SK 83）、性格不明棒状木製品、板材などが出土している。自然遺物として、自然木端板・くるみの実が検出された。

ATONK SE80出土 算計測表

No	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	完形
1	24.5	0.9	0.7	♦
2	22.7	0.7	0.5	♦
3	22.1	0.8	0.5	♦
4	21.2	0.9	0.7	♦
5	21.2	0.8	0.5	♦
6	21.1	0.7	0.5	♦
7	20.9	0.7	0.5	♦
8	20.9	0.7	0.4	♦
9	20.7	0.8	0.3	♦
10	20.5	0.6	0.6	♦
11	20.4	1.0	0.6	♦
12	20.3	0.8	0.7	♦
13	20.3	0.8	0.5	♦
14	20.3	0.8	0.7	♦
15	20.2	0.7	0.4	♦
16	20.1	0.7	0.6	♦
17	20.0	0.6	0.7	♦
18	19.9	0.7	0.4	♦
19	19.2	0.7	0.4	♦
20	18.9	0.8	0.5	♦
21	18.7	0.5	0.5	♦
22	18.6	0.5	0.5	♦
23	18.3	0.7	0.5	♦
24	18.1	0.6	0.6	♦

ATONK SE80

No	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	破損
1	20.0	0.5	0.55	♦
2	17.5	0.7	0.5	♦
3	16.2	0.82	0.6	♦
4	16.2	0.75	0.55	♦
5	16.0	0.6	0.5	♦
6	15.7	0.6	0.5	♦
7	15.4	0.65	0.55	♦
8	15.3	0.75	0.35	♦
9	15.1	0.62	0.57	♦
10	14.3	0.7	0.48	♦
11	14.3	0.65	0.5	♦
12	13.9	0.6	0.4	♦
13	13.4	0.6	0.55	♦
14	12.9	0.6	0.45	♦
15	10.9	0.8	0.5	♦
16	10.7	0.75	0.4	♦
17	10.1	0.7	0.3	♦
18	8.9	0.6	0.44	♦
19	8.8	0.55	0.52	♦
20	6.1	0.65	0.45	♦
21	5.9	0.7	0.45	♦
22	5.8	0.7	0.5	♦

V章 総 論

昭和45年より発掘調査が行われた平形遺跡も、昭和53年で一応の調査を終了した。第Ⅰ・Ⅱ次調査は平形部落周辺の地域を短期間に遺跡の確認を行い、径約50cm位の柱痕や土師器・須恵器等を発見し、昭和6・7年に城輪の出羽柵などと関連した古代官衙跡として注目された。またⅢ・Ⅳ次調査では、平形部落東方に存在する平形館跡の土壘周辺の畠地を調査し、鎌倉期の平形氏の館跡としての規模確認調査であった。Ⅰ次からⅣ次までは昭和初期に注目された出羽国建置当初の国府、国分寺などに擬する説も有力ではあるが、決定出来る遺構・遺物が検出されていないことからV次からⅦ次にかけては、それらの説の確認調査として再度の検討調査が主目的であった。

Ⅳ次調査までは小規模な地点を調査するだけの方法であったため、V次以降からの調査では発掘方法の検討結果から、最初は遺跡の範囲を確認し、それを覆う形で第2図のような調査区の設置を行い、V次調査では平形館跡を中心とした中世区割りの確認が出来た。区割りは一辺が104m強の大溝にかこまれた土地区割りで、それらは現存する平形館跡の土壘の主軸に合せ、一町四方の範囲となることが4カ所で判明した。溝跡内からは当時の生活用具の発見もあり、中世の館跡を中心とした当時の集落の一端を明らかにすることが出来た。

V・Ⅶ次では古代地方莊園を思わせるような建物配置が認められ、跨り地区での七間×三間の建物に三間×二間の建物、二間四方の倉庫跡および、井戸跡が一つのセットとして例を示しているものと考えられる。古代地方莊園の庄屋の一例としては決め手にとぼしいが、二棟共に桁行の柱間距離を1.8mとし、梁行を2.1mと2.4mにしており、雨落ち溝を建物周囲に有し、主軸方向を同一とした南面に出入口をもつ建物群となる。それに付随する二間四方の倉庫跡、やや南方に井戸をもち、井戸の周囲に土器溜めの土壙をもち、土壙内からは80個体以上の半完形や完形の土師器・須恵器・赤焼き土器が検出され、一部の土器の体部には墨書銘をもつ土器が発見されたことなどを考え合せると、五間×三間の建物を主とする三間×二間の建物、倉庫、井戸、土壙、西側に立てられたSA（掘立柱列）が建物群を構成する一セットとしてあげられる。平安時代初頭から中頃にかけての古代莊園の庄屋の建物跡か、地方豪族の住居として考えられる。

第Ⅶ次の笠地区でも同様な配置を示す建物群が検出されたことにより、庄屋的建物とするよりも古代掘立柱建物跡を主とする集落としての可能性が大であろう。また、この時期に文字や絵を描ける官人などの存在を思わせるが、古代の村落の調査例がきわめて少なく

平形遺跡はその一例であり、その内容等は今後の検討をまたねばならない。

平形遺跡群と、その周辺の渡前、中京田より出土した遺物は、土器、陶器、磁器、木器、金属製品、石製品などである。それらは整理箱で100箱を越す多量である。

G地点の平形館地区と中京田遺跡は、中世の遺物を主として出土している。他の遺跡は平安時代の須恵器と赤焼土器を主体とし、総じて赤焼土器の出土量がもっとも多い。須恵器の环などには糸切りによる切り離しのものが多いところをみると、10世紀から11世紀にかけての土器が多いということになる。なかに窓切りによる須恵器や土師器も若干みられるので、この平形遺跡群と渡前遺跡など古代の遺跡群は9世紀中葉以降より形成され始めたのであろう。

この地区について、出羽国建置当初の国府、国分寺などに擬する説が有力であるが、奈良時代まで遡る遺物の出土が全くなく、平安時代中期以降の遺物のみである。跨り地区を中心に墨書き器が数多く出土しており、中には「わらび」文様を描いた珍らしいものも発見されていて官衛風の遺跡の存在を思わせるが、明確なきめ手に欠くものの、地方荘園の庄屋などの存在は充分に想定され、今後の検討課題であろう。

平形館地区と中京田遺跡からは、中世の遺物が主として出土している。特に珠洲焼系の陶器が主体で、これに越前焼系の陶器が混り、古瀬戸や中国産青磁片なども発見されており、中世の集落の土器、陶磁器の構成を把握することができた。中世にも赤焼土器系の酸化炎焼成によるものが「かわらけ」などにかなり多く用いられていることもわかった。

平形館地区的珠洲焼系陶器は古いものも若干混じるが、おおむね珠洲焼西方寺窯に対応するものであり、14世紀から15世紀、室町期を中心とするものである。54年度に調査された藤島町勝樂寺遺跡は、珠洲の法住寺3号窯出土のものに類似し、平形館地区的陶器とは異った様相を呈する。また中京田遺跡の珠洲焼系陶器は、破片のみで不明な点が多いが、平形館地区的ものより一段階古い時期のものと思われる。これらの珠洲焼系陶器が、能登半島の珠洲より日本海海運によってもたらされた珠洲焼そのものであるか、それとも庄内地域に珠洲焼の流れをひく中世窯が存在し、その製品であるかどうかは今後の課題である。庄内地域では、中世窯は未発見である。

木器は平形遺跡群より木椀、窓、曲物、箸、亀甲文様の漆器片、漆塗りの用具等の他、井戸わく、柱根等が出土している。中京田遺跡からは木椀、箸、曲物片の他、合掌しているような仏像風の素朴な木偶が発見されている。中世に入るや、これまでの須恵器や赤焼土器による杯が消滅するが、これに代って本地ものや漆器が多く普及し食器として用いられたと考えられる。数多い木器類も、当時の生活の様子をさぐる好個の資料である。

金属製品は銅鏡片、宋銭類、刀装具残片、鉄鋤などの他、平形館地区より多量の鉄釘が

出土している。鍛冶場の跡と思われる。石製品の主なものは砥石である。

古代末より中世にかけての多彩にわたるこれらの出土遺物は、当時の生活や信仰や生産の状況をさぐる貴重な遺物であり、今後とも検討を加えていく必要がある。

図版



平形遺跡F地点 近景



F地点 近景



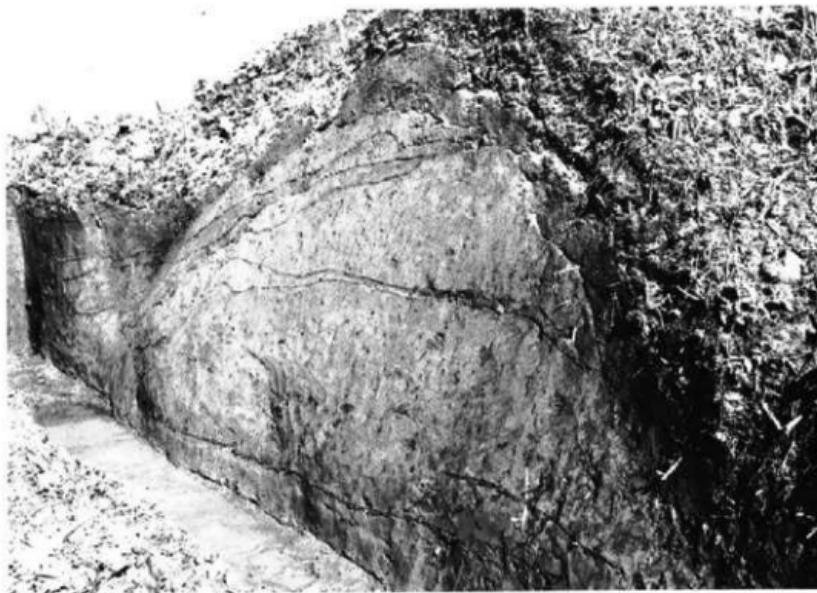
F地点 曲物出土状况



F地点 土器出土状况



F地点 紡錘車出土状況



G地点 平形館跡土壙断面



G地点 陶器出土状況



G地点 陶器出土状況



G地点 銅鏡出土状況



D地点 線刻土器出土状況

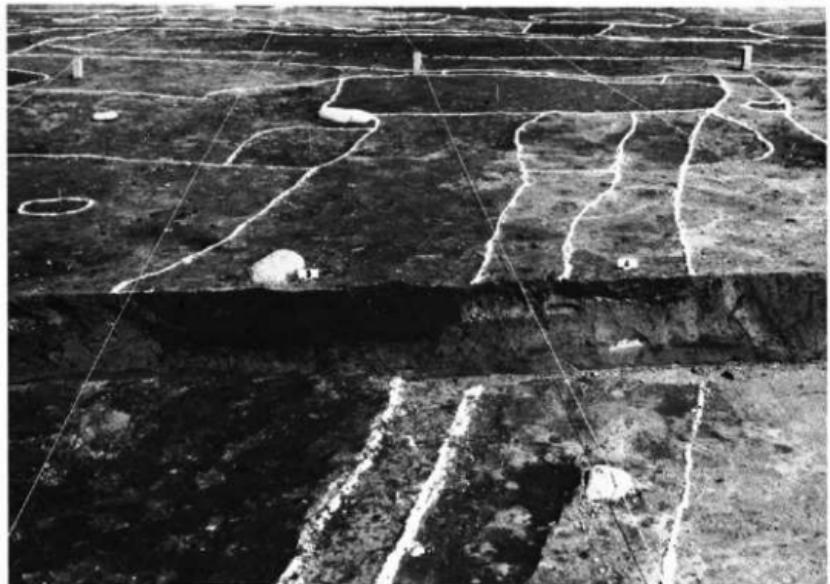


G地点 南部精査区全景

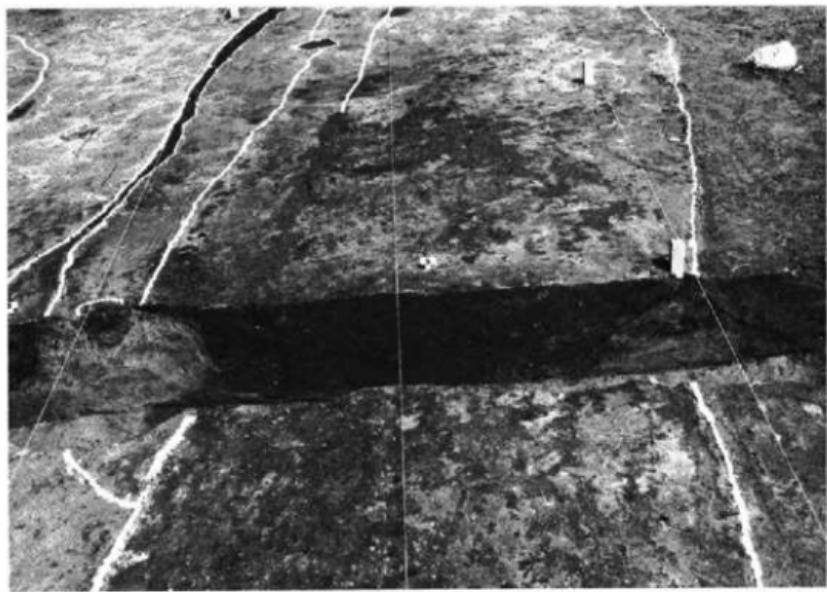


G地点 SD1・SD2断面

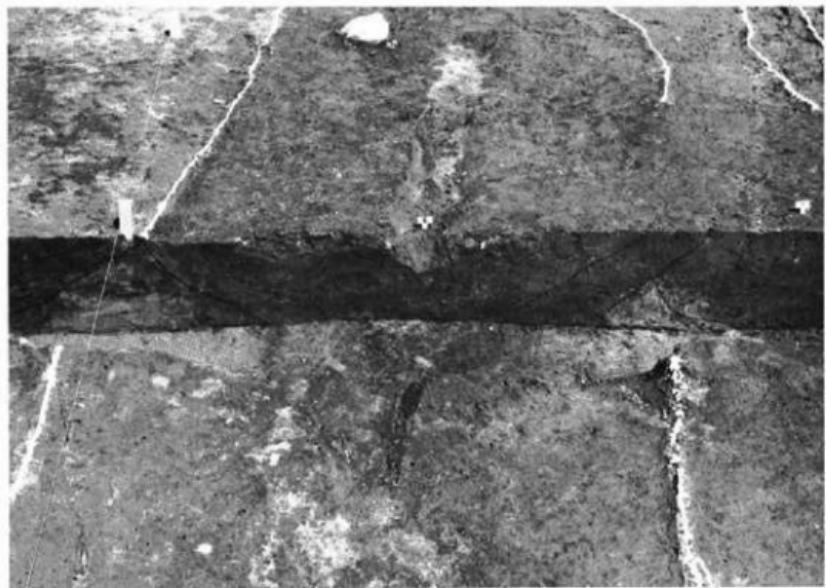
図版 7



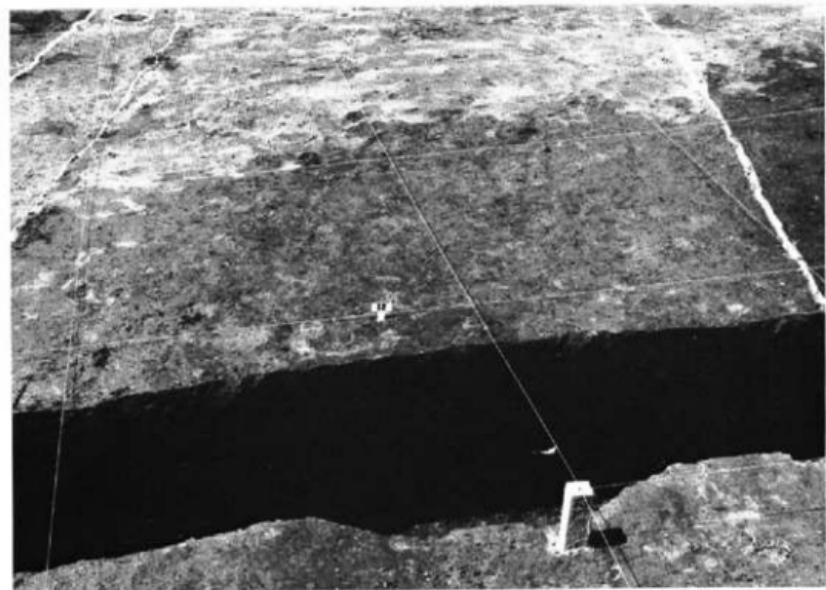
G地点 SD3・SD4断面



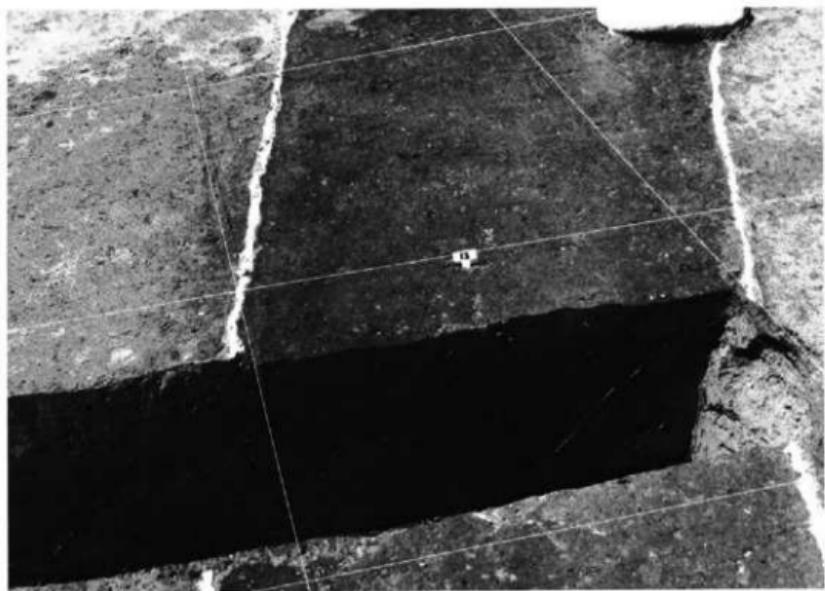
G地点 SD5断面



G地点 SD6・SD7断面



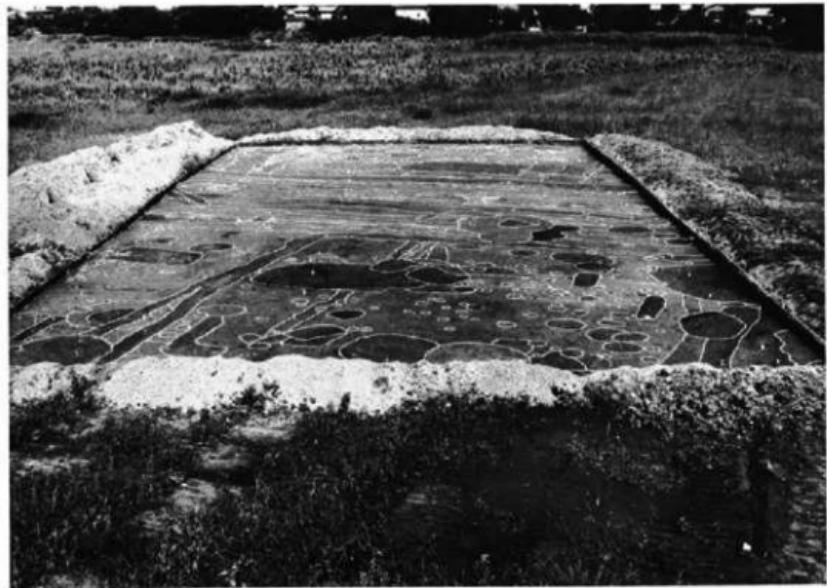
G地点 SD12断面



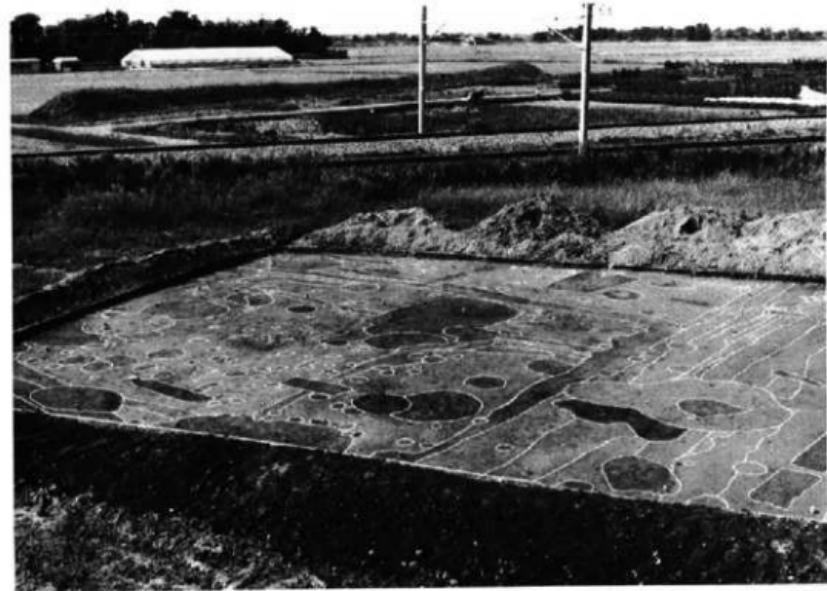
G地点 SD13断面



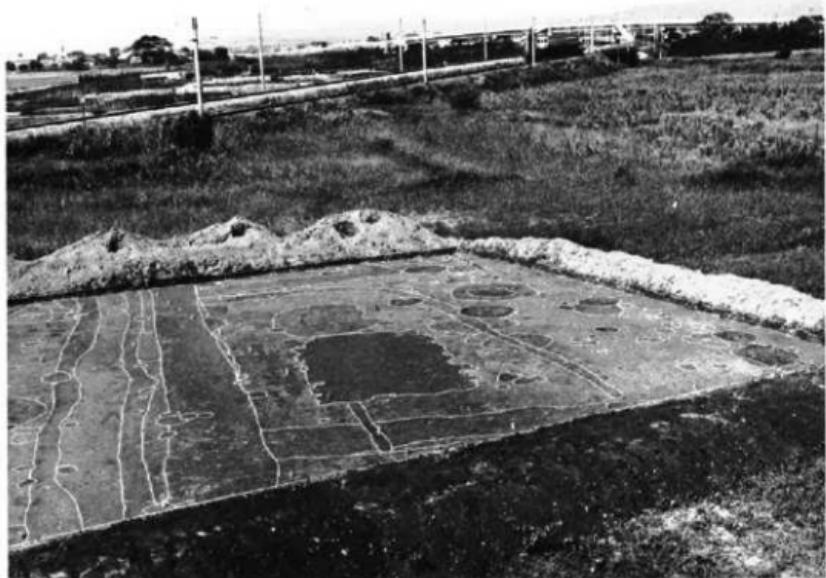
G地点 SG15



G地点 北部精查区全景



G地点 北部精查区西侧全景



G地点 北部精査区東側全景



D地点(笠地区) 発掘区



D地点(跨り地区) 発掘風景



D地点(跨り地区) 近景(北→)



D地点 SB55・SB376近景



D地点 SD123他



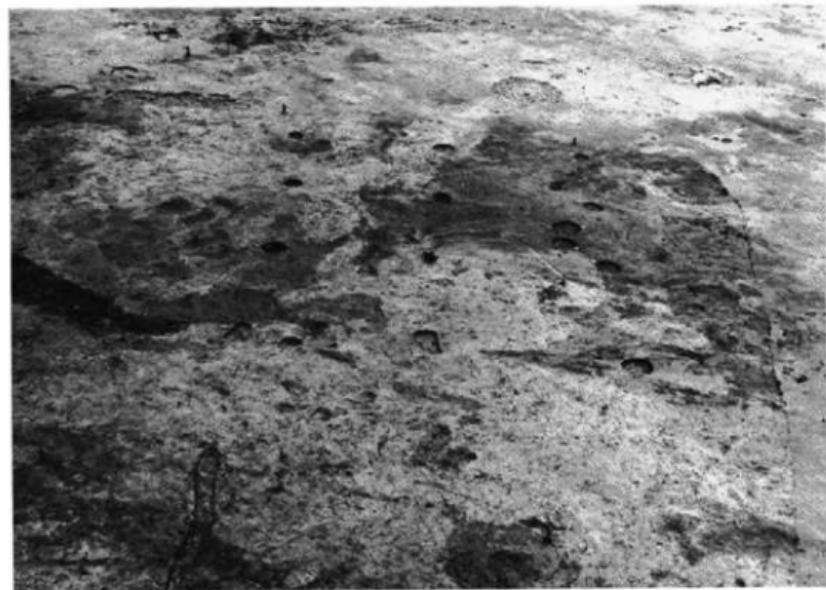
D地点 SA501・SA503



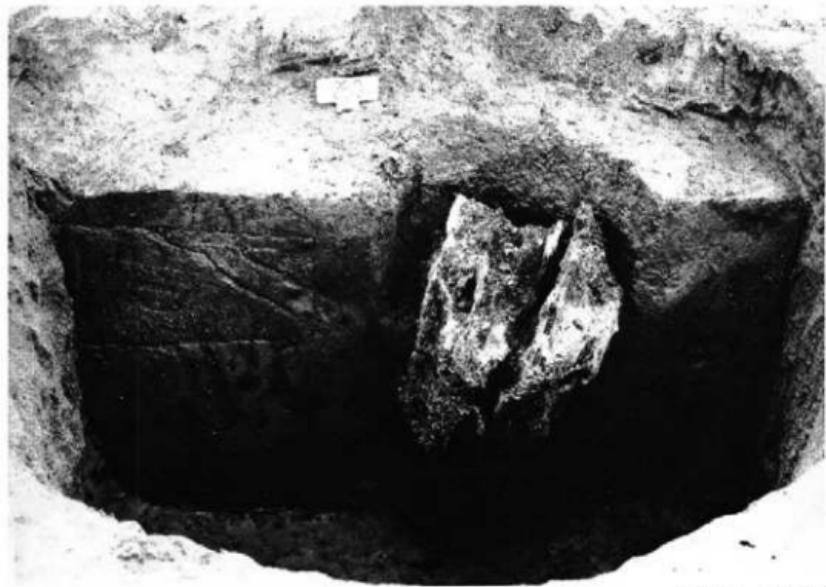
D地点 SB55



D地点 SB376



D地点 SB150



D地点 EB260



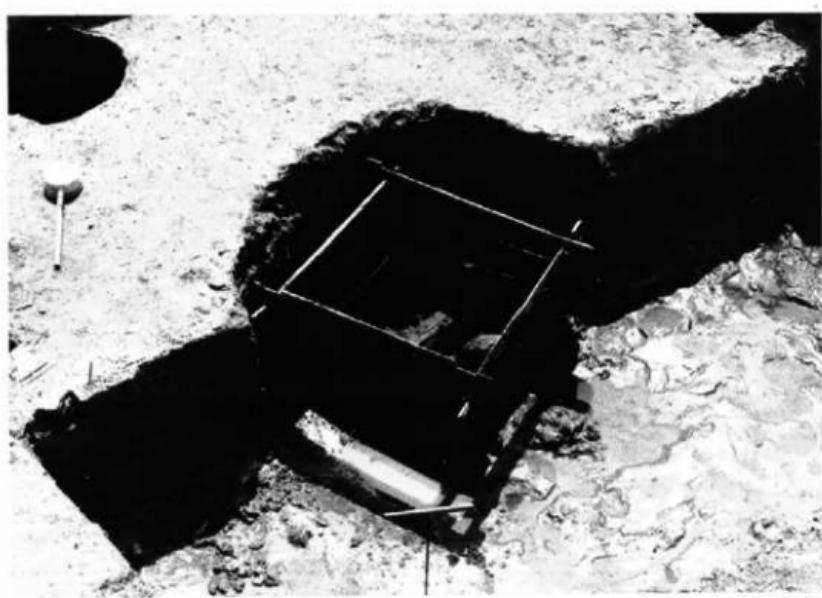
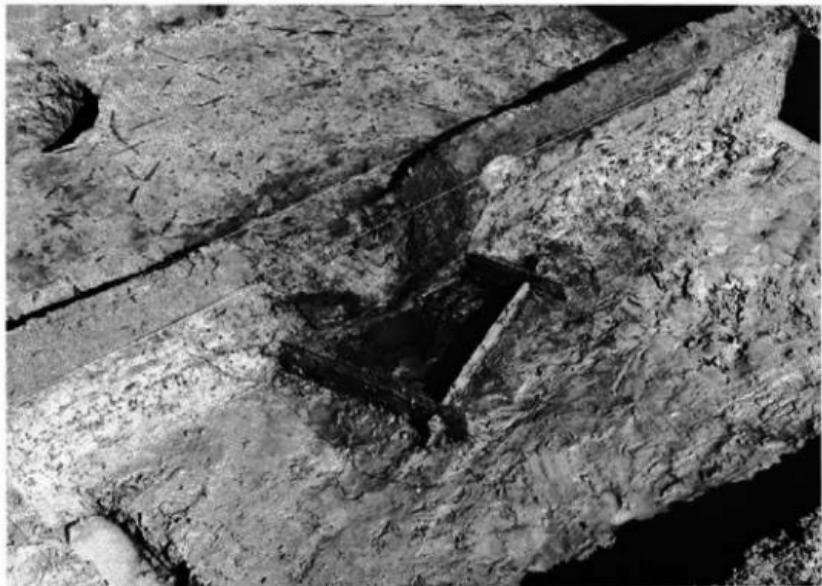
D地点 EB349



D地点 SX3土器出土状態

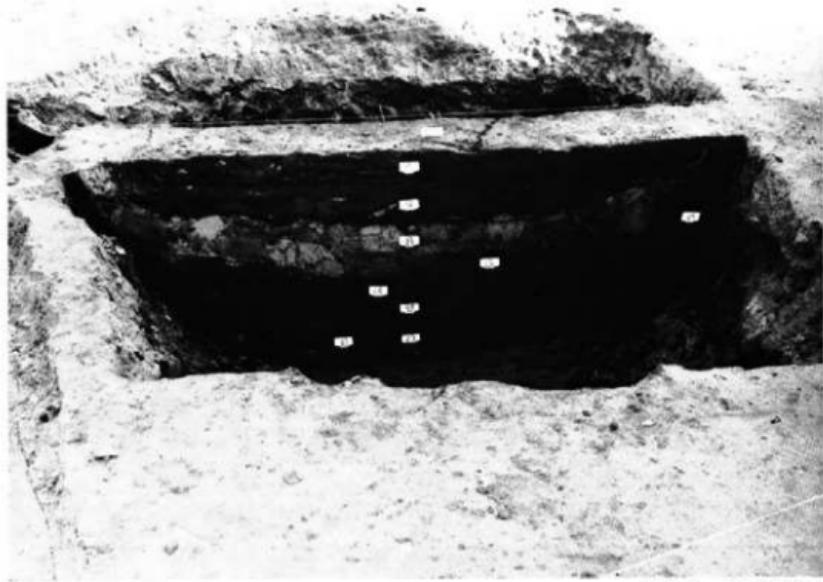


D地点 SE2掘り方





D地点 SE2井戸枠組部分拡大



D地点 SK138断面



D地点(笠地区) 作業風景



D地点 SD104・SD105



D地点 SB8・SE2



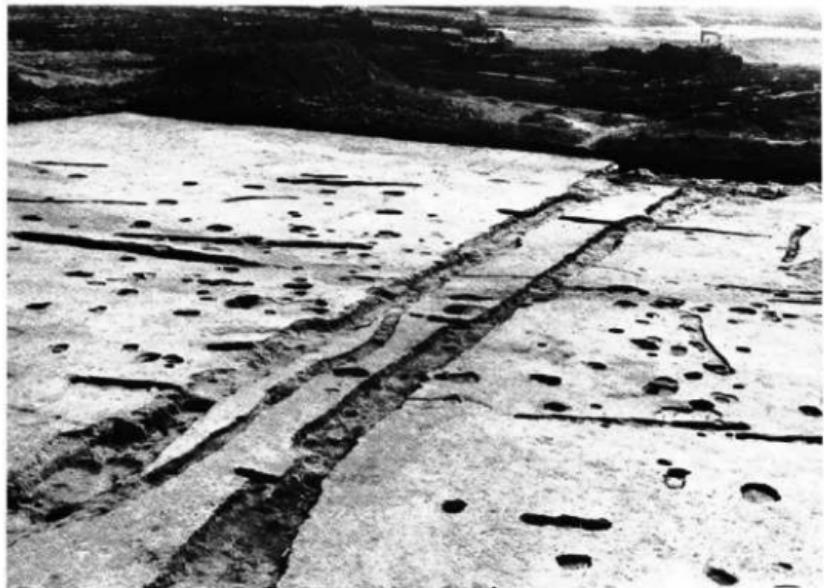
D地点 SB103・SB117



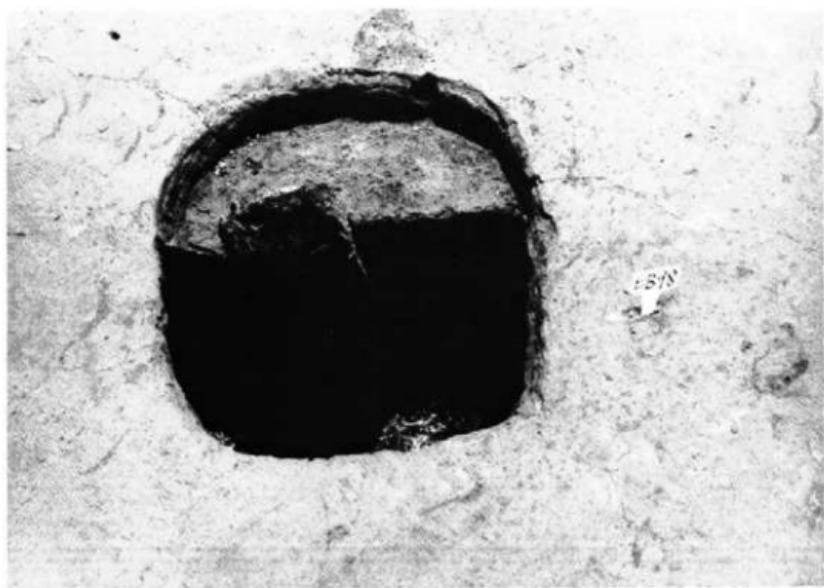
D地点 SB102



D地点 EB13



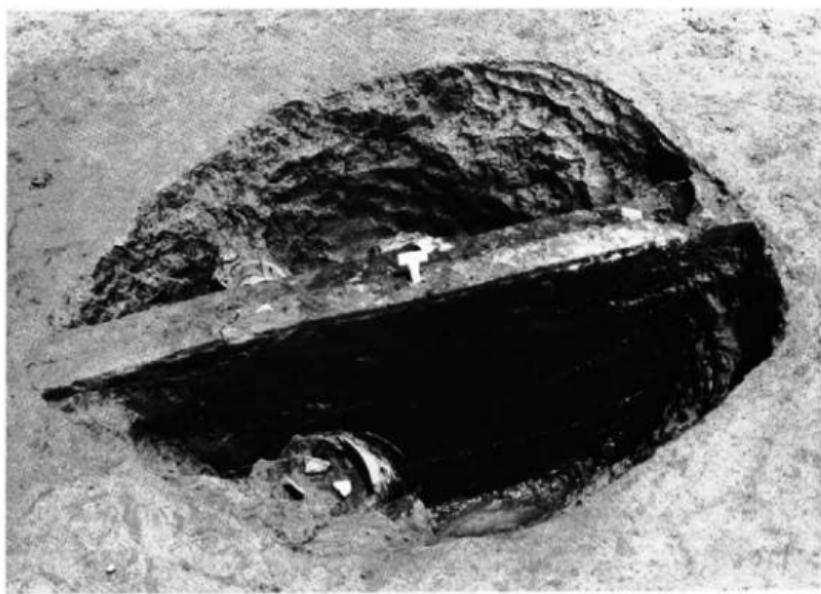
D地点 SB8・SB102・SB110



D地点 E B98



D地点 EB48



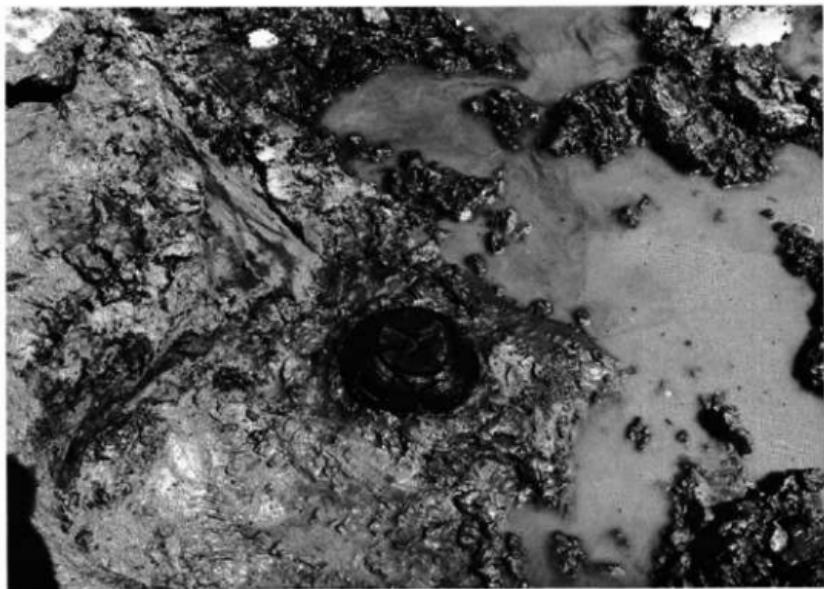
D地点 SE2土器出土状況



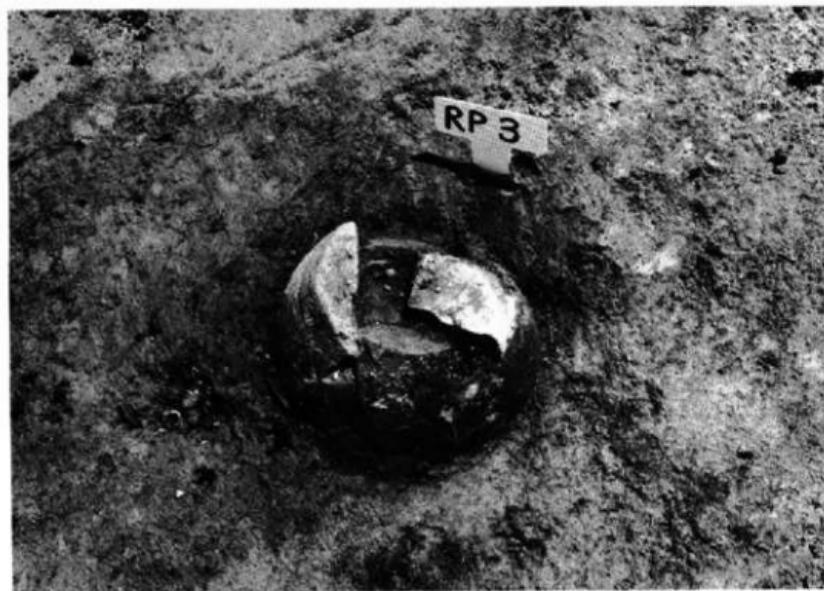
D地点 SE2



D地点 SK128土器出土状况



D地点 RW2出土状況



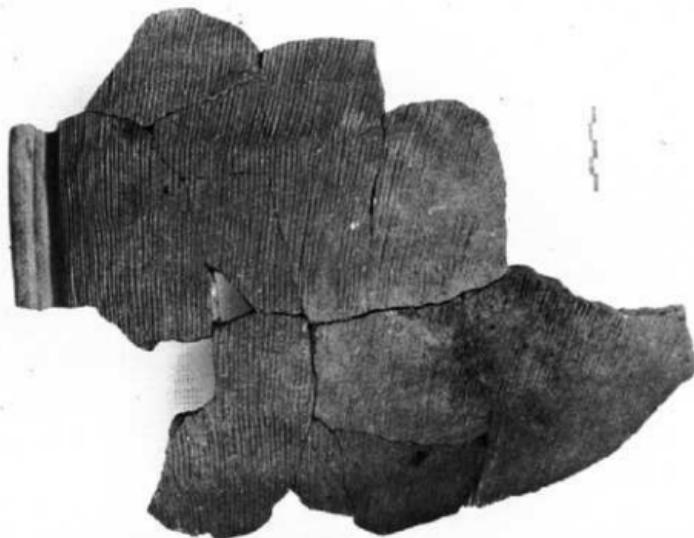
D地点 RP3出土状況



G地点 珠洲烧系陶器（外）



(内)



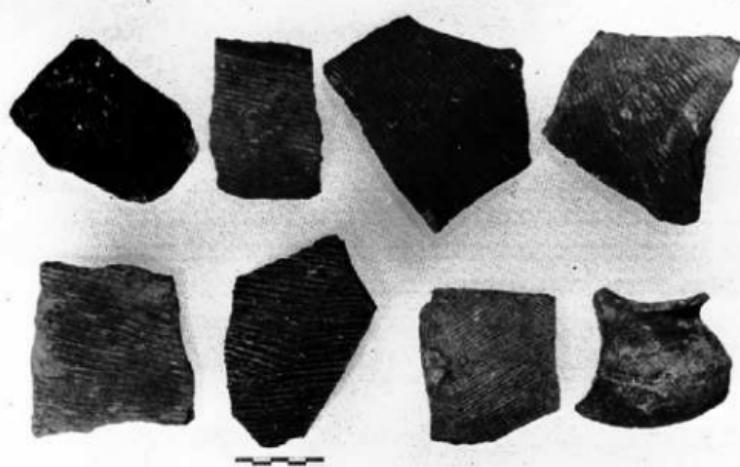
G地点 珠洲焼系陶器（外）



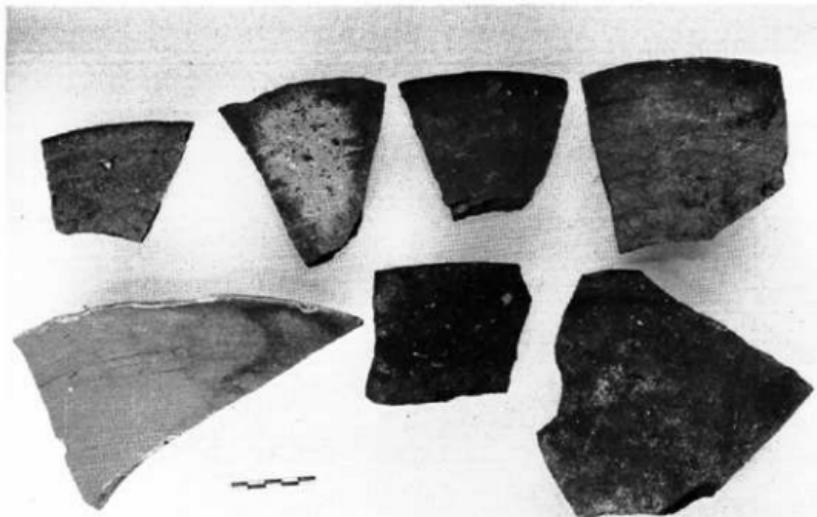
(内)



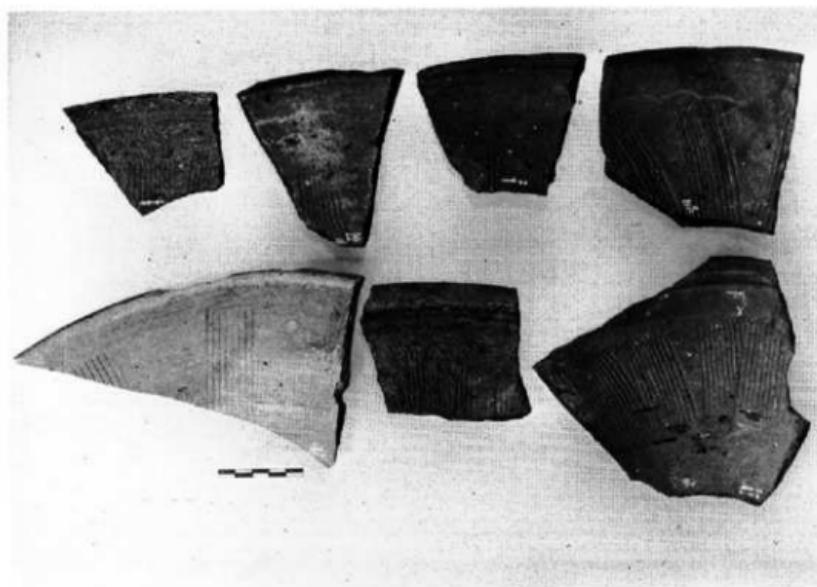
G地点 珠洲燒系陶器



G地点 珠洲燒系陶器



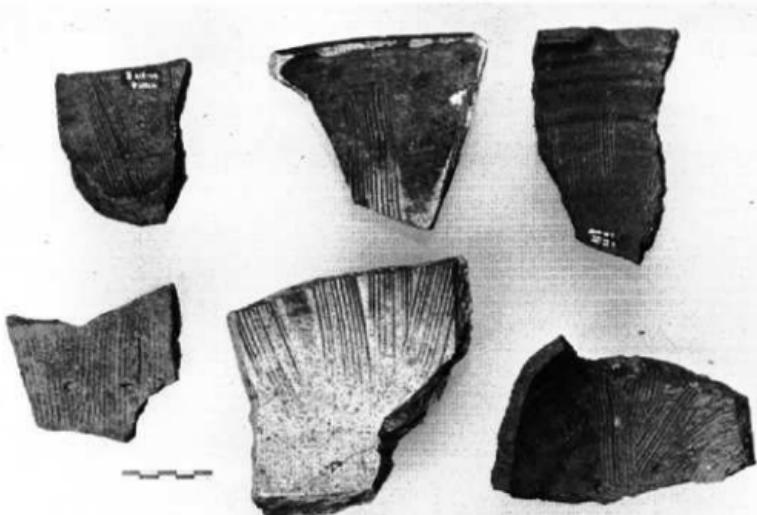
G地点 珠洲焼系陶器（外）



(内)



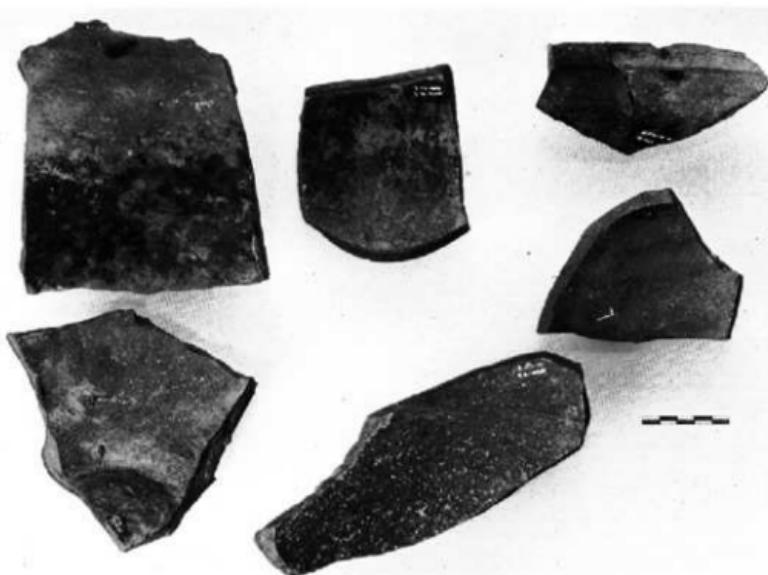
G地点 珠洲焼系陶器（外）



(内)



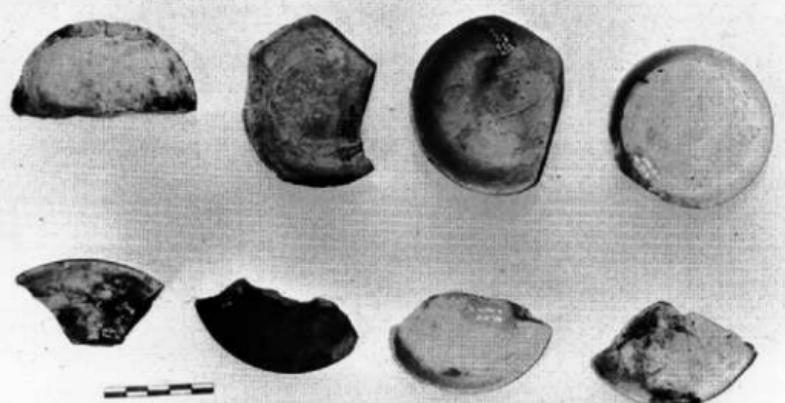
G地点 越前焼系陶器（外）



(内)



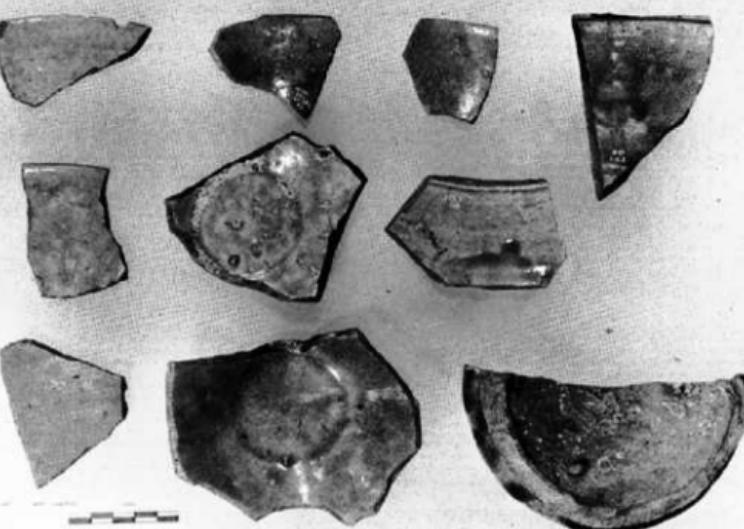
G地点 カワラケ類 (外)



(内)



G地点 古瀬戸系陶器（外）



(内)



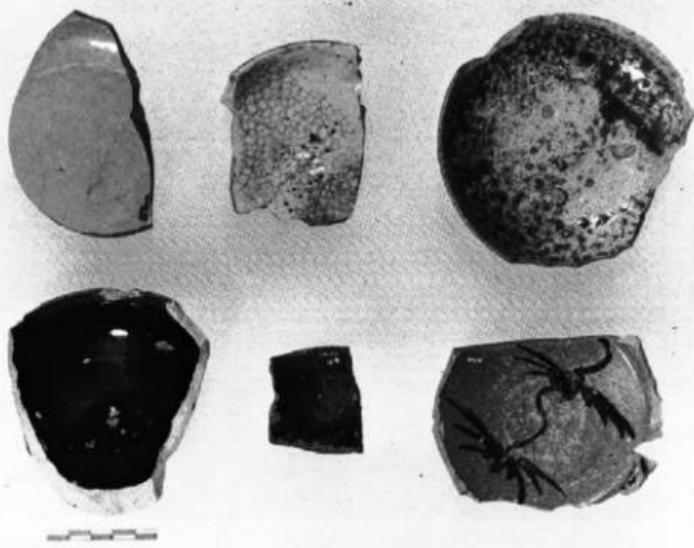
G地点 青磁(外)



(内)



近世陶器類（外）



（内）



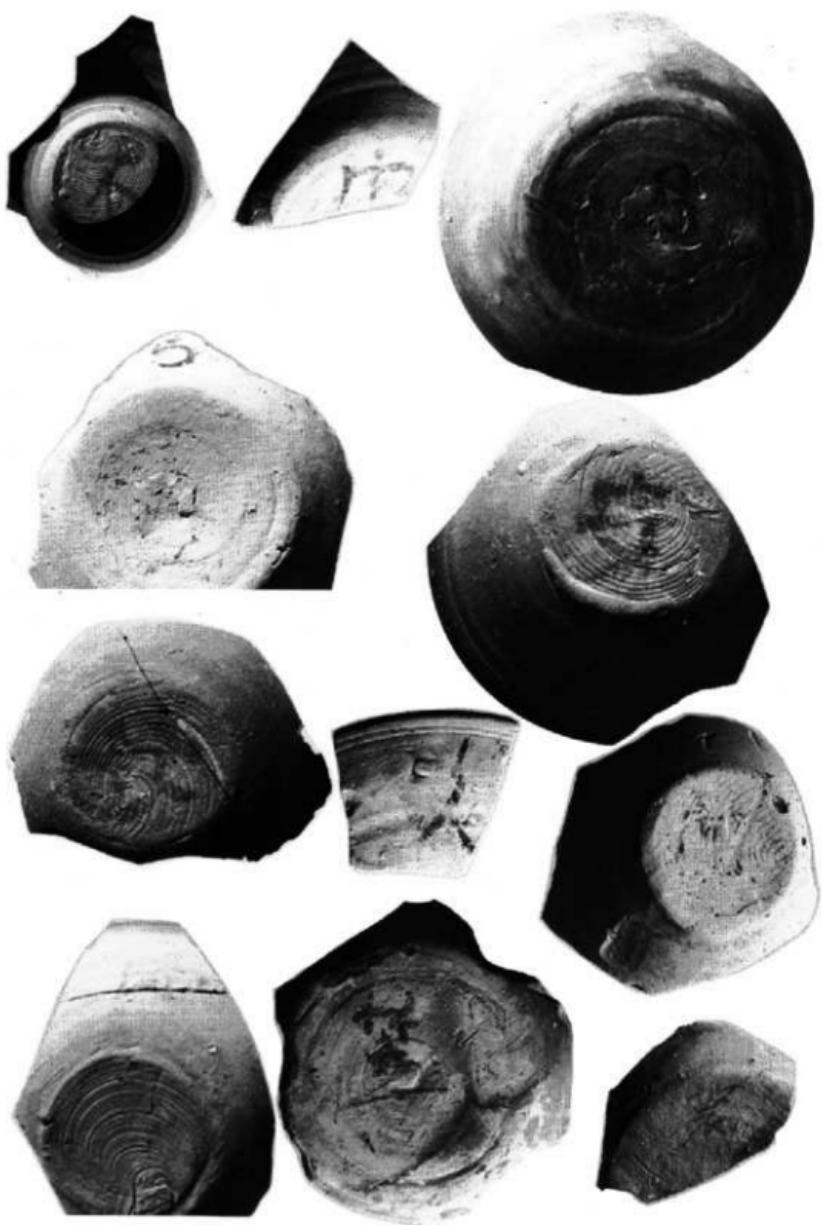
G地点 古瀬戸系陶器



G地点 金属製品



出土木製品



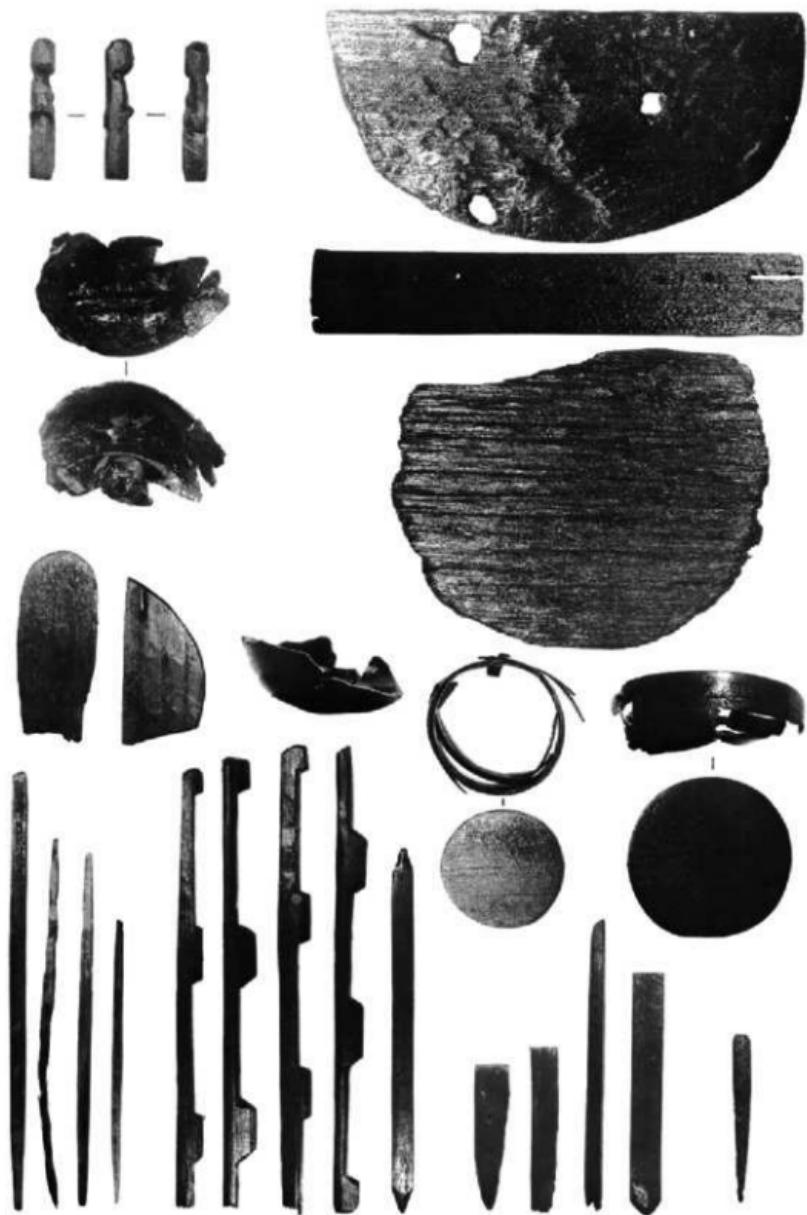
D地点 墓書土器 (1)



D地点 墨書き器 (2)



D地点 墨書き土器 (3)



中京田遺跡出土木製品

山形県埋蔵文化財調査報告書第 26 集

平形遺跡・周辺遺跡

発掘調査報告書

昭和 55 年 3 月 25 日 印刷

昭和 55 年 3 月 31 日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社

鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080(代)
